
悪ノ役者 ある修道女の記録より

奏手由恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪ノ役者 ある修道女の記録より

【Nコード】

N4801P

【作者名】

奏手由恵

【あらすじ】

悪逆非道の王国、黄の国。その頂点に君臨していた王女が今まさに処刑されようとしていた。彼女の処刑を見に来た彼は、今までの罪を反省する。

この先は王女の死しかない。そんな二人の運命を変えたのは、決定的な事故だった。

※悪のP様作、悪ノ娘、悪ノ召使をもとにしています。いろいろと派生動画や独自の解釈もはいつてくると思います。筋書きかなりか

わっているのでご注意ください。

はじめにお読みください

この作品は悪ノ娘・召使を下地にした二次創作です。派生動画解釈もところどころありますし、オリジナルキャラもでています。これらを踏まえてごらんください。

今のところ、第一部、第二部などわけているのは、元となる動画が違うためです。舞台も変わっています。

部は順番どおりに読まなくてもわかるような流れ…で書いていきます。と思います。

参考までに、プロローグ〜第三部の1ページ目までは読了時間が約157分です。

＊（改）はほとんどの場合誤字訂正のあとです

王女の処刑（前書き）

m o t y h様がつくった悪ノ娘、悪ノ召使をもとに独自解釈してくっています。

基本的に設定を下地にしてちょっと結末が違ってきます。

曲を聴いていないかた、特に初見のかたは曲のネタばれを含んでいます。URLははっていませんが、ぜひ先に動画サイトにて本家様をお聞きください。

曲どおりの結末派、その他オリジナル解釈苦手な方はブラウザバツク推奨です。

登場人物&名前は

王女 リナジーン（リン）

召使 レノン（レン）

青い王子 カイン（K A I T O）

赤い娘 メイア（M E I K O）

白の娘 ハク（弱音ハク）

緑の娘 ミレー（ミク）

愛馬 ジョセフィーヌ

○ 内は元ボーカロイド

王女の処刑

広場には多くの民が集まっていた。

私は多くの罪人がそうされたように、断頭台の露になる。当然といえは当然。

黄の国の悪名高い暴君王女。革命軍によって、たった一人玉座の間にいたところを捕らえられた彼女。その姿を見せるため後ろ手に縛られたまま街を練り歩き、広場へたどり着く。私はそれを見るために立ち止まったあと、また歩き出す、ついに処刑台へ上った。

空が青い。一見すると平和。王女が死ぬことで、革命軍が掴んだ平和は決定的になる。

王女が死ぬことでしか治まらないのなら、終わらせてあげる。だからもう、あのこになにもしないで？

王女は赤い髪の娘をちらと見る。赤茶色の髪は短く、こちらをまっすぐ見ている。複雑そうな顔。おかしい。貴女は革命軍のリーダーだ。この結末を望んでいたんでしょ？

横目で、少し離れたところにいる青い王子を確認する。まだ怒り覚めやらぬといった風体。自分の立場がなければ、王女は絶対彼に殺されているだろう。

正体がばれているのかどうかは分からない。でもどちらにしても許してくれないんだろうな。大切な人を奪ったことにかわりはないから。

王女はうつぶせに寝かされ、処刑人二人に強く体を押さえられた。人々の罵声が一段と大きくなる。

処刑の時間は午後3時。この処刑を見届けてから以後、暴君王女を知るものは革命を喜びながらティータムといくのだろう。

最後の言葉は決めてある。最後の願いも。

そのとき。遥か先まで続いている人の波をかきわけてくる人物がいた。男物の服。その上から黒いフードつきの粗末なコート。フー

ドから見える髪は金色だ。馬鹿だな。見に来ることなんかないのに。どうしてきたの。

ああでも、最期をみてもらうのも、悪くない。

幸い人々は処刑台に釘付けになっているので、誰かとぶつかっても気にしていない。喜びの瞬間を分け合おうとしている。

赤い娘は気づいたかもしれないが、今更なにもできやしない。

教会の鐘が鳴る。人々が固唾を呑む。

もう一回。彼女と目があつた。

最後の一回。王女のふりをした僕は、自分のできる最大限の笑顔
を、彼女だけに見せた。

「あら、おやつの時間だわ」

強張る彼女。怒声。

執行人が、刃を下ろした。

王女の処刑（後書き）

すみません。名前を前書きで書いたのに、ここには出てこなかったという。

次はちゃんと出ますから！

乱入者（前書き）

ここから変わってきます。

乱入者

「…え？」

ギロチンの刃は下りなかった。

ざわざわする広場。処刑人はもちろん反王女。手抜きをする訳がない。

慌てた処刑人が再度準備をする。

処刑を待つ一人は、空を仰いだ。

誰も気にしなかった空は、暗い。広場に人々の影が映らなくなる。ぽつりと、水滴が頬に当たった。続いてごろごろという音。

土砂降りの雨だ。だが、処刑は続行するらしい。今度こそ準備ができたと、ギロチンを操作する処刑人。

ぴかっと光って、

遠くにあったはずの雷が、処刑人に落ちた。

「うあっ！」

仲間が倒れ、僕を押さえていた二人が離れる。

眼下では、どこからか馬が乱入していた。

馬のいななき。飛ばされまいと、人々は逃げ惑う。ちょっとしたパニックだ。広場には大勢が集まっているから、将棋倒しにならないといいのだけれど。

馬のうち一頭は、王女の愛馬ジョセフィーヌ。もう一頭の毛並みが青い馬は、知らない。

味方なんていないはずだ。なのに。…唯一考えられるのは彼女だが、盗み見ても呆然としているだけ。

人々を蹴散らしていた馬が、二手に別れた。

青い馬がこちらにくる。処刑台を越え、跳躍中の馬と目があつた。

『のって』

もういないあの子の声が聞こえた。

僕ははずみをつけて横に転がっていき、一段低い位置で止まって

いた馬の背に寝る格好になった。手綱を口で強く加える。後ろ手に縛られている今、こうするしかない。

馬はそれを待っていたかのように走り出した。

「王女が逃げたぞー！！」 「捕まえろー！」

暴徒化する市民。走って追いかけてくるが、馬に追いつけるはずもない。振り返ってみると、もう一頭の馬は、彼女の前で止まっていて、彼女はこちらを見ていた。

遠ざかる。小さくなっていく。

フードをかぶった人間は、小さな声でつぶやいた。

「：連れて行って。」

僕を追おうとして乗り込もうとした一般人何人かをジョセフィーヌは牽制。彼女は決意すると颯爽と跨がり、フードがずれないように押さえながら後を追ってきた。

「馬を出せー！」

青の王子が叫ぶ声。赤の娘は突然のことで動けないのだろうか。指揮をとっていない。

近づいてくる蹄の音。この足音はジョセフィーヌ。

「レノン」

追いついてきた彼女がつぶやく。

「二人で逃げよう。一緒にいよう。今まで別々の道だったけど、これからは一緒」

彼女はフードで隠れてはいたが、笑顔を浮かべていた。

僕はしかたなく微笑んでみて、さらにスピードを上げた。

乱入者（後書き）

自分で書いていて思ったこと。

…手綱大丈夫かな。とても無事に走れるとは思えない…。

いや、自分で書いたんですけどね。

二度目の別れ

人通りのない道を選んで駆ける二頭の馬。レノンの後方を見遣る。明らかに少年ー召し使いの格好をした王女、リナジーンは、疲労の色を見せていた。休んだのは、リナジーンが持っていたナイフでレノンの縄を切ってもらったときくらい。いくら乗馬を嗜むといっても、上流階級の教養といったところ。長時間の乗馬は無理だ。

「リナジーン様、行ってください。二人では無理です。」
リナジーンは息を荒く吐いていた。

「何を…」

「元から二人で逃げるなんて無理だったんです。このままじゃ二人とも死にます。行ってください」

リナジーンは首を横に振っていた。

仕方なく、レノンは馬を止める。彼女も遅れて止まった。

「大丈夫。僕は今まであなたの言うことを聞いてきました。一度だつて、違えたことはない。だから、あとで会いましょう？」

リナジーンは泣いていた。ぽろぽろと、水滴が地面に吸い込まれていく。

「…だして、ジョセフイヌ。」

この馬の世話は、主にレノンが行っていた。だから彼の命令には、忠実。

名残惜しそうなリナジーンを乗せて、ゆっくりゆっくり、距離が開いていく。

「ちゃんと、来てよね、一人にしないで…！」

「リジー。」

僕は今まで心の中でしか呼ばなかった愛称を呼ぶ。小さい頃はリジーと呼んだけど、覚えてるかな？

彼女は黙る。

「先に行つてて。」

リジーを乗せたジョセフィーヌは、加速した。

決心が揺らぎそうだった。

だって、夢みたいだ。僕はあるとき処刑されるはずだったのに。「先に逝くのは僕のほうなのね。」

馬につぶやくと、怒ったようにいかなかった。

馬の毛並みを撫でてやる。綺麗な毛並みだ。

ミレー。

君は僕を許してくれる？

それとも

僕は君を許している？

レノンが馬から下り、手綱を引いて歩きはじめた。

再会（前書き）

ここから緑ノ娘はいります。

再会

あの日。緑の国に入る頃には、夜はとっぷりくれていた。夜空には無数の星と、明るい月。

僕は、緑のあの娘のもとへと行った。

このまえ訪ねた商人の館。庭に侵入し、慎重に窓の中を覗き込む。いくつか覗いて、ミレーの部屋を捜し当てた。

室内にはランプが点されていて、薄暗い。本を読んでいるミレーは使用人の服から、私服なのか青い色の服に変わっていた。

窓の厚さを確認してから、こつこつと叩く。部屋の中のツインテールが揺れた。少し驚いた様子の彼女は、静かに窓を開けた。

「こんばんは。：少し、話さない？」

彼女は静かに微笑んだ。今考えていることを見透かされている気がして、僕は手が汗ばむのを感じた。

口がかわいていた僕は、ぎこちなく頷いた。

「じゃあちよつと待っていて。」

彼女はランプを吹き消したあと、しばらくして、庭に出てきた。

「行きましょう？」

僕は、言われるままに歩きはじめた。

再会（後書き）

この前投稿できなかったのでもうすこし更新…。（次ページ）

痛み

「――私、カイン様から求婚されたわ。」

予告なしの告白。

胸が鋭い痛みにくぐられた。

息が苦しい。いきなり海に突き落とされたみたいに、寒くて冷たくて苦しい。

……でも大丈夫。ミレーは気づいていない。

トーンを落として彼女は続ける。

「君はなにも心配しなくていい。そう言った。でもね、私知ってるわ。そのせいで黄の国の王女様が求婚を断られたことも、一歩間違えばこの国が滅ぶことも」

さきほどとは別の意味で心臓が早鐘を打つ。このこは、危険だ。全ての予想が当たっている。

だから、どうにかしなくちゃ。でも。

……でも？

どうでたものかわからない。理性と感情、計算が折り合いをつけられないでいるなか、またも彼女が口を開く。

「ねえ、貴方に私はどうみえた？」

出会ったときと同じような年相応の口調。

一転した会話に、僕は戸惑った。

真面目に考えるな。深みにはまる。ただでさえ危ういのに。

適当に答えようと思ったが、澄んだ目で答を待っている彼女に嘘はつけない。

気が付いたら、口が勝手にしゃべっていた。

「……最初にみたとき、優しそうに子供に接してた。僕の落とし物を親切に拾ってくれた。笑顔が、綺麗だと思った。」

なにを言っているんだ僕は。これじゃあまるで。

「優しい、親切、明るい。人にはそう見えるのね。」

淋しそうな声。自嘲じみた表情。僕は、そこにただならぬものを感じずにはいられなかった。

「育った環境の関係でね。私は小さい頃から、その三拍子を意識して暮らしたわ。ダレニデモ。ただね、だからかな。人を好きになることがわからない。嫌いな人がいないんだもの。」

雲に隠れていた月が出てきた。ミレーの陰が長くなる。

「友達にね、弱音ばかり吐くこがあるの。自分のことが大嫌いで、今まで一人で生きてきた。そのこは優しくて、つよいのよ。周りを怨まず、自分で抱え込んでしまう。私が自信をもって大切だと言えるのは、その友達だけ。」

ミレーの告白に、僕は絶句することしかできなかった。なんにも困ったことがないように見えたから。悩み事と無縁なんて、実際にはあるはずなのに。

「私が婚約を受けたら、悲しむ人がたくさん出るわ。王女様も…君も」

はっとして顔を上げると、ミレーは悲しげだった。それは、どういうこと？

聞きたいのに聞けない。

「私が断っても、カイン様は退かないと思う。よけい事情がややこしくなるだけ。」

確かにミレーのいうとおり。青の王子は身分相応の婚約を蹴ってまで彼女にご執心なのだ。リナジーンだって、ごたごたが長引くほど誇り高い彼女ははずたずたになるだろう。どちらを選んでも、だれかが泣くことになる。ただ、彼女はそれでも選ぶしかない。

「……君は、どうしたいの？」

「私？」

ミレーは自然に笑顔を見せた。

「君がどうするかで変わってくるわ。」

痛み（後書き）

私事で。

お気に入り小説登録1件、
十小説評価、ありがとうございました！

あきらめ（前書き）

ミレーさんの発言とレノン君の心の中。

ご気分悪くされたらごめんなさい。

あきらめ

「…！」

ばれていた。ばれていた！

彼女を殺しにきたことも、僕が迷っていたことも。

隠しているナイフをにぎりしめ、僕はがたと震えることしかできない。

「優しいね、君は。」

逃げて。逃げて。君が逃げてくれたら言い訳できる。失敗したという。どこかに身を隠し、しがらみを全部捨てればいい。そうしたら……

「どっちに転んでも、先は同じなの。」

僕の思考を先読みしたのだろうか。

いつまでも、彼女は逃げない。

古井戸の前、ミレーは不意に立ち止まった。

「…はやく、終わらせて。」

僕は、彼女の闇に飲まれ、ナイフを取り落とした。

カチャンという音のほうに、ミレーは近づいてくる。

「ごめんね、逃げるなんて選択肢、最初からなかったの。…貴方となら、それもいいかなって思ったけど」

突然の発言に反応できない。彼女はナイフを拾い上げた。

刃先を彼女が右手で包み込むように持ち、そこに左手をそえ、柄を僕のほうに向ける。渡すほうが刃のほうを持つ。それが、刃物の自然な渡し方。

だから、僕はおずおずと受けとった。彼女にならって、両手で。

片手でもらっていれば、なにか変わったのだろうか。

ナイフをもらったとき、嫌な感触が、手に残った。添えられた彼女の手が、離してくれない。ぽたりぽたり。

暖かい液体が手にまとわりついてくる。

僕のナイフを僕に渡して、ナイフを持っている僕の手を暖かいミレ－の手が外側からつつみこんで、刃は彼女の腹部にすっぽりと隠れてしまっている。

「生きても死んでも、結果は、同じ……。私がカイン様と出会ってしまったから、もうどうにも変えられないの」

哀しみと笑顔（前書き）

ミレーさんとレノン君の場面パート2

でっかいのがくると思います。

哀しみと笑顔

ミレーの体から抜ける刃。手が血で滑り、ナイフはカランと地面に落ちる。

ミレーは痛みからだろう。ふらりと体をゆらし、こちらに傾いてくる。

「ミレー！！」

抱き留め、急いで腹部を見遣る。青い服で分かりにくいですが、出血がとまらない。

「すぐ手当を…」

「いいの。」

ミレーは静かに立ち上がると、優しく僕の手を払った。

「あなたに殺してもらったのは、私の……我が儘ね」

嘘だ。僕が殺しにくることをわかったうえで庭に出たのか？
全てを受け入れたっていうのか？

痛いはずなのに、君はどうして笑ってられる。

ミレーはよろよろと後退する。

「友達、の口癖……があるのよ。そのこはなに、も悪いこととして、ないのに。周りが勝手に騒、いでい、るだけで。いつも言うの」

ミレーは大きく息を吸った。

「生きていてごめんなさいって。」

僕には、彼女が心から思っているように聞こえた。長い睫毛が濡れているように見えるのはきのせい？

「あのこには、似合わない。この台詞は、今まで人を騙して、気持ちを踏みにじった、私こそ……」

後退した先にあったのは、古い井戸。バランスを崩す彼女に向かって、僕は精一杯駆け出す。

彼女の体が宙に浮く。

僕は手を伸ばす。何かに期待した顔をした彼女。

細い腕を伸ばし、指がかすりもしないことを悟ると、

ミレーは笑いながら落ちていった。

舞い上がるツインテール。井戸の淵に身を乗り出し片手をついて体をささえ、もう片方で掴もうとしても手遅れ。緑髪もすぐに見えなくなった。

少し遅れて古井戸の中になにかが落ちた音。

ぼくはその場に座り込んだ。

赤くなった手に、少量の返り血を浴びた服。遠くに転がっているナイフ。

命令があったじゃないか。命令は達成した。

けれどこれで終わりじゃない。

きっとミレーは、青の王子と関わった時点で全てを知っていた。どんなことをしてもシナリオの終着は変わらないと知っていた。

視界がぼやける。

目をこすっても治らない。…どうして？

あれ以外に方法はなかったの？

本当に救えなかったの？

殺したくなかったんだろう。死なせたくなかったんだろう。

だってぼくは、

「あ……………」

溢れる水がとまらない。

だって僕はミレーのことを、
一目あったときから好きになっていたんだから。

本音と決心（前書き）

原作から離れていってしまいます。

本音と決心

レノンが馬を引いて歩いている。あおい馬はいなくなることなく、大人しくついてきていた。周囲には人っ子一人いない。聞こえるのは一人と一頭分の足音だけ。ドレス姿のレノンは地声に戻り、ぽつりとつぶやく。

「ジョセフィーヌと君がきたとき。あの天候も含めて、僕はミレーが助けてくれたのかと思った。今も、君が馬の体を借りているか、転生してきたんじゃないかって考えてる。」

黄の国周辺では、人は死んだら生まれ変わるという思想が一般的だ。生前正しい行いをして徳をつんだ者は再度人間、あるいは自分の望むものに転生できるとされる。

逆に、罪を犯したものはそれなりの報いを受ける。多くが望ましい忌み嫌われる姿になったり、武器として転生し、身をもって人を殺したり。だから悪いことをしては駄目と、子供達は言い含められる。なかでも罪が重いものは、鎖で両手足を戒められ、永久に罪を背負わなければならないという。

「僕は罪深い人間だ。ミレーを殺して、その結果何人死んだだろう。……革命のきっかけをつくったのはリナジンだ。でも実際に引き金を引いたのは僕だよ。ミレーが生きていれば、青の王子の怒りもあそこまでならなかっただろう。」

レノンはなおも淡々と歩く。あおい馬はもの言いたそうにレノンを見ている。

「革命が起こって、何人もの人が死んだ。……いや、ミレーだけで充分だ。僕は、助けられなかったんだ。……リジーを助けたかったのも、もしかしたら、僕が死にたい気持ちの裏返しかも。」

レノンは空っぽになった街を歩いていく。中心地から離れているので、民家も疎らになってきた。

「死ぬのは怖くなかった。リジーを助けたかったのは事実だし、贖

罪しかったのもそう。ただ、助かったから、あるとき、死ねなかったから」

レノン は俯く。風邪をひいてもいないのに鼻をすする。

「僕は、生きたいと思ってる。リジーと一緒に生きたいと思う。…変だよ。一度は死のうと決めたのに」

あおい馬は、自らの頭をレノンに擦り寄せた。

レノン は立ち止まって、馬の首をなでてやる。

「僕がミレーを殺したのに。革命で何人もの人が死んだのに。…死にたくない。」

レノン が地面に座り込む。歩く過程で地面に擦れ、裾が汚れたドレス。それがさらに土にまみれ、しわになる。

「生きたい…生きていたい。でもこんなこと思う僕は、汚い!!」
雫がとめどなく地面に吸い込まれていく。馬はおろおろとレノンのまわりを回っている。嗚咽がやむことはない。

どのくらいそうしていただろうか。先に気づいたのは馬のほうだった。

「…どなた？」

声のするほうをレノン がみやると、民家の扉が開いていて、一人の女性がこちらを見ていた。

水気がある目と女性の目が合う。数秒間見つめ合い、女性は歩み寄って座り込んでいるレノンに手を伸ばす。

「よければ休んでいきませんか？」

疲れが滲み出ているが、微笑を浮かべた顔。優しさが温か過ぎて、レノンはまた雨を降らせてしまう。

躊躇しながらも、レノンはさしだされた手を握りかえた。

水に流れるもの

長年修理ができていなかったからか。あちこちに傷んだ箇所が見受けられるものの、家は比較的大きかった。

家のすぐ隣に建てられている簡素な厩にあおい馬は他の馬とともに繋がれていた。

女性はレノンを招き入れると、開口一番、やんわりと諭す。

「服もぐしゃぐしゃになっているし、ひどい顔よ。お風呂使っていないから洗っていらっしやいな」

レノンはその好意に甘えることにした。

体力の消耗を防ぐため、体を簡単に流すだけにする。その後顔を念入りに洗う。液体が固まっていた部分の洗い甲斐があったので、自分がずいぶん泣いたのだと分かった。まだ泣ける涙が残っていたのかと思うと、複雑になる。まだふっきれてはいないのだ。立ち直ったとしてもそれは吹っ切れたことではないし、度重なる幸運が重なってこれから笑って生きていけたとしても、自分の犯した罪は消えない。

忘れることはないだろう。

顔を洗って、渡されたタオルでふいていると、脱衣所に人の気配がある。

「着替え、ここにおきおきますから。」

レノンは反射的に返事をしようとして、思い留まる。一呼吸おいて、調子を整える。

「はい、ありがとうございます。」

少し高い声で返事をする、女性は静かに去っていく。…あやうく地声で返事をするところだった。

レノンは脱衣所に人がいなくなったのを確認すると、風呂から上がり、用意されていた服を見る。

「……」

その服にけちをつけるわけではない。このご時勢から見るとよくも見ず知らずの人間に上等な服を貸してくれたとしかいえない。ただ、レノンは躊躇せずにはいられない。これ以上の厚意は受けられないから。そう押し通して自分の服を着ることにしようか。

だが自分の着てきたドレスはすでにどこかへ片付けられてしまっている。レノンの思惑はあえなく砕け散った。

「はあ…。」

レノンは観念して、その服に袖を通した。

水に流れるもの（後書き）

中世の風呂事情がよく分かりません。
ちよつとやつつけで書きました↑

遅くなりましたが、お気に入り小説登録&ユーザー登録ありがとうございます！
ございます！

周囲の影響（前書き）

世界って広いようで狭い。

周囲の影響

リビングに行くと、女性は湯気立つカップを二つ用意して、食卓に座っていた。

「さあ、座って。」

レノン は促されるまま座る。

女性がカップに口をつけるのを見て、レノン も紅茶を飲んだ。

「うん、よく似合ってる。」

女性は満足そうな顔。その正面で、レノンは反応に困り、曖昧にわらった。

レノンの服装は、下が黒のスラックス、上が白シャツだ。

「なんだかドレスになれていないみたいだったから動きやすい服装を選んでみたの。」

動きやすい。確かに動きやすい。これは王宮にいたときに着ていた服と同じような、それより動きやすいものだ。

ただ、世間では女性はスカートが一般的。スラックスをはくのは騎士階級の令嬢か、上流階級の乗馬スタイルのみ。しかもレノンに渡されたのはご丁寧に男物。：正体をばらしているのか、またもうばれているにしてもどう対応すればいいのか。レノンは判断に迷っていた。そんな迷いを知ってか知らずか、女性はころころと表情を変えていく。

「あ、ごめんなさいね。私のお下がりはおうぼろぼろだったから。男物で悪いけど、その服はあまり袖を通していないの。ちょうど大きさも同じくらいでよかったわ。」

ぼろでもいいからスカートがよかった、とは口に出さない。座っているときなど特に、女性が絶対にしないようなはしたない真似、たとえば足を開いてしましそうになる。意識して行儀よくしていると、女性はあつと声を漏らした。

「――あいさつが遅れたわね。私はリラン。：あなたの名前は？」

レノンのはほんの一瞬だけ、眉根を寄せた。しかし、口を開いたときには笑顔を浮かべる。

「リナと言います。服のことは気にしていません。それどころかこうして休ませていただいているだけでありがたいです。」

レノンは騙し続けることにした。そこまで女顔だとは思っていないが、リジーが着けていた髪留めをつけていることでカムフラージュできたらしい。

だが問題はそれだけではない。牢に閉じ込められていたので、ここ何日かの情報が分からないのだ。これからの動きを立てるため、彼は頭をフル回転させた。

「そういえば、このあたりで人を全然見かけなかったのですが、どういうわけでしょう？」

分かりきったことだ。どんな世間知らずなお嬢さまでも、田舎領主の娘でもなければ理由くらい分かるだろうに。当たり前のことを聞いて質問の抵抗をなくさせる。誰かに聞いた方法。女性は律儀に答えてくれる。

「ああ……。このまえ革命が起きて、王女が捕まったでしょう？ここからだと中心地へ歩いていけない距離じゃないから、みんな処刑を見にいったわ。」

レノンは相槌を打ちながらいぶかしむ。病で伏せっているなら別だが、リランが残っている意味がわからない。

「リランさんは見に行かなかったんですか？」

彼女はうまく笑おうとして失敗した。

「私の主人はね、革命軍に入ったの。やるべきことをやるというって、けどまだ戻ってこない。」

レノンの視線の先では、リランが涙をこらえている。

「だから私は、家を空けるわけには行かないのよ。例え幽霊になっても帰ってきて、きちんと迎えてあげないと。」

レノンは居たたまれなくなつて目を伏せた。リランがガーゼのハンカチで鼻をかんでいる音だけが響いていた。

誰かの為（前書き）

リランのキャラがつかめない。

予定よりそれた気がします。

原作要素はどこに隠れたのでしょうか。

誰かの為

しばらく経って、その音が止んだ。

「ごめんなさい、みつともないところを見せてしまつて。」

いえ、と返事をした拍子にみた顔は、瞼が赤かった。

「私はね、思うわ。」

リランは毅然とした態度で、レノンをみやる。

「誰かのために何かをすることは、とても尊い。だけどそれは、自分が犠牲になることじゃないの。」

リランの言葉が、レノンの身体の奥深くへ浸透していく。彼女は若者の表情を察知しないまま続ける。

「やっている当人は使命感で一杯かもしれない。自分で決めたことだったら後悔はしないでしょし、道半ばで倒れても、できなかったことに悔やみこそするかもしれない。後悔はないはず。けれどそれは、私に言わせればただの

…自己満足よ。」

苦しい。痛い。

どうしてこんなに言い当てられるんだろう。さつき会ったばかりの人なのに。

レノンは胸を抑える。焼けるように熱い。

吐き捨てるように言い放ったリランは、なおもしゃべり続ける。

「どうして一人で抱え込むの。いつも一人で解決しようとして、自分のことは後回し。自分のために動いたことが一度だってあるの？」

レノンはリランを見ていなかった。

頼れるのは自分一人。魑魅魍魎とした王宮で、リジーを支える人は皆無だった。だから、いつも彼女のために動いた。望むことは何でもした。

それは間違いだったんですか？

一人で行動する以外、どんな方法があったというんですか？

だって僕を助けてくれる人はいなかった。

僕たち双子に手を差しのべてくれる人なんていなかった！

リランは立ち上がって、テーブルを回るとレノンの横に立ち、肩をそっと抱いた。

「仲間がいけないときもあるでしょう。大切な存在だってあったんでしよう。ただ、覚えておかなくちゃいけないのは、自己犠牲だけはやってはいけないってこと。したほうは死んだら終わりかもしれないけど、されたほうは重荷を背負って生きるのよ。」

レノンの肩に置かれた手は、暖かった。彼の脳裏には、双子の姉が思い浮かぶ。処刑前の広場。二度目の別れ。別れを切りだしたのは、いつも自分からだった。その度にリジーは、青白い引き攣った表情だったのだ。

「守られる側も思っているはずよ。私はそんなに弱い存在なのって。」

レノンの前には、泣いていた未亡人の面影はなく、強く凜とした女性の姿があった。

刹那、二人は真剣な眼差しで見つめ合った。その均衡を不意に崩したのはリランで、彼女はあろうことか笑った。

「さて、と。これだけ夫の悪口いっても出てこないってことは、きつとまだふらふらしてるのね。：今度教会に行って成仏の手助けをしていたらどうかしら。」

茶目っ気たっぷりな彼女は、踵を返す。

「お茶、もう一杯入れてくるわね。」

その言葉に、レノンは紅茶が冷えきってしまったことに気づく。足音が遠退くにつれ、目頭が痛くなってきた。

顔を洗ったばかりだというのにとめどなく流れ落ちてきて、手の甲でぬぐっても間に合わない。

冷えきった紅茶を飲み干す。涙はまだ枯れない。

うつむいていると、テーブルにカップが置かれた。見守っているリラン。一回り小さいカップに入った熱い紅茶。レノンはちいさく

礼をすると口をつける。

温かい温度が身体を掛け巡る。冷たい身体を自覚し、反則の温かさ
さに包まれ、余計に涙がでる。

そういえば、最近泣いてばかりだ。

誰かの為（後書き）

後ろから二行目は、実体験？というか自分で思うことです。

家族

お茶を持ってきてくれた後、リランは新しいハンカチをおいた後は、レノンをそっとしておいてくれた。それがとてもありがたかった。彼女は奥のほうでなにか作業しているらしい。食器洗いなら手伝えるが、そういうわけでもなさそうで、彼は干渉しないことに決めた。

落ち着いて室内を見ると、意図的といっていいほど装飾が少ない。まわりの家より裕福そうに見えるのだから、装飾品の一つや二つあってもいいだろうに。市井の女性が嗜む刺繍をかけているわけでも、野に咲く花の一輪挿しを飾っているわけでもない。テーブルは木目が剥き出しで、レノンが見るかぎり飾り気があるのは、棚に収納してあるバスケットに掛けられているレースのみだ。

少々無作法だとは思いながら、王宮暮らしの習慣で部屋を観察する。ふと、収納ダンスの上で目が止まった。

なにかが飾られている。

レノンは席から立ち上がると、それに置かれている物体を見る。

写真立て。若いころのリランと、彼女の夫。そして

「私の家族よ。」

いつのまにか背後にいたリランは、写真立てを取り上げた。

「もう私だけだけど。」

背中がこれ以上の質問を拒絶していた。

レノンは追いかけようとして、できなかった。

リランが外へ出ていく扉の音が、大きかった。

数分して、彼女は慌てて戻ってきた。

「こっちに来なさい」

手を引っ張られて、レノンは勝手口へと連れていかれる。そこでリュックと焦げ茶色のベスト、黒のハンチングを渡された。

「かばんの中には必要最低限の荷物が入っているわ。服は着てもきなくても。」

突然の展開に、レノンは面食らう。

「一体…」

「あなたは王女でしょう？」

レノンは沈黙した。冷静に考えたら、あんな服装で王宮の方向からやってきたのだ。疑われないほうがおかしい。

「…迷惑をおかけしそうなので出頭します。短い間でしたがありがとうございます」

「なに言ってるの」

リランが勝手口を開けると、彼女の所有している馬が待機していた。

「逃げるのよ。」

レノンは彼女が本気で言っているのだと分かる。だから分からない。

あなたは どうして。

「…あなたが王女の振りをした男の子だから。」

柔和な微笑みだった。

約束（前書き）

どうしてボタンの位置が違うのかが自分でも思います。

約束

金髪に青い瞳の彼女は、きれいだ。ただし性格は食えない。

「：なんで」

「男物のブラウス着るのに手間取らなかったから。」

性別が違うと、ブラウスのボタンの位置が変わってくる。確かに、そうか。普段着慣れないボタン位置だったら、時間がかかるだろう。そこまで気がまわらなかった。リランは続ける。

「私は言ったわよね。自己犠牲は自己満足だって。だから、逃げなさい。」

断ち切りがたい誘惑だった。けれどここは踏み止まらなければいけない。

「僕が王女として捕まらないと、うまく収まらない。」

リランはきつと睨むと、右手でレノンを打った。

「思いつかるのもいい加減にしないさい！あなたの変装は、革命で興奮しているときは通用するかもしれないけど、もう無理でしょう。最悪あなたも、王女も捕まって終わりだわ！！あなたの過去も王女との関係性も私は知らない。けれど：あなた、かわりに処刑台に立ったわね？」

レノンは、正直にうなずいた。リランはため息を大仰につく。

「：王女の振りをしていたあなたが処刑されなかった以上、逃げてしまったから：革命軍は本物を血眼になって探すでしょう。もうあなたたち二人と一緒に逃げ延びるしかないのよ。」

リランは一気にしゃべると、赤くなったレノンの頬を撫でた。

「さっき外にでたとき、早馬が国境付近に出向くところだった。まさか緑の国に亡命するとは思えないけど、保険でしようね。街道の側に林があるから、そこを通りなさい。そのあとは海沿いにまっすぐ進んで教会へ。きつと受け入れてくれる。」

リランは言い聞かせるように説明する。説明が終わるか終わらな

いかのとき、複数の馬の蹄の音がした。

「…きつと革命軍よ。はやく行きなさい。青い馬は目立つから、それを含めて私がなんとかしてあげる。」

ドアを叩く音がする。レノンはこのときになって、ようやくリナジーンの気持ちの方が分かったような気がした。

「…ごめんなさい。」

レノンはベストを着てハンチングを被り、リュックをしよう。馬の状態を見ると、扱いやすくなかなか走りやすそうだ。

ドアの叩かれる音が一段と強くなる。リランは名残惜しそうに用意を見ていたが、玄関のほうへと向かう。

「…今度会えたら」

木に繋がれている馬のロープ。外しながら言うレノンに、リランは立ち止まった。

「レノンと呼んでください。僕の本名です。」

もしもし？ いるんでしょう？

呼びかけの声がここまで聞こえる。

「…はやくいきなさい。また会うまで、生きるのよ。」

返事の代わりに、レノンは馬を蹴った。始めてとは思えないくらい、馬ははやく走った。

どんどん景色が過ぎてゆく。見えてきた林の中に突撃する。がさがさという音を出しながら、レノンは教えられた通りの道を進んだ。

塩辛い水（前書き）

リグレットです。

塩辛い水

濃い紫と明るい紺の間。今日の夜空はそんな色だ。満点の星空の下。寄せては返す波打際。リナジーンはコルクで栓をした瓶を片手に海へと入っていった。いつだったか、彼が教えてくれた言い伝え。瓶に願いを書いた紙を入れ、海に流すと願いが叶う。そんな子供騙し。昔の私なら、そう言っていただろう。

私は欲しいものを何でも手に入れてきた。願いは何でも叶えてもらった。でもそれができたのは、私がなにかしたからじゃない。私が王女で、使える財産が多く、我が儘を聞いてくれる召し使いがいたからだ。

私はなにもしていない。

私が自分の欲求のために動いたことなんて、一度もない。

リナジーンは瓶をそっと海に流した。最初は自分の近く。だんだん遠く。

私に力なんてない。王女でない今、私は無力だ。あやふやなものにすがりつかなければいけないくらい、私は弱い。

瓶は、目視できる場所にあるが、動かないまままで捕まえられるほどの距離にはない。

行ってしまう。離れていく。

…行かないで。

不意にリナジーンは、瓶とレノンが重なって見える錯覚に襲われた。水しぶきを立てながら瓶に近づいた。

思うように進めない。足首までの水がふくらはぎまで到達する。もうすこし。走り込んだままの姿勢で瓶を掴もうとした彼女は、足をもつれさせ、盛大な音と飛沫を立てて転んだ。

口のなかが塩辛い。自分を叱咤し、塩水を滴らせながら彼女は起き上がる。立ち上がりうとして、瓶を視界に入れた彼女は膝をついて座り込んだ。

瓶が遠のいていく。いつもレノンは自分の手の届かない場所にいる。私が笑うために彼は泣く。ひどい命令を下したあとも泣き顔を見せずに普段通りに振る舞う。

「…ごめんなさい——」

あなたにつらいことをさせてごめんなさい。私が悪い。全部悪い。我慢しなかった私が悪い。殻に閉じこもっていた。甘えていた。暗い部分を全部あなたに押し付けていたの。

「ごめん、なさい…」

私、遅いね。なにかも手遅れだね。だから、泣いたって意味ないかもしれないんだけど。どうしてだろう、顔がまたべたべたするの。視界がぼやけるの。

後悔しても、やり直しは利かない。もとなんか戻らない。

海水があなたが貸してくれた服からしたり落ちる。瓶が遠くなっていく。もう届かない。

リナジーンは、夜の海でただひとり泣き続けていた。瓶の姿は見えなくなった。

私、なんでも欲しがった。手に入れたものは私だけのものだった。でももういい。

調度品なんかいららない。ジョセフィーヌも逃がした。おやつも食べなくていい。

手遅れにしたくないものは一つだけ。

レノンを、連れていかないで。また会って、一緒に生きたい。

一人は嫌。一人は嫌なの。

頼り切らないから、また戻ってきてよ。
お願いします。

やりなおすチャンスをください。

悪逆非道の命令を下した私には、過ぎた願い。

この願いは、見のほど知らずの傲慢だって分かってる。
わかってるけど、神様。

願うくらいは許してよ。

塩辛い水（後書き）

気合入れてかきましたー。

休息

夜だ。馬を休ませるために軽く流して走ってもみたけど、追っ手は影さえ見えない。リランが何とかしてくれたのかもしれないが、油断は禁物だ。

何度目かの後方確認で、レノンバランスを崩した。

「ー！」

馬が離れる。手綱が滑る。空中に投げ出され、レノンはとっさに受け身をとった。

どさっという音。着地したのは幸い草が生い茂っているところだった。

馬が人を載せていないことに気づき戻って来る。レノンは星空を見上げた。

馬も疲れている様子。見たところ普通の荷を引く馬だ。ジョセフイヌみたいな早馬の訓練を受けたものと一緒にはいけない。

「…いつ」

骨は折れていないようだが打ち身がさりげなく痛い。レノンは役にたつものがないかと、馬にくくりつけられていた革袋を開ける。

傷薬、携帯食料。そして水分を多く含んだ果物。

休めということなのだろうか。

「…お食べ。」

レノンは馬に果物を半分分け与える。火打石も入っていたので、レノンは落ち枝を集め、火をつけた。

今夜はここで野宿。

追っ手がきたらすぐ逃げる。そう割り切って今は体力の回復。まだあの処刑から一日と経っていないのに、なんていろんなことがあったのだろう。

よかれと思ってしたことが、人を傷つけること。自分の甘さ。罪と罰と許しと命。ぐるぐると回っていく。

精神か身体的か。吐きそうな気持ちをこらえる。

もう逃げるしかないんだな。

レノン燃え上がる火をみながら思った。

休息（後書き）

とつても調べたりないことがたくさん。
やっつけです。開き直って↑書いていきます。

それは朝になるまえ、一夜の悪戯（前書き）

気合をいれた部分パート3？

事情により改行部分が多くなっています。

改行嫌いなかた、ごめんなさい。

それは朝になるまえ、一夜の悪戯

月が高い。物音一つしない林。不意にさわさわと風がふく。木々の葉、馬のしっぽ。レノンの前髪。丁寧な撫でられていく。

……よかった。無事に逃げられたね。

声がする。

『だれ？』

僕はのろのろと目を開ける。

声の主は見えない。聞き間違いか。そう思ったときだった。

……とにかく、もう私は助けてあげられない。ここからは、一人で逃げて。

声色が、意識を覚醒させた。

『ミレー？』

声の主は、僕の問い掛けに答えない。周囲をきよろきよろ見回して、無意味なことだと知る。

……私、あなたのつらいところや、寂しい顔を見たくないの。だから、笑って？

声は勝手に、自分の言いたいことを言うだけだ。

『なに言ってるんだよ。笑うなんてそんな』

僕は虚空に向けて反発する。もともと生きていること自体、許されていいのだ。笑って生きていくなんて罪深い。できるわけがない。

……あなたが笑ってくれないと、私が助けた意味がない。背負っていることを忘れてはいけないけど、楽しいことをしてはいけないっ

てことじゃない。

あたりに怒ったような風が吹いた。前髪が僕をたたく。僕はなにも言えなくて、黙り込む。もたれていた木の幹がざらついている。これは夢か？感覚があるから夢じゃないのか。

……私、あなたに笑っていてほしい。そしたら私もうれしいの。

ふわりと、緑の髪が舞い上がる。今はもういない彼女の姿が現れる。

……これが、人を好きになることなのかしら？

ミレーは僕の目の前で、にっこりと笑った。あのとときとおなじように。けれど混じり気のない心からの笑顔だった。

『ミレー、僕は』

彼女は小さく首を振った。

——バイバイ。

突風が巻き起こり、僕は目を開けてはいられなくなる。数瞬のちに目を開けると、彼女はいなくなっていた。

行き場を失った声が、思いが。

溢れてきてどうしようもない。

『……っ、この、卑怯者っ!!』

僕の声だけが反響した。

いつも、いつも君は自分の言いたいことだけ言って、僕の前から去ってしまう。僕の気持ちなんか、これっぽっちも考えてくれないんだ。こっちがどきりとするくらい、的確なことを言ってくるのに。

いつからこんなに弱くなったんだろう。強くなくちゃいけないのに、いつ涙は枯れてくれるの？

——レノン。

遠くから微かに君の声。僕はがばりと顔を上げる。夜闇のなか、月明かりに照らされる。

——笑ってよ。

僕は、口を半開きにせずにはいられなかった。しばらくにも言えなかった。

いつだって君は、残酷な願いを言うね。笑顔でさりと口にする分、僕が知っている王女よりひどいよ。

彼女の願いを叶えてきた。君の願いも、結果的に僕は叶えた。

僕は願いを叶えるための方法をいくつも知ってる。自分の願いを叶えたことは、最大のわがまま以外ない。

僕だけの願いはもう叶わないのに。君は死んでからも願うんだね。いいよ、君の願いを叶えてあげる。

『ミレー。』

だから、これくらいは許してよ。

『…大好き。』

涙がこぼれないようにして、僕は笑った。

返事の代わりに、やさしい風が吹いた。

僕の願いは絶対に叶わない。僕のエゴは、貫いたつもり。

さようなら、緑の女性^{ひと}。

あなたのことが大好きでした。

レノンは夜明け前に目を覚ました。目やにをこすって、消えたたき火をみる。

彼は大きく伸びをした。

叶わないことはある。どうにもできないことがある。

けれど、これからできることもある。

レノンが叶えたい願い。

彼はそのための第一歩として、眠っている馬につけられている袋から、携帯食料を取り出した。

かつこわるくたっていい。

リジーと共に、僕は生きる。

それは朝になるまえ、一夜の悪戯（後書き）

原作どこにいったんでしょうね。

なんだか一区切りついたような気がします。

出会い（前書き）

新しい舞台、開始です。

出会い

パイプオルガンが鳴り響く。曲目は教会の賛美歌。厳粛な和音から構成され、両手はスローテンポながら、美しい調べを奏でる。それが不意に不快な音を立てて止まった。

いつもの場所で間違える。白髪の修道女は、ため息をついた。

緑と黄、両国の国境付近。歩いていける距離には海がある。彼女が住み込みで働いているのは田舎もたいがいな小さな教会。訪れる人は少ない。だが、それは楽器をうまく弾けなくてもいいということにはならない。修道女は窓の外をみやり、オルガンのふたをしめると外へ出た。

黄の国の王家を転覆させた革命からはや数日。死者追悼のため、神父は中央へ出ている。留守を預かる彼女が、今この教会の責任者。今日は食材の買い出しだ。困窮する人に配るスープをつくらなければならぬ。

林はなにがでるか分からないので、海沿いを歩くように。そう言い含められていた修道女は、潮風を浴びる。心地好い温度に思わず伸びをしたときだった。

黒い布にくるまれた物体が砂浜に打ち上げられている。漂着物などほとんどこないというのに、これはいったい。

寄せては返す波。それが布の一部を動かす。肌色が見えた。

……人、人が倒れている。

修道女は駆け寄ると、その人物の容態を見るため黒いフードを取った。短めだが綺麗な金髪。唇は青白い。

「…大丈夫！？聞こえる？」

修道女の呼びかけに、行き倒れの若者はかすかに動く。そしてゆっくりと、瞼を開いた。修道女はひとまず生きていることにほっとすると、さらに声をかける。

「どこか怪我してない？」

なにもおかしいことは言っていないつもりだった。それでも、相手は睫毛を震わせ、怯えた目をした。

…まずは恐怖を取り除いてやるのが先か。

「…怖がらないで。あなたに危害を加えたりなんかしない。私は近くの教会で働いているの。修道女よ。ひとまずそこに行きましよう？」

その言葉に安心したのか。相手はすこしだけほっとした表情になる。

「私はハク。…立てる？肩貸しましょうか。」

数分後。二人は普通の人の三倍は遅いペースで砂浜に足跡を残していった。

出会い（後書き）

やっとあの人を出すことができました。

面影

ハクは自室で一息つく。海水でべたべたになっている服を着替えてもらうため、助けたあのこに合う服を探しているのだ。

彼女の名前はリズ。黒いフードの下は、男物のシャツとスラックスだった。名前以外の事情は教えてくれない。だけど、聞かない。困っている人々を助けるのが教会の仕事だ。相手を信じ、全てを受け入れるのが、神に仕える者の勤め。

よし、いい寸法のものが見つかった。ひとまずこれでいいだろう。ハクは部屋の隅を見た。

「…さ、着替えたほうがいいわ。あなたが着ている服は、洗濯しておいてあげる。」

服を差し出してもリズはタオルにくるまって、躊躇していた。

「あの、捨てたり、はないですよね。交換とも、違いますよね。」

ハクは少し考えるために沈黙した。どうやらリズは、新しい服が、今着ている服を差し出すことによってきられると思っているらしい。彼女が着ている服は、シンプルとはいえ平均より上等な仕立てだ。仕立やに出したらいくらかの食費にまわせるくらい。

この教会の運営は厳しい。だけどそこまで落ちぶれてはいない。寄付をお願いすることはあっても強制ではないし、騙すなんてものほか。

「大丈夫。洗ったあとはあなたに返すわ。派手に海水に濡らしたみたいだから、時間がかかるかもしれないけど。」

修道女の言葉にリズはこちらがはっとするような愛らしい笑みを見せた。声こそ出していなかったが、唇の形がよかった、と動いた。ハクはその様子に引っ掛かりを覚える。

「その服は大切なもの？」 リズはタオルをぎゅっとまきなおす。「…はい、とても。」

ハクは洗濯を、細心の注意を払って行おうと決心した。

微かな兆候

レノンがそれを見つけたのは、昼を少し過ぎた頃だった。

「…？止まって。」

馬を減速させて、自分が見たものを確認する。それは間違いなく、リジーが乗っていた馬、ジョセフィーヌだった。

周囲を見てもキャンプしたあとはない。彼女がキャンプできるとは思えないが、最低真似事程度はできるはずだ。

「もしかして」

レノンはその結末を思い描く。革命軍に捕まった？だがすぐにそれを打ち消した。

…それはないな。逃げるならジョセフィーヌを置いていく訳はないし、第一、今まで革命軍に一度も遭遇していない。見つけたなら今頃このあたりは大騒ぎになっているだろうし。リランが追っ手を逆方向に誘導したのだろう。となると残るのは。

「…このあたりで潜伏してる？」

もともと待ち合わせもしていない。合流するには先行した方が別れた地点の近くで待っているのが一番だけれど目印はない。

どこかの村に隠れることにして、目立つ馬をここに置いていったのだとしたら。

「…危険な賭けして。」

レノンはため息をつく。

馬がここにいるということは、彼女がいるのは歩いて行ける場所。追いつくのも時間の問題だ。

頭の中にインプットされている地図を、レノンは出力する。リランが行けといった教会も徒歩で行ける。それより近い村もあったし…。

空振りよりはいい。近い方から潰していく。村人とトラブルになっている可能性が無きにしもあらず。情報もほしい。

レノン馬を手近な木につなぎ、村へ向かって歩きはじめた。

「うん、大丈夫みたいね。」

白かモノトーン系統の服しか着ないハクにとって、パステルカラーが似合う彼女は、正直うらやましい。リズもまんざらでもない様子だ。

「これから洗濯するから、ご飯は遅くなっちゃうけれど、大丈夫？おなか空いてない？」

「ええ、平気―」

リズの返事にかぶさるように、彼女のお腹が返答をした。

その場は沈黙。

「わ、私がお昼をつくるわ。あなたにばかり仕事をしてもらうなんて悪いもの。」

ハクは笑って、頬を赤く染めた健気な彼女を見遣る。悪い人ではなさそうだし、任せてみようかな。

「じゃあお願いするわね。厨房はこの角を曲がったところ。材料は適当に使って。」

彼女はうなずき、角を曲がる前に振り返った。

「ありがとう、ハク！」

呼ばれたほうはきょとんとして、返答できなかった。彼女はそれに気付かず、にぼっと笑うと角の向こうに消えた。

「…イ」

そういえば。親しい人は名前で呼び合うと、そう最初に教えてくれたのは、緑のあのこだった。

初めて呼ばれて、初めて呼んだ。もうそんな関係はないのだった。思っていた。

けれど、また。

なんのためらいもなく、名前で呼んでくれた。大事な人になれるのだろうか。

なれたらいい。

1時間後。

リズの作った昼食は

ハクが失敗した料理ワーストワンよりも、ひどかった。

前を見て

聞いたところによると、リズは掃除洗濯料理裁縫。などなどの経験は皆無とのこと。音楽や乗馬などの教養的娯楽は覚えがあるらしいが、中流以下の階級で必要なのは生活力だ。

「わたしはなににもできない――」

本気で落ち込んでいる彼女に、ハクは肩を叩く。そして努めて明るい声を出した。

「大丈夫。私も何もできなかった。けれど、何回も繰り返すうちにできるようになったわ。」

リズはハクを見遣ると、しかし目を伏せた。

「そうかもしれない。ただ私は、今まで取り返しのつかないくらい、長い時間を過ごしてきてしまったから。」

ハクもつられて目を伏せる。時間はもう戻ってこない。緑色がフラッシュバックしては消えた。

彼女の笑顔を思い出してハクは顔をあげる。

「そうね。：ただ戻れはしないけど、取り返せるとは思う。同じ場所にいけなくても、背中を見て追いかけるところまでは進めるはずよ。」

リズはしっかりとハクを見つめた。

「：本当に？」

「ええ、もちろん。私も昔はやること全部からきしだったけど、何度も練習してできるようになった。：人並みっていうレベルだけだね。」

リズの瞳に生気が宿ってきた。どうやら立ち直ったみたい。

こんな私でも、人を元気づけることができた。

「私、なにもできない。だから、これからいろんなことを取り返す。ハク、よろしくお願いします！」

はつきりとした口調。背筋がぴんと伸びていて、嘘はないとわかつ

た。

この子は強い。私と違って。

ハクは手を差し出す。

「こちらこそ。私にも、オルガンを教えてね。」

昔落ち込むことが多かった。今も変わらず落ち込むときがある。

あなたがいなくなって悲しくて泣きたくなるときがある。

うまく笑おうとしてた。自然に笑えたのはあなたがいたから。神父様や村の人と関わる時も、顔が強張ってしまうのがわかる。

忘れないわ。忘れない。けれどあなたと出会えて笑えたの。

リズはハクの手をとる。

「じゃあリズ、一緒に食器を洗いましょう。」

あなたのことを忘れない。昔の自分も忘れない。

代わりじゃないの。割り切ったわけでもない。もちろん吹っ切ってなんかない。

ただ、私はこれから彼女と生きて、笑いが絶えない生活を送ってみたい。

だから、ミレーも見てて？

落とし穴

村は典型的な農村だった。家は疎ら。森の緑と空の青。それに広大な畑。石造りの城下街とは世界が違う。どちらかというと緑の国の風景に似ていた。レノンが一步足を踏み入れると、何人かがちらりとレノンを見る。そのうちの一人、好奇心旺盛と思われる農夫が近づいてきた。

「よお、なんもない村だけどよろこそ。」

レノンは帽子を取って軽く頭を下げる。ざっと村を見ると、外に出ている者はみな畑仕事に精をだしていた。

「で、なんかようかい？」

今日はいいい天気だね。そういう軽さで単刀直入に切り込まれる。気さくで世話好きかと思えば、裏に警戒心あり：か。無理もない。よそ者を疑うのは当然だ。レノンはほけほけと笑顔をうかべる。

「人を探しているんです。実は僕待ち合わせをしていたんですけど、うまく合流できなくて。金髪で僕くらいの歳の人、最近来ませんでしたか？」

情報を得るには等価交換。だけど与える情報は、自分にとって与えても支障がない部分だけ。幸い農夫はすぐに思案した顔になった。「いや：見ねえなあ。ここはなにもない村だから、人なんかほとんどこねえよ。とんでもない方向音痴が教会への道を聞きにくる程度だな。」

「そうですか：」

空振りか。まあ見過ごすよりはいいはずだ。レノンはそう思い直すことにする。だが落胆の色が現れていたのだろう。農夫は持っていたすきをレノンに突き出した。

「もしかしたら林にいったやつが見てるかもしれねえからな。ちょっと待ってろ。聞いてきてやるよ。」

レノンが口を開く前に、農夫は行ってしまった。仕方なく彼は、

手持ちぶさたにつつまっているしかなかった。

「――悪いな。誰も見てないってよ。」

農夫はすまなさそうに言った。少し期待していたが、農夫の手前レノンは礼を言う。警戒心があるかと思えば根っからのいい人だ。考えすぎ、か。

レノンが警戒レベルを下げていると、農夫は眉間にしわを寄せる。「まったく：せがれがいつまでたっても帰ってきやしねえ。おまえさん、時間があるなら農作業でつだってくれねえか？ 少しばかりなら礼もやれるが。」

この逃避行はまともな旅ではない。路銀も限られているのでおいしい話ではある。だが、レノンは引っ掛かりを覚えた。

「息子さん：どうかされたんですか？」

かえってこない。この言い方ではどこかに出かけているニュアンスだ。

農夫は鼻をすする。

「なあに、この村の若いもん何人かが革命に参加してるんだよ。便りによると王女の処刑を見届けてから帰るってんだが、浮かれてるんか。こっちは働き手がいるってのに。」

まだ逃げられたわけじゃない。逃げている途中だ。

警告が全身から発せられる。一刻もはやく立ち去らなければ。できるだけ怪しまれない程度に。レノンは気持ちを表にださないよう注意を払い、困った顔をする。

「とてもありがたい申し出でしたが、遠慮します。もう一度探してみますよ。」

「おう、きいつけてな。」

向けられた笑顔に罪悪感を感じながら、レノンは足早にその場を去った。

だいぶ予定が狂ってしまったが、今度こそ食材の買い出しである。

ハクがリズについてくるよう言うと、彼女は躊躇した。

まだ体調が万全ではないのかもしれない。それにもとから一人でいく予定だったのだから、問題ない。リズに留守を任せ、ハクが出かける支度をしていたときだった。背後から息を吸う音が聞こえる。

「：私も、あなたみたいに修道女になれる？」

リズは憂いを帯びた瞳で振り返ったハクを見た。なにか悔やみたいのかもしれない。少しでも更正のきっかけになるのなら。

「なれるわ。中央で働くならともかく、ここなら神父様に洗礼を受ければ大丈夫。おもどりになったらすぐにやってもらいましょう。」

逃げるいこと

彼が村を出ると同時に、不意に人の気配がした。身を隠そうにもその人物に視認されてしまったので、レノンはあきらめて迎え撃つことにする。

「こんにちは。お急ぎかな？」

話し掛けてきた人物は穏やかなものいいをした。年は30代か。見た目から判断すると、神父だ。持っている荷物量からしてさうい神父ではない。レノンは警戒しながらも、話をするを選んだ。「：近くの教会の神父様とお見受けします。人を探しているのですが、そちらに厄介になってはいないでしょうか。」

神父はレノンをまじまじとみると、ほんの一瞬目をしばたかせる。彼がもう一度みたときには、神父は柔和な笑みに戻っていた。

「可能性はあるかもしれないね。私は革命の死者追悼に出向いていて、教会を留守にしていたから。」

僕は返答をしようとして、できなかった。

「留守を預かっている修道女が――」

「あの、馬が見えないのですが、いつ向こうを出発したのですか？」
レノンは目上にあたる神父の言葉を遮って質問をした。失礼も失礼。相手によっては不敬罪だ。ただ神父は、僕の様子でただ事ではないと思っただけらしい。彼はまばたきするのを忘れるとつぶやくように答えた。

「：王女処刑日の夜だよ。」

ありえない。優秀な馬で、かつのりてと馬双方の体力の後先を考えなければ半日以内でたどりつける。ただし充分な休憩をとれば半日以上は絶対かかる。まして徒歩なんて、不可能だ。例え屈強な男でも。

「徒歩で帰るつもりだったのを、革命に参加した若者たちに拾ってもらった。荷車だったけどだいぶ楽だったよ。」

僕は、頭が真っ白になった。でも、聞かなければならなかった。
「そのかたたちは、今どこに？」

神父は笑った。

「今朝早くに別れて私が先行している。彼らもうすぐこの村に帰ってくるはずだ。馬だしね。」

不意に寒気に襲われた。口元がぴくぴくする。

僕はつかまる。捜索隊によってリジーもつかまる。そして僕らは殺される。

そんな最悪のシナリオが思い浮かんだ。

村人に僕の姿を見られた。人を探していると情報も与えてしまった。王女が逃げ出したことの連絡がまだ入っていなかったから無事だったんだ。冷静に考えれば、双子の片方がいれば芋づるでもう片方が近くにいます。

終わらせなきゃ。怯えて暮らさないためにも清算しなきゃ。

…ごめんリジー。会えないかも。でも分かって。

僕は生唾を飲み込むと、目をとじ息を吐いた。

「…嘘をつくのはいけないよ？」

レノンがびくりとすると、神父がため息をついていた。

「…どういう、ことですか。」

たじろぐレノンに神父は一瞥するだけだ。超能力？読心術？…どちらにしてもたちが悪い。考えてることを先読みされて手を打たれると、どうにもできないじゃないか。

神父は食えない少年のようにあどけない顔を見せる。

「僕は王女処刑のあとの追悼式に参加する予定だったんだ。…ハプニングで予定が目茶苦茶になったけれど。」

神父は思い出し笑いをした。

レノンの震えは止まらない。

「あんなことはめったに見れるものじゃなかったね。だから覚えてるよ。」

まるで捜し物を見つけたときの喜び顔。彼は細長い指を指す。

「君は王女にそっくりだ。」

ハクは砂浜を歩いていった。空は青く、海は輝いている。安くていい食材を見繕ってはやく帰ろう。

リズと話すのが楽しみだ。神父様にここまでのいきさつを話すのも。

ハクは一人、くすりと笑った。

反論しようと口を開きかけたとき、不意に音が聞こえた。レノンが反射的に手じかな茂みに飛び込むと、馬のいななきが聞こえる。

「ああ神父様！」

「おやまたあったね。」

「ええ、：失礼、急いでもんで！」

音は遠ざかっていく。

レノンはそろりと頭を出した。

最善を考えろ。考えるんだ。意気地無し。ちゃんとあのときは入れ代われたのに。僕はリジーを守ることができればそれでいい。

なのに。

なんで身体が震えるんだ。

神父はレノンを黙ってみていた。

「：君は王女と似ているけど王女じゃないよね。影武者にしては忠誠心が強いから：血縁かなあ？でも今の君は、性別が違う王女のそっくりさんにしか見えないよ。」

たった今会ったばかりの人に、見破られた。たぶん時期と場所、そして僕の人を探していたという行動。僕は紛れもなく僕だった。「あいにくと、女性の服は持ってなくてね。」

レノンは自分の服を見遣る。今すぐにリジーにはなれない。

僕が逃げることでしか、リジーは幸せになれない。逃げないと。生きられないんだ。

逃げること（後書き）

文章力が…。

僕、とレノン 混在しています。批評おまちしています。

うそつき

レノンが言葉を紡ぐとすると、神父にするどく遮られた。緊迫感漂う彼に倣って村の様子を伺うと、大声がはつきり聞こえてくる。「だから、王女が逃げたんだよ！俺らは帰りながらやつを探したんだがみつからねえ！神父様もいたってのに助けを請いにこなかったのもひっかかる。体力も根性もなしのお嬢さんがなんですすぐ見つからねえんだ！」

荒々しい様子だが、頭の回転がはやいのだろう。その若者は村で中心的な存在らしい。村人全員が彼の話に聞き入っている。

「どうやら私は釣り餌だったみたいだね。」

そういつて神父は苦笑をレノンに見せた。

「絶対この近くには来ているはずなんだ！馬がいた！」

レノンはこれに反応して周囲をうかがう。もしかしたら捕まえられたのか？

彼があまりにも動きすぎたので、しまいには神父に頭を抑え付けられてしまった。思いがけない力に抵抗しようとすると、上から低い声が降ってくる。

「馬のいななきが村から聞こえないから。元いた場所にいると思うよ。それに貴重な財産だからまず生け捕りにするだろう。」

レノンが落ち着き、元の体勢に戻った二人はまた息を殺した。

「：：：そういえば金髪の坊主が人を探しにきていた。」

これは先ほどの農夫の声だ。村にざわめきが広がっていく。レノンの額には汗が流れているが、神父はがさがさと自分の荷物を漁っている。

この人は放っておいても大丈夫だ。けれど、自分はいつ逃げる？少し戻って馬で走るにしても、走る音で気づかれる。第一その移動途中で誰かと鉢合わせしないとも限らない。レノンが悶々としている間に神父は一人どこかへ立ち去ってしまった。

追いかけてようとしたが、自分の立場を考えると動くに動けないレノン。躊躇している間にも村の様子は緊迫さを増す。

「あやしいぜ！今すぐ探しに行くべきだ。まだ林の中にいるかもしれない。」

「そうだ！俺たちが捕まえるんだ！」

急速に広がっていく同調の環。村人たちは農具片手にどんどん集まっていく。

狩られる。

レノンがぐくりと生唾を飲んだとき、地面の砂を引っかく音がした。

その方向からは、神父が二頭の馬をそろそろと引き連れている姿があった。なにもいえない若者に、彼は微笑みかける。

「…うん、いい馬だ。これで逃げられるね。」

確かに、二頭いれば。一方の馬を脅かして派手に走らせる。おとりとして村人をひきつけているすきにレノンが逆方向に逃げるという寸法だ。タイミングが重要だができなくはない。だが。

「…神父様は？」

この場に残るにしても馬に乗るにしても危険だ。しかし彼はレノンの憂いを、くすりと笑って受け流す。

「心配しなくていいよ。ここはなんとかしてあげよう。…これをもつて。使えるだろう。」

レノンは渡されたものを受け取る。年季の入った銃。

「嘘をつくならそれを本当にするくらいの嘘をつきなさい。下手な嘘は危険だから。準備不足の嘘ほどこわいものはないよ。」

そういうおくと、神父は止める間もなく村へ足を踏み入れた。

衝動

今にも飛び出さんとしていた若者たちが、神父を見て踏み止まる。レノンも銃を握りしめたまま様子を伺った。これはタイミングが重要だ。一瞬たりとも間違えてはいけない。神父は出ていったあと、村人たちの困惑をよそに口を開いた。

「みなさん、どうしたのですか？ 恐ろしい顔をしていますよ。」

大した役者だ。いつそのこと転職すればいいのに。レノンが観察するなか、村人たちは口々に訴える。

曰く、逃げ出した王女と手助けをした人物を捕まえ、処刑台に送ること。近くにいるかもしれないのですぐに捜さなければいけないこと。王女を手引киしたと思われる少年をさきほど見たこと。

「神父様、あんたも手伝ってくれないかい？」

当然のごとくでてきた依頼。神父は声の主のほうを見た。レノンの方からは見えなかったが、おそらく慈愛に満ちた顔だったのだろう。

「私には、できません。」

レノンはそろそろと馬の方向へ近づいた。リランの馬の状態を見て、とくに問題がないことを確認する。

「私の使命は人を救うことであって、人を追い詰めることではないからです。」

なにをやってる。あんたは適当に時間を稼いでくれたらそれでいいんだ。馬鹿正直に答えるんじゃない。

神父の言葉をもどかしく思い、レノンはいつまでも出発できずにいた。

「：あんた、それって王女をかばうってことかい？」

返答次第ではただではおかない。そんな空気が村人たちから醸し出されていた。

だれもが息をするのさえ忘れていた。

「：言葉だけとらえれば、そのようになるでしょうね。」
嘘のつけない神父の言葉が終わって数秒後。
銃声が鳴った。

レノン神父の姿勢が不自然に崩れるのを見ると、視線をそらしてその場から駆けた。唇を噛みながらリランが貸してくれた馬に銃を向ける。がたがたと震えて照準が定まらず、左手で力任せに固定した。

馬と目が合い、レノンは叫びたい衝動に駆られる。おさえようのない感情が体を駆け巡っていく。

「っ…」

もうすべて消えてくれ。

レノンは力任せに、撃った。

轟音とともに馬が走り去っていく。

「なんだ？」

「みんな、怪我はないか!？」

村人の注意が林に向いた。レノンはジョセフィーヌに颯爽とまたがると、村のほうを名残惜しそうにしながら前を向く。

「頼むよ、ジョセフィーヌ。」

腹を蹴り、一組の騎手はその場を去る。

これでいいんだ。

こうしないとすべてが水の泡なんだから。

レノンは考えを振り切るように一心不乱に走らせた。

同じころ。

ハクは静かな林から野鳥が飛び立つのを見た。

「…なにかしら。」

怪訝に思いながらも、彼女は自分の予定を終えてしまうことを優先した。

夕暮れの教会。リズは見慣れた馬と、夕日に光る金の髪を見つけた。

馬はゆっくりとこちらに向かい、騎手はしがみついているのもやっという有様だ。彼は尋ね人の姿を見て、安堵した表情を浮かべると、ふらりと体を倒した。

「レノン！」

どさりとレノンは肩から落ちる。リナジーンは動かないレノンにかけより、体を起こした。

「大丈夫？レノンっ！」

彼女の悲鳴にも似た叫びに、レノンは首だけを動かして反応する。ひとまず反応があったことに胸を撫で下ろしたが、すぐに顔を強張らせることになる。

「やありジーン。」

レノンはぼろぼろの体で、捜し求めた姉弟に微笑みかける。

「会えて、よかった。」

リナジーンの瞳には、あのときと同じレノンが映る。緑の娘を殺して、城に帰ってきたときと同じ。本当は泣きたいのにうまく笑おうとして、逆に痛々しくなるってことを知らないんだ。

「これからのことを、考え、よ——」

そこでレノンは意識を手放し、リナジーンのように体を倒してき た。リナジーンは肩に彼の頭を乗せ、しっかりと支えた。

気を失っていても、レノンの顔は苦しみに満ちている。ときおり眉間にしわをよせ、悪夢でもみているのかうめいている。

あなたはなにを見てきた？私が笑っているとき、あなたはどんな思いだったの。

リナジーンは力強くレノンを抱きしめる。片割れの体温は、温か

い。でも少しでも、あたたかさを多く感じてくれたらいい。そして、レノンが目覚めたら真っ先に言うんだ。

お願いだから、笑わないで。悲しいときに笑わないで。泣いていいんだよ。

これからは、二人で生きていくんだから。あなたにだけ背負わせないから。

双子の姉は空いた手で目元を拭う。

だから、一人で抱え込まないで。あなたが悲しそうにしていると、つらいよ。

そんな顔しないで

「――つと。これでひとまずは大丈夫ね。」

ハクは髪をかきあげながらリズをみやった。ハクが教会へ帰ったとき、二人は入口で座り込んでいた。呆然としていたリズを引き戻し、意識を失っていた少年をベッドへと運んだのだ。リズはハクの声に応えることなく少年をじっとみている。

少年はリズと同じ金髪で、背格好といい顔だちといい彼女とうり二つだった。リズの思い詰めている様子からして、とても大切な人だろう。

「ご家族？」

彼女から少年に持病はないと聞いたので、倒れたのは過労が原因だとハクは判断した。それでもずっと張り詰めていると今度はリズまで倒れかねない。緊張をほぐすため、また一応確認のための質問だった。

「双子の、弟なんです。」

リズは今にも泣きだしそうだ。彼女が本当の意味で頼れるのは彼しかないのだろう。もしもいなくなってしまうたら。その絶望も不安もハクは知っている。

「大丈夫だから。今ゆっくり休ませてあげれば明日にでも目をさますはず。」

ハクは水差しとパンの載った盆を引き寄せると、リズの前に出す。

「ここで休む？」

彼女はこくりと頷いた。

「：ふうー」

扉をパタンと閉めたあと、ハクは軽く息をはく。今日は一体どういう日だろう。こんな辺境に二人も救いを求める人が来るなんて。

まあでも。とハクは思い直す。なにも悪いことはないんだし、拒

む必要なんてないでしょう。

それにしても、神父様のお帰りが遅いのはどうしてかしら。

夜も更けたころ。水差しの水が微かに揺れ、白い掛け布団がもぞもぞと動く。月明かりのなか、彼は双子の姉が寝入っているのを見た。きつと看病してくれたのだろう。慣れないことをして疲れたんだ。ぐしゃぐしゃになっている彼女の髪に手を伸ばそうとして、レノンには自分のこめかみを押さえる。

髪の毛。緑。揺れてこんな暗がりのなか。光る刃。赤い、銃声、3時の鐘。今日一日で起こったことがフラッシュバックする。とまらない。映像だけでなく音声さえ無限にリピートする。

『嘘をつくくらいなら本当になるくらいの嘘をつきなさい』

『そんなのはね、ただの自己満足よ』

『僕は、生きたい…生きていたい!』

そう、僕は生きたい。リジーと生きたい。だけどそのためには全部覚えて、背負うんだ。できる?僕に。いったい何人殺したの。ねえ。嘘にまみれて生きていくの。

『一人に、しないで』

君を一人になんか、もうしない。今までごめん。だけど

「うっ…」

レノンはリナジーンに向けた手を引っ込め、頭を強く押さえた。関わった人たちの会話。すべてが混ざっていく。こだまが止まらない。加速して反響。

やめてくれ。やめてくれ。お願いします。もうやめてください。こんなにリピートがなくても忘れたりなんかしないから。

レノンがぎゅっと目を閉じていると、瞼の裏側に映る光景が微妙に変わった。混声は全て雑音にかわって、次第に収束していく。入れ代わりにきたのは緑の彼女。

最初にであった緑の国。笑顔に長い髪に優しい声。あのときの庭で話して、ナイフ、悲しそうな諦めた顔、温かった赤。無音で息つくひまもなく流れゆく光景。先程とは倍以上のはやさ。処理能力が限界に達したとき、それがいきなりふっと消えた。

『——お願い、笑ってよ』

記憶に新しい声とともに彼女の姿が蘇る。叶えたはずの願いがレノンにまわりつく。

…笑ってよ、　　わらってよ、　　わら——って

どさりと、レノンはベッドに倒れ込んだ。微かだがまだエコーは鳴りやまない。天井はぐるぐると回って、描かれていた模様をなんともなしにみていると強烈な吐き気に見舞われる。

「…っは」

レノンは目を背け、体ごと横に向ける。簡素な装飾品が輪郭を失っていた。

笑って、生きるの？今まで笑ったときが多かったけど、リジミたいな笑いかたはもうできない。ためしに笑っても、卑屈な顔をしているのが自分でも分かる。違う、こんなじゃない。リジミとおやつを食べていたときのように、あんなふうに笑うんだ。

だがそのときのことを思い出しても、口角をあげるのと同時に瞬きが水を生産する。涙が頬を伝い、シーツに染みをつくった。

できない。笑えない。無理だ。…いっそのこと殺してくれ。僕は生きたいしリジミと一緒にいたいけど、同じくらい終わらせたいよ。レノンの瞳は空虚になり、けだるげに閉じられる。頭を押さえていた手が投げ出され、腕がシーツに当たり音を作った。

「…ん」

片目をこすりながら頭を持ち上げたりナジンは、弟が寝ているベッドをみやる。体勢が変わっていて、布団がはねのけられている。「——レノン？」

その問い掛けに、彼は答えなかった。

林には、パチパチとたき火のはぜる音が響いている。真っ黒の空の下、白馬と栗毛の馬がなかく繋がれており、たき火には赤い鎧の女性と青い髪の男性が座っていた。

「……で、メイア。君の調べではどうだ？」

革命軍のリーダーはゆっくりと息をはく。

「あなたが探した方角にはまったくいなかったんでしょう？ だったら裏をかかれたと考えると、緑の国の方角にいるんだと思う。さしあたり国境付近の教会かしら」

答えられたほうはおもむろに立ち上がる。

「くっ…、だったらはいく教会に」

「カイン、落ち着いて。」

メイアは興奮覚めやらぬ青の王子を遮った。

「こんな夜遅くに訪ねていたら間違はなく気づかれて逃げられるのがオチよ。王女も疲れているでしょうから今夜は教会にとどまるはず。」

「しかし…！」

なおも言い募るカインは、メイアとともに馬の足音を聞く。

「…なんだ？」

馬は三頭ほど連なって、街道をかけていった。

「きつと近くの村の討伐隊ね。今朝怪しい人物を見たって。ますます教会にいる確率が高いわ。——え、大丈夫、彼らにはこのあたりだけ警戒してもらって、明日の朝私が教会を改めるって言ったから。」

なおも不満げなカインにメイアは続ける。

「それに、あなた自分の顔みたら？ 人がみたら悪魔だと思われるわよ。…今日は情報をまとめつつ、休むためにも城に戻りましょう。」

——ともかくあなたと合流できてよかった。おとなしく自分の

向かった範囲だけじゃなく、反対方向まで探しにくるとはね。今のままだとあなた倒れかねないわ。」

十数分後、焚き火のあとは消え、二人は城を目指して併走した。

嘘だといって

もうすぐ市場が盛況になるかという時刻。ハクは黒い修道着に身を包んだリズと洗濯物を干していた。昨日の少年はあれからかわらない。ときおりうなされているが、熱はないので様子見しかできないのが現状だ。リズは心配をかけまいと終始明るく振る舞っている。だけど誰の目から見ても彼のもとへ戻りたいのは明白。ときおりぐっところえた顔をしている。今は空き時間を少しでも多く作るため一心不乱に作業をしている。気を張っているのだろうな。ハクはさりげなくリズを見守っていた。そのさきにはパンパンと音を立てたあと、大きく伸びをする少女の姿があった。

「っし、終わった！」

リズは満面の笑みでシーツを干し終わったところだった。一応チエックすると、しわも綺麗に伸ばしている。最初に注意したとおり丁寧に作業したようだ。あの少年ひとつでここまで進歩するとは。ハクは内心舌をまいた。

「じゃあハク、私先に行ってるわね！」

リズは嬉しそうにスカートのすそを翻し、バスケット片手にぱたぱたとかけていった。止める理由もないので、ハクは一人見送る格好になる。

「……」

最初は良家のお嬢様が訳ありでここに来たのかと思ったけれど、出来を無視すると言われたことはなんでもするしけっこうおてんば。笑いは快活でそこそこがさつ。もう振る舞いだけ見ると市井のそれだ。観察眼がないのかな、私。

そうだとしても、うん。詮索なんかする必要ないわ。自分から話してくれればいいもの。

ハクは自分のかごを持ち上げると、ゆっくりと後を追った。

リズは息を弾ませて敷地を走る。勢いでスカートのすそがはだけ、足を覗かせる格好になっても気にしない。

だって誰も見てないわ。ここは王宮じゃないのよ。マナーなんかくそくらえ。…それにたしなめる人もいない。リズはふっと下を向いた。

私を注意したのはあなただけ。次はちゃんと言うこと聞くから、はやく目をさまして。お願い。

教会の入口。祈るようにそこに駆け込もうとしたとき、リズは正面に弟の姿を見る。思わず立ち止まると相手は壁によりかかりながら歩いている。

「あ…」

彼はリズの姿を確認すると、疲れている表情を覗かせながらも柔らかな空気を出した。

「レノー—」

しかし彼は目を見開くと、ふいと壁の向こうに引っ込んだ。リズはいきなりの拒絶に戸惑いを隠せない。

「ちょ、どうして」

ジャリ。

砂を踏み締める音が背後から聞こえた。続いて生き物の気配も。リズがゆっくりと振り返ると、白馬に乗った王子と栗毛の馬を従える剣士の姿があった。

「…見つけたぞ、悪ノ娘」

洗濯かごがリナジーンの手からすべり落ち、カランと音を立てた。

あら、どうしたのかしら。こんなところに洗濯かごが転がっている。

「…そこにいるのは分かってるんだ」

「…しら、な」

「……………」

「…ほら、はやく!」

ハクが足先のかごから注意をそらすと、目の前の光景にさらに驚いてしまった。

「……カイン、様?」

取り込み中だった入口の様子が停止する。ハクの目の前では青の王子がリズに詰め寄り、赤い女性がなんともなしに立っていた。

「やあ、久しぶりだね。」

王子は険しい顔のまま社交辞令をした。ハクは応じようとして、できなかった。この二人はなにかある。疎いハクでもピンときた。

「リズとあなたは知り合いなのですか? これは、いったい――」

ハクの問い掛けに、カインは口元を緩ませた。

「…君から話すといい。そのほうがわかりやすいからね。」

「っ…」

リズは瞳を細め、体を震わせる。逸らそうとしたがハクと目があうと、声にならない声を出した。

「…リズ?」

ハクの怪訝な声に、呼ばれたほうの瞳がうるんだ。

なんなの。一体なにがあったの。一国の王子と知り合いなんて、普通じゃないわ。

心臓が早鐘をうつ。全てを言語化できなかったハクは、ただ一言だけ発した。

「…よければ教えてくれないかしら?」

緊迫した空気が最高潮に達したとき。その人物はきた。

「すみません、あの、教会の関係者のかたはいらっしゃいますか?」

4人分の視線が、農民と思われる若者の姿を射抜く。荷車をひいていた彼はたじろいだ。ハクは自分のことだと思って前へ出た。

「…はい、私ですが。」

若者は形容しがたい表情を見ると、ハクを荷車へといざなった。

「ご確認ください。」

若者が生成り色の布を払いのける。

ねえ、これはなに？私の目の前のものはなんなの。

「このひとは」

聞こえない、聞こえないわ。帰りが遅いってこういうことだったの？

「…神父様で間違いないですか？」

「……よ」

若者の目の前で、ハクは座り込んだ。

さっきまで目の前に誰がいたのか、初対面の人が何人いるのかなんて関係ないわ。

「嘘よ……！！」

ハクは絶叫すると、大粒の涙をこぼした。彼女の目の前には、動かない神父の姿がある。

どうして？私の身近な人はいつも黙っていなくなってしまう。

どうしてよ。どうして死ななければならないの。

なんで？教えて。

神様がいるというのなら、私は聞きたいわ。

どうして私から大切な人たちを奪うんですか？

闇の中

人生なんて、うまくいかない。理不尽なことや、自分ではどうしようもできないことが山ほどある。自分が可哀相だなんていうつもりはないよ。でも立て続けにアクシデントが起きたら一体どうしろっていうんだ。――それでも救いはあった。ささやかな幸せだけでよかったんだ。勝手だけど、リジーと会ったとき、全ての嫌な感情が吹き飛んで生きたいとおもったよ。でも王子と剣士が追ってきて、その若者がきたとき、もう駄目だと思った。ここから逃げだしたかった。

分かってるんだよ。逃げてでも果てまで追ってくるだけだって。

――現実を目の当たりにした少女の絶叫がレノンを責める。予想が現実になってしまつて、彼は座りこんだ。彼の悔恨など意味はなく、事態はどんどん進んでいく。

「修道女さん、大丈夫ですか？」

「ほら、あなた、大丈夫よ！ 気を確かに持ちなさい！」

「一体だれがこんなことを……！」

「ばか、そんなことあとよ！ ちよつとあなた！ この娘をお願いできるかしら？」

「は、はい！ わかりました。行きましょう、修道女さん。詳しいことはあとで説明しますから……」

けたたましい騒ぎが一段落し、足音が二人分離れ、残りが近づいてくる。レノンには、感傷に浸っているひまなどなかった。

「さあ、話の続きをしましょうか。それとも街に戻りたい？」

剣士の言葉にレノンは反射的に立ち上がると、その姿をさらした。「待ってください。」

二人は一樣に顔色を変えなかった。予想済みということか。リナジーンだけ血相を変えている。

「レノ――っ、なんででてくるのよ」

「リジーだけに全てを背負わせたりしない。リジーが悪なら僕も悪です。」

レノンはりナジーンの手でふさぎ、低い声で言い切った。

「：あなたたちの話はだいたい分かったわ。王女はともかく、一介の召し使いがやってくれたわね。」

メイアはそう息をはいた。処刑事故から一連のことを話し終えると、年長者たちは口を開くまでにしばらくかかった。

「俺は信じられない。馬のことも神父のことも。そんな偶然信じられるか。作り話だ！」

カインは語気を荒げる。ミレーのことを話すとどうなるかわからないので、レノンは言わないでおいた。

「確かに信憑性に欠ける部分はあるけどね、カイン。今更この子たちが嘘をつくとは思えないわ。」

メイアは静かにたしなめると、目を細めた。

「それよりも、重要なのはこれからのことよ。違う？」

この場の支配者は、間違いなくメイアだった。ぴりつとした殺気に、先にりナジーンが当てられる。

負けるものか。避けられない運命だとしても、指をくわえるだけなんてまっぴらだ。

「リジーを一人で行かせない。」

頑ななレノンに、メイアは手を組んで見つめているだけだ。たまらずりナジーンが反論する。

「そんな…！悪いのは私です！私が処刑台に上がればすむ話なんだから——」

「違う！リジーは王女をやめるだけでいいんだ。死ぬ必要は——！」
男の咳ばらいが言い争いを収めた。

「かばいあいには感心するがな」

カインはよく通る声で二人を突き刺す。

「なんだったら二人で行くか？悪ノ娘、国を疲弊させた罪。悪ノ召し使い、国民を騙し、混乱をもたらした罪。」

悪の双子は押し黙った。メイアがその先を引き取って続ける。

「あなたたちが今心から反省しているっていうのは見ていて分かるんだけどね。自分たちがやってきたことにケリつけないといけないの。反省してまず、ごめんなさいじゃもうすまないわ。」

抗えない正論にリナジーンは目を伏せ、レノン は唇をかんた。一方の王子も黙ってはいない。

「…そんなことは分かっている！もう二人とも今すぐ引き立てればいいんだ！」

すがすがしい極論を発したカインは、慥然としたメイアに気づいた。

「…まさか君は、あの二人を庇うつもりじゃないだろうな？城で顔見知りだったんだろう？」

「馬鹿言わないで。私の大事な人を奪った人たちを、許せるわけないでしょう？」

疑ってかかった王子にぴしゃりとたたき付けると、メイアは一転ぴくりと反応した。ただならぬ様子に部屋の人間も微動だにしない。

「…なにかしら」

コツコツと、話をしていた小部屋のドアがノックされている。

「見てくるわ。変なことはしないでよ。」

青の王子は舌打ちだけを返した。

しばらくしてメイアが戻ってきたとき、特に双子の周りの空気は一気に重さを減らした。対照的に戻ってきたほうは気ぜわしい。

「えーと、リズとレノだっけ。本名もじった偽名でしょうけど。…時間をあげる。神様に祈ってなさい。また来るし、近くにも見張りがいるから逃げようなんて思わないことね。」

啞然とする双子の前で、赤と青は対称的だ。

「さっきから黙って聞いていれば、一体なんだ！」

カインは立ち上がりながら手を勢いよく机に置くと、メイアをに

らみつけた。メイアは真っ向から視線を受け止める。

「…アクシデントよ。どこかのだれかさんが処刑されなかったから、今街のほうで暴動が起きてるんですって。死者数増やす必要ないから、今から飛ばして止めてこないかね。…ほら、私たち仮にもあの革命の筆頭でしょう？」

こともなげに言ったあと、嘲るように笑うメイアにカインはしりごむ。

「それともなあに？人の国の事情に首突っ込んで革命に参加したかと思えば、人の国だから関係ないって言って事後処理やらないつもり？自分の欲求を手段にすり替えるのも大概にしなさいよ。」

メイアはずいとカインに詰め寄る。

「あなたは革命を口実にあの娘を殺したかっただけだわ。…まあ、乗った私たちも私たちだけど。——王族の愛憎で国が振り回されるなんて、いい迷惑！」

カインは反論せず、荒々しく出て行った。続いて退室しようとするメイア。

「…あの！」

レノンの呼びかけに、メイアは振り返ることなく立ち止まった。

「勘違いしないで。」

先制攻撃は二人をひるませる。

「…別にあなたたちを助けたわけじゃない。優先順位の問題。先延ばしになっただけよ。」

言い置くと、剣士は今度こそ本当に退室した。レノンはその後ろ姿に深々と頭を下げた。

闇の中（後書き）

今まで放置気味だった剣士さんと王子様が増量中。
キャラがつかめない…。

懺悔室

村人が気づいたときには神父はすでに息絶えていたという。相手が神父だったからだろうか。致命傷となった銃痕の他に、ためらったような傷あともついていた。

：怨まれるようなことはない人なのに、なぜ。

ハクは答えを見つけれないままその問いを発し続けていた。そばにいた若者がぼつりと漏らす。

「：悪ノ娘が逃げ出さなければ、こんなことにはならなかったのに。」

悪ノ、娘。こんなことには。

ハクは緩慢に顔を向けた。親友を死に追いやった元凶。でも王女は処刑されたはず。

「どうして、今悪ノ娘の話が出てくるんですか：？」

若者は表情を一変させる。しまったというふうな表情を見せているが、あとの祭りだ。

「：ねえ、どうしてなんですか？ 教えてください——！」

泣き腫らした目に涙を溜める修道女を見て、若者は重い口を開いた。

「いろんなことがあったね、レノン。」

リナジーンはレノンの手をひき教会の中を歩いた。レノンは黙りこくったまま連れられていく。太陽光と影が混じっている回廊を二人分の影が通る。いろいろなことをやったし、いろいろなことを受けた。記憶の断片の数々は今でも手を伸ばせば届く。

「つらいことや嫌なことなんて数えきれなかったし、ひどいことだっというっぱいやった。レノンにだってわがまま言った。そんな生活を続けてるうちに：私、いつのまにか悪ノ娘なんて言われてた。」

リナジーンが重たい扉を開けると、真っ暗な空間が現れた。彼女がカーテンを開けると、申し訳程度の光に教会のシンボルマークが照らされる。おもしろいほど明暗がくっきりと別れていて、レノンは目を細めた。

「もう謝っても許してくれないよね。許しを請うのも、だめかな？」

レノンはあきらめ顔をしている修道服姿の少女を見て、つかつかと歩く。偽善でも欺瞞でも、自己満足とでも言うがいい。僕たちはそれでも生きていく。過去は変えられない。悔いも謝罪もする。でも死ぬつもりはない。僕らは生きる。

リジーに死んでほしくない。リジーは僕に死ぬなという。もちろん二人一緒に死ぬのもごめんだ。絶対に生きてやる。外野は外野で勝手に言ってる。内野にいるのは僕たちだ。

レノンはじつとそのマークを見た。神様は今まで助けてもくれなかった。罰もなかった。

「――いや、それくらいは、許されてるはずだ。」

だってあの神父は、最後まで受け入れてくれた。それに神はどんな人間にも平等だという。真偽はわからないけれども。

神様が知らないというのなら。僕らが今まで何を思っ生きてきたか、やってきたことをどう思っているか聞いてくれ。救ってくれなくていい。けれど安息をください。

冷たい床にひざまずき、レノンは手を組む。リナジーンもそれに続き、懺悔室には言葉があふれた。

悪ノ娘が逃げた。手引きした人物を、神父がかばい、搜索を断った。村人は怒って、神父を詰った。暴走した村人が猟銃で神父を撃った。怪我を追った神父は教会に帰ろうとして、

悪ノ娘の協力者に殺された。

それが、若者から聞いた真実だった。ハクは呼吸することさえ忘れてしまっていた。

『人からどう思われても、自分が正しいと思うことをしなさい。』神父様が常日頃言っていた言葉。神父様は自分の信じる道を貫いたんだわ。村の人もそう。許せるか許せないかは人によって違うんですもの。だから、悪くないわ。

でも、悪ノ娘は？その協力者は？自分たちの欲望のために人を傷つけていいっていうの？あなたたちのいるところで周りが痛みを受けないといけないの？

若者は事実を告げると足早に去っていった。ハクはゆるゆると、聞かされたことについて考えていた。

聞きたい。問い詰めたい。なぜ。神様の前で告白しなさい。――それにしても、神父様を殺したあと犯人はどこに行ったの。ここからだと行くところは限られて…。

ハクの脳裏に金髪が浮かび上がった。

待って。昨日来た、あの男の子。

ハクは目を見開く。まだ話していないけど、何か知って、もしかしたら犯人かもしれない。それに、青の王子と顔見知りだったリズ。彼が意味ありげに言っていたこと。一人ぼっちの修道女は、妹のような彼女の笑顔を思い出す。あんなに悪なんて…そんな恐ろしいこと、あるわけないわ。でも、でも。

ハクは、否定できるだけの証拠を持っていたかった。同じくらい、あの二人を知りたかった。

「聞かなくちゃ…。」

確かめるの。ちゃんと。そして、つくりなおすの。ハクはふらふらと、教会に向かって歩きだした。出ていた太陽が陰り、ハクの影を消した。

「――私は、数々のわがままを言いました。それ以外知らなかった。」

――そして僕は、それらを叶えました。

「私は無知でした。それに、どうにかしようとしなかった。」

――僕らは殻に閉じこもっていたのかもしれませんが。

「あの剣士さんの言うとおり、私は恋愛感情のためにレノンに命令しました。」

リジの願いを叶えること。それが僕なりの愛情だったんです。

：いや、罪滅ぼし、偽善だったのかもしれませんが。一人ぼっちの王族に対する。今思うと歪んでいました。

「私は自分のことしか考えていなかった――！自分の痛みしか訴えないで、他人の苦しみなんて考えたこともなかった。」

僕らは生きていくうえで多くの人を傷つけました。神様、生きていては駄目ですか？でも僕らは生きていたいです。

「ごめんなさい……。レノンを助けていただき、ありがとうございます。……本当に、ごめんなさい――」

リナジーンは大粒の涙をこぼす。

「：ミレー。ごめん。神父様、ごめんなさい。助けられなくて、なにもできなくて見殺しにしまった……。すみませんでした……！」

レノンは頭を床につける。懺悔の様子を、半開きになった扉から修道女が見ている。ハクは二、三步後ずさると、口元を押さえ肩を震わせた。

間違いない。あの二人だわ。緑の国を滅ぼし、黄の国を傾け、親友と神父様を殺した

悪ノ娘と悪ノ召使

かなえるの

ほどなくして、二人は懺悔室から出てきた。ハクは廊下の中ほどで二人と出会う。うつむきがちに様子をうかがってみると二人は顔を曇らせた。先に口を開いたのは弟だ。

「――こんにちは。双子の姉がお世話になりました。レノと言います。」

「…いいえ、あなたこそ、気がついてよかったわ。」

ハクはひとまず当たり障りのない返事をする。知っていたら、助けなかったのに。

「…ハク、ひどい顔よ。もう休んだら？」

私の名前を呼ばないで。あなたはミレーじゃないのに。だが心のうちを表に出すことはなかった。

「ええ、そうさせてもらうわね。私、食欲がないから、二人で適当に食べておいて。」

ハクは返事を聞くことなく自室へ向かった。

静かに扉を閉めて、その場に座り込む。

「っ……あ……」

涙なんて枯れてしまった。出てくるのは嗚咽ばかり。記憶にあるリズの笑顔が感傷の邪魔をする。

あなたの、せい。全部あなたのせい。馬鹿な命令をしなければ。そして……そんな命令を実行する召使がいなければ。

あなたたちなんか、いなければよかったのに。

ハクは机の奥に閉まっていた箱を取り出した。

曇り空の下。灰色の海は凧いでいる。港には背格好のよく似た双子の姉弟が並んで立っていた。この天気なので彼らのほかに誰もいない。ハクはそろりと近づいた。

鈍く光っているのは修道女が使う護身用の銀のナイフ。刃にハクの顔が映る。

生きていたいですって？笑わせないで。もう充分でしょう？たとえ神様がお赦しになっても私が許すものですか。その罪、死であがなうべきよ。

双子はなにか会話をしているこちらに気づくようすもない。ハクは片手で持っていたナイフを両手で持った。かわいそうだから二人とも送るわ。まずは――悪ノ娘。ハクは両手を振り上げる。

さようなら。できることなら、苦しみながら死んでください。

無防備な背中に向けて、迷いのないナイフが振り下ろされる。確かな感触と同時に、真っ赤なバラよりも鮮やかな赤が飛び散った。

「レノン！」

ハクはなにが起こったのか分からなかった。目の前で倒れているのは病み上がりの少年だ。そんな、確かに私は悪ノ娘を狙ったはずなのに。

「：やっぱりハクさんは、懺悔室での告白を聞いていたんですね。」肩を押さえながら立ち上がるレノンは、淡い目をしていた。まさか、予測していたというの。寝込みを襲われるのを警戒してわざと港へ出たとでも？

彼は手短にハクの予想通りの説明をした。

「：僕たちは、ハクさんが思っているとおりに、あなたの大事な人たちを奪いました。あなたが僕たちを殺しても、誰もあなたを責めないでしょう。」

少年は、自分が突き飛ばした少女をみやった。

「僕たちは二人で生きたい。：過ぎた願いつてことはわかっています。だけどそのためにあなたから逃げることはできない。自分たちがまいた種ですから。」

なにもいえないハクの目の前で、レノンは座り目を閉じる。

「ハクさんの気がすむのなら、僕を殺してください。できることならリジーに手を出さないでほしい。」

ハクは滑り落ちそうになったナイフを握りなおした。：気が、すむのなら？馬鹿にしないで。気がすむわけないでしょう。あなたたちを三回殺しても、ひどい方法を使ってもまだ足りないわ。ミレーが戻ってこないなんて分かってるもの。でも、あなたたちが生きているのを見るのは堪えられないのよ。

「：分かったわ。」

ハクは自分を抑えて返答すると、ゆっくりとレノンに歩み寄った。リズが息を飲む。ハクがナイフをかざすと、不意に体を押さえられた。

「やめて！」

ハクの腰にはリズがしがみついている。ハクは一瞬躊躇した。

：そう、お互い相手のことが大事だっていうのね。素敵。ならいいわ。ハクは体ごと振り返りリズをにらみつけた。リズは唇を噛み締めながらも、目をそらすことなくハクを見続けている。

より深い悲しみを。奪われる苦しみを。あなたたちに味わわせてあげる。

刹那、ハクはレノンの首筋に刃を振るった。

「――！」

風を切る音にレノンが目をつぶるも、首からは出血していない。空振りだ。リズが安堵したのもつかの間、ハクは憎悪を噴出させた。

「悪ノ娘、あなたが先よ！」

ハクは少女の胸に向かってナイフを突き出した。背後で少年が動きだしたが、ハクのほうがはやかった。

白

勢いづいたハクの体が止まる。リズの体と刃の間隔はわずか数センチ。ハクが握っていたナイフが滑り落ち、それを間髪いれずレノンが遠くへ滑らせる。白い修道女はその場にどさりと座り込んだ。その背後にはレノンが立っている

「…！」

彼はこのチャンスを見逃さず、姉の手を引いてはなれたところへ避難させた。泣き顔のリズが無言で責めるが、彼はなにが起こったかわからない様子だ。ハクの唇がわななく。

「どうして…」

修道女をつぶやきが風にのり、二人は立ち止まって様子を見る。彼女の瞳は空を見ている。

「どうしてあなたが止めるの、ミレー！」

ハクの目の前には、半透明の親友が両手を広げて立ち塞がっていた。

『あなたには、悪になってほしくないの。』

ミレーはハクの髪に触れようとしてすりぬけた。

「そんな——！止めないで。あの二人はあなたを殺したのよ！？許せるの？」

ミレーは口角をあげた。

『ええ、許せるわ。』

ハクは手で顔を覆った。なんで。どうして。慈愛もここまできたら異常よ。それとも、すべてを受け入れるという信仰の道に私がついていないだけなの？

「レノン、一体なにが——」

怪訝なリズをレノンが抱き寄せてささやく

「…多分、緑ノ娘——ハクさんの親友がいるんだ。僕らには見えなだけ。…もう少し様子を見よう。」

ミレーはさらに続ける。

『私、黄の国の王女が手をくださなくても死ぬことなんて決まっていたの。』

「え……？」

あなたはただのまちむすめでしょう？ 持病もなかったでしょう？
ハクが顔を上げた先で、親友はどんどん淡くなっていく。

「待って、もっと詳しく……」

言ってしまったからハクは、苦笑いをする親友に気づいた。ミレーの向こう側の海がはつきりと見える。どんどん透けていく。

『あの二人が悪なら、私も悪なの。詳しく説明できないけど、私はどうしても死ななくちゃいけなかった。だから私、あのこに殺されるときに自分で刺したの。あのこがナイフを握りしめたまま躊躇していたから、私がそれを握ったの。私は半分殺されて、半分は自分で死んだ。』

……う、そ。死ななくちゃいけない理由って、なに。ううん、あのこがミレーを殺していなかったってことは本当なの？

『ハク、ごめんね。親友なのにちゃんとお別れできなくて。』

ハクは一粒涙を流す。お別れ。そう。ミレーはもう死んだんだ。

『人の生死に関わったら、一生背負うのよ。私はハクにそんな苦しみ背負ってほしくないわ。』

ミレーは優しい。私は踏みこむつもりだった。ミレーをだしにして自分の苦しみを晴らすつもりだった。

『だから、私からのお願い。あの二人を殺さないで。できれば助けてあげて？ ハクも、笑って生きて。生きていてごめんなさいっていうセリフ、誰が言っても悲しいわ。』

ミレーの手が不意に離れた。彼女は安らかに笑っている。

『約束よ。……笑って。』

「……ミレー！」

ハクの目の前で、ミレーは離れていく。ハクはもつれながらも近づこうとするが、彼女はすでに海の上だ。

『…ハク、私の親友でいてくれて、ありがとう。あなたがいたから、短い間だったけど楽しかった。』

ミレーはどんどん輪郭をなくしていく。ハクは涙をこらえて笑顔をつくる。

「私こそ、ありがとう…！」

ミレーは思い出したようにささやく。

『あの二人にも伝えて。忘れないで。でも笑って、生きて。』

ハクは神妙に頷く。満足げな顔を見ると、ミレーは髪をかきあげた。

『…今度こそ本当にさよなら。あなたは優しい修道女になれるわ。』

ミレーは突如消失した。あまりのあっけなさにハクは呆然知悉とする。

まだ、なにも聞いていない。あなたの願いは分かったわ。でも、私まだなにもいってない。待って、私も、一緒に連れていって。

「ミレー！」

ハクは海へ向かって駆け出す。このさきにはきつと親友がいる。だがハクはできなかった。

「ハクさん、駄目だ！」

強い力で体が引っ張られる。離してよ。どうして止めるの。

「…行かせて！」

「駄目です！」

きつぱりという少年は、ハクの肩を揺すった。

「さっきはミレーがいたんですよね？ミレーが伝えに来たのは一緒にあの世まで来てほしいっていうお願いだったんですか？」

違う。あのこは私に生きてといった。どうして？こんなにも苦しいことで満ちている世界なのに。

「ハクさん！」

「…ハク！いろいろ教えてくれるっていったじゃない。嘘だったの？」

私はあなたたちを殺そうとしたのに。放っておけばいいのにどうして止めるの。氣遣いするし、筋を通す思いやりある双子。この二人は、悪なんかじゃない。ミレーもミレーよ。あなたがきたから殺せなかった。頼まれたから殺せないし、死ねないじゃない。

「うっ……………」

枯れていたと思った涙が溢れる。あなたがいたから、私は私でいられたわ。短い間だったけど幸せだった時間。あなたもこの双子のようになにか重たい秘密を抱えていたの？

気づいてあげられなくてごめんね。しんどかったよね。

一人ぼっちで生きていくのは少し寂しい。秘密や罪を背負って生きていくのはもっと苦しい。私はミレーの支えになれていた？だから、この二人を助けろと…？

…あなたが現れて、殺すのをとめたのは、きつとなにか意味があるんでしょね。――私はあなたたちと生きるわ。時間はかかるかもしれないけど、きっとわかりあえる。リズと仲良くなれたんですもの。ハクと呼んでくれたとき、お互いに大切な存在になれたらいいと思った。リズの真実を知っても、それは、変わらないわ。知らないまま仲良くなってる程度しか距離を許してないってことでしょ？何か理由があったのかもしれないけど、私とミレーは、ミレーの秘密を何一つ知らないまま、いつも笑って暮らしてた。そこにいるだけで楽しいと思えたのならきつと、相手の苦しみを知った上で関わることできたら少しは苦しみを和らげることができるはず。

明日からは笑う。だから、今日だけ泣かせて。

ハクは双子が見守る中、雲間から出てきた光に照らされて、大声で泣いた。

眠れない。なきながら眠る

とっぷりと日が暮れるころにハクはベッドに入って寝入った。港で泣きつかれた彼女は過呼吸に陥って、リナジーンが背中をさすったり真っ赤に腫れた目にレノンが濡れタオルを持って行ったりと、時間がいくらかあっても足りないくらいだった。ハクがどうにか落ち着いたあと、必要最低限のこと——レノンの肩を手当てし簡単な食事をとる——と星が空に出ていた。

「……………」

室内に物音はない。レノンがちらと見遣ると、リナジーンはもの思いにふけている。

「ねえレノン。私たち、ここにいてもいいのかな？」

ぽつりとつぶやかれた言葉に、レノンはすぐに反応できなかった。リジーはぎゅっとひざをおさえている。

「あのね。あそこまでハクを傷つけておいて私たちがこの教会にお世話になるっていうのは、厚かましすぎると思わない？」

レノンは自室で寝入っているであろうハクを思った。リジーほど話していないが、見るからに大人しそうな修道女だった。きつとあの人は面と向かって出て行けとは言わないだろう。だがリジーのいうとおり、ここで普通に暮らしていくには厳しい。

「…………どこか他の場所に移る？」

レノンはゆっくりと肩に手をやった。幸いかすただけだったのだ、傷はそこまで深くはない。痛みはあるが、無理に動かさなければ1〜2週間ほどで治るだろう。リジーの提案は妥当だ。だが。

「…いや、逃げちゃだめだ。向き合わなくちゃ。」

レノンはベッドの上で座っているリジーと向き合った。肩の傷は痕が残る。これはハクの憎悪の印。形があってもなくてもこれから背負っていくものだ。今逃げてもいつの日か逃げられなくなるときはくる。

「…それに、ここを出るにしても準備がいる。旅支度をハクさんに協力してもらう必要があるし、場当たりで出てもメイアが言ってた見張りに見つかってすぐ捕まる。計画を立てなくちゃ。」

レノンは一転、ごろりと床に寝転がった。

「ひとまず、明日ハクさんと話をしてみよう。そのときにこれから決める。メイアが来るまではここで待たせてもらって、話の流れ次第で強行突破。ハクさんが限界なら望みどおりすぐにここを出る。どうなるか分からないから休めるときに休んでおこう。」

彼の言葉を受け、リナジーンもレノンにならない横になった。だが彼女は横向きになっていて寝る気配はない。

「…多分、眠れない——。」

しかたないな。目を伏せたリナジーンにレノンは笑いかける。

「じゃあ逃走計画を考えてくれる？大まかでいいから。根詰めたら寝られないからね。」

明るくいったあとレノンはランタンの灯を吹き消す。部屋は瞬時に真っ暗になった。

「それじゃ、おやすみ。」

一応保険として二人で一緒の部屋にいるわけだけでも、多分もう殺される心配はない。ただの直感だけど。問題は身の危険ではなく精神的負担。今日の出来事はリジーに刺激が強すぎた。無理にでも寝て体力を回復してくれないとこれからの行程次第では致命的な影響が出る。

床の人間は粗末な毛布を引っ張りあげて体を丸めた。見えないとは思うが彼の意思と同調して体が震える。他の部屋から一式移動させることも考えたが汚れるのでやめた。…早計だったか。小さく白い息が漏れた。

「……やっぱり場所変わろう。レノン、怪我してるんだし。」

ベッドの上でリジーがもぞもぞと動く。寒さで思わずはいてしまった息でばれたのか。まったく僕は、いつもリジーを騙しきれない。「や、どこでも寝られるから平気だよ。怪我したほうを床につけな

ければ問題ないし。」

それに、リジーにはちゃんと休んでもらいたいんだ。レノンは無理や論を受け付けず、くると背中を向けた。騙しきれなければ無理やりに納得させるしかない。卑怯だけど、僕の強情な行動を覆せるだけの力がリジーにはない。数分経ってリジーはあきらめた様子で布団にくるまった。

固い床で寝ていると、嫌でも感覚を司る神経が働く。昨日ほどではないけれど、頼んでもいない回想の繰り返しが始まる。眠れないのは僕のほうか。でもまあ、肩の痛みに寝ている場所。これで眠れなかった言い訳にはなるか。強情はった手前リジーには寝不足の顔なんて見せられないけど。

ミレー、ごめん。そして、ありがとう。

ハクさん、僕らは償い続けます。許してくれなくて構いません。

あなたの目の前でのうのうと生きていてごめんなさい。ごめんなさい。

ごめんなさい。

人は老いたら真っ白な髪になっていく。それなのに私は最初から真っ白だった。他の人たちはみんな綺麗な緑の髪だったのに、私だけ違う色。それがとても嫌だった。私が耐え切れなくなったときあなたにぶつけたわね。

場面は変わる。ハクは千年樹の側でミレーと笑いあっていた。逆光がまぶしいけど声が聞こえるから大丈夫。嫌なことなんてこれっぽっちもない。話は尽きない。誰よりも美しい髪を持っていたあなたは言ってくれたわ。『白はとても純粋な色よ。どんな色とも混ざって綺麗な色をつくるの。そんな名前を持ったあなたはきっと優しい人だわ。』

すべてが白になる。色が消える。まぶしくて目を開けていられない

い。

——朝日がカーテンを通してハクを照らす。瞳をあけるとそこは自分の部屋だった。

「…夢。」

鮮明に覚えていた光景も急速にあせていく。それに手をのぼそうとは思わない。ミレーはもういないもの。思い出だけで生きていかなくちゃ。あのとき復讐していたら、私は白い色ではなくなっていたのかしら。

どんな色でも混ざるということは、きっと受け入れられるということ。あなたが変えなくてもいいといってくれた私。私は私のままでいいのね。

ハクは大きく伸びをして身支度をする。机の上に置かれていたナイフはきれいに手入れされていた。大丈夫。大丈夫よ。律儀な少年を思い浮かべながら箱に丁寧にもどす。話をしましょう。そして今日で終わらせましょう。

白の修道女は振り返ることなく大部屋へ向かう。すでにそこには双子が座っていた。ハクはひとつの決意のもとその部屋へはいった。

笑って（前書き）

本当に楽しくて笑っていますか

笑って

修道女は口を真一文字に結んで入ってきた。レノンとリナジーンはハクの挙動を目をそらすことなくみる。彼女は臆することなく静かに双子の向かいの席へ着いた。ハクが言葉を紡ぐ様子はない。重苦しい沈黙がおけるまえにと、レノンが静かに口火を切る。

「…ハクさん、改めまして。レノンといいます。数日ですがお世話になりました。偽名を使い素性を隠しましたが、リジーは王女、僕は王女付きの召使いです。革命が起き逃げてきて、ここにたどり着きました。」

前日の彼女なら爆発しかねないことを言っても、ハクは黙って口をつぐんでいる。レノンは気にしないふりをして続けた。

「革命軍に見つかった今、僕らは処分待ちです。できればここで連絡を待ちたいのですが、ハクさんが一分一秒でもいたくないというのであればすぐに出て行きます。」

ハクはしばらく考えているようだった。だが彼女は返答することなく、不意にリナジーンのほうへ目をやる。

「…一つだけ聞かせて、リズ。」

はっとしたリナジーンは、眼前に追求も弾効もない表情を見た。

「私と笑顔で接したり話したり。あれは全部演技だった？」

哀願などでもない。そこにあったのは純粹な真相を求める瞳。リズはうつむく。

「…私は、昔の自分を忘れたかった。普通の女の子になりたかった。——だからラクに振る舞ったわ。ここだったらって思ってた。…私は責任から逃げてただけよ。でも、あれは私の自然体。ハクを騙そうなんて考えたこともない！」

リジーは顔をあげて、言葉をたどたどしく選り訴えた。字面だけ追ったなら空虚な謝罪だととれるだろう。疑ぐり深ければただの演技だとも考えるだろう。けれどレノンは知っている。彼女は正直だ。

狡猾な手管や騙す手口をリジーは知らない。計算ずくの悪意か無自覚な攻撃どちらが悪かレノンには分からない。

ハクはリジーの返答を吟味していた。次に彼女はついと、変化球を投げる。

「：レノン君、君たちはどうして逃げたの？」

詰問などでは決してなかった。軽い問い掛けだった。だからこそ難しい。

「それは――」

脳裏には当たり障りのないまとめかたが浮かんでは消える。保身のしかたばかり考えている自分に泣きたくなる。ハクが求めているのはこんな模範解答じゃない。

僕はリジーに生きていてほしかった。成り行きから処刑が失敗して、二人で逃げました。あのとき僕はおとなしくしていて処刑されていてもよかったはずなのに。

僕は悟った。あのとき最善だと思ったことは、押し付けの正義だと。リランが言っていた自己満足だ。叶えられるなら僕は。

「：どんなことが起きても、二人で生きたいと思ったからです。」

レノンは堂々と返す。小細工は無用。これが僕の答え。二人で逃げ続けるのは不可能だと思った僕の最善は、あきらめだった。逃げだった。だから処刑事故で起きた可能性にすぎた。

「――そう。」

ハクはまたも黙って、優しげな表情になる。

「二人とも正直ね。答えてくれて、ありがとう。」

ハクは微笑みを絶やさぬまま、修道着のポケットに手をするりと滑らせた。

「――！」

もう危害を加えることはないと踏んだのが外れたか。レノンはすぐに動けるように身構える。

だが手に持っていたのはナイフではなかった。

「：はい、リズ。」

リナジーンの前に押し出された紙は、仰々しい文章が書かれている。あっけにとられているリナジーンをみてレノンが覗きこんだ。

「…！」

「修道女になりたいって言っていたでしょう？神父様亡き今正式な修道女は無理だけど。」

丁寧に畳まれた紙は、修道女見習い承諾書。後見人はハクとなっている。

「…ハクさん、いったいこれは。」

レノンのかすれ声にゆるやかにこたえる修道女。

「いつまでもプー太郎の人を匿えるほどここは裕福じゃないわ。曲がりなりにも見習いがいれば考えなおすけれど。」

あなたの分も。そういつてレノンに渡されたのは神父見習い承諾書だった。やはり後見人の欄にはハク。

罨か？これを教会本部に送って密告：いや、革命軍に居場所を知られているから無意味。まさか、本気で？しかもさきほどの発言からすると、滞在を許してくれているらしい。

「…ハクさんは、僕たちを許してくれるんですか。」

そこで初めて、ハクは顔色を変えた。きつくはないがはっきりと分かる否定。

「…違うわ。私はまだあなたたちを許しているわけじゃない。」

白髪を垂らしながら彼女は続ける。

「ただ、わかろうと思っただけ。あなたたちと一緒に生きて、話して。——どうしてあんなことになったのかの理由を、少しずついいから知っていききたいだけ。」

ハクは立ち上がるとくると背を向ける。

「…私はこれから、あなたたちのやったことは許せないと思う。でも、三人で暮らしていくことはできるんじゃないかしら。」

心をそのまま言葉にしたようなつぶやきを残して彼女は立ち去った。レノンとリナジーンは顔を見合わせる。

「…私たち、ここにいることを許されたの？」

困惑しているリジー。僕らにしては珍しく、今鏡に映したように同じ気持ちになっている。

「…そう、みたいだ。」

ひとまず、この問題は、なんとかあったんだ。全身の筋肉が弛緩する。一粒の涙が頬を伝った。

「ごめんね、ハク…。」

僕たちは忘れちゃいけない。同時にハクの前でこんな態度をだしちゃいけない。折をみて話すとき以外は、見習いになった行き倒れの双子として接するんだ。二人と一人だ。これぐらいしないとここにいる資格なんてない。

何を話したか記憶にならないうちに、パンの臭いが備考をくすぐった。

「朝ごはんにしましょう。」

ハクが朝食ののった盆をもって戻ってきた。暖かいスープと小ぶりのパン。ハクがすすめてくれたパンは心なしかしよっぱい。

「…いずれ話してもらおうと思うけど、今は教会の客人として過ごして。それにサインするなら見習いとして。…この話は終わり！」

静かに口を開いていた彼女に似合わず、息を大きくすってしめた。

「食べたら教会の仕事を手伝って？」

レノンはそのと涙をぬぐう。…そうか、こういうことか。

「はい！ぜひ使ってください！」

僕は明るく応じた。その後レノンが黙っている間、リナジーンはハクと談笑していた。

本当の意味での平穏はくるのか。分からないけどもがくしかない。あなたがそういうことをするなら、僕は笑うしかないでしょう。もう誰の召使でもないけど、あなたの望みを叶えます。

平穏を愛して求めた彼女は笑っていた。かつて自分が姉に向けていたようにたえない笑顔だった。

『本当は泣きたいのにうまく笑おうとして、逆に痛々しくなるってことを知らないんだ。』

リジーの声が聞こえた気がした。

笑って（後書き）

更新スローペースすみません…。

また、お気に入り小説登録ありがとうございました。
あともう少いで区切りがつきます。

通知

朝食をあらかた片付け三人で暖かいミルクを飲んでいたときだった。突如がたんという音が響いたかと思うと、つかつかと革靴の音が近づいてくる。教会には夜中を除いて鍵がかけられていない。しかし挨拶もなくずかずか踏み込んでくる侵入者は救いを求めにきたわけではないだろう。

少女二人が体をかたくし、レノン目は目を細くした。一呼吸分おいて、その先で扉が騒々しく破られる。

「お邪魔するわよ。」

赤い女性と青い王子が、朝日を背に真剣な面持ちで立っていた。前にいるメイアの右足が蹴りの寸止めになっており、両腕で取っ手を握っている。仮にも神の身許だという自制心が働いたらしい。

「：なんなんですか、あなたたち！」

乱暴な行いを前にしたハクの怒りに謝りもせず、メイアはレノンのもとにやってきた。

「リズと、レノ。」

前髪で目元を隠したメイアは厳かに二人の偽名を言う。ついに審判が下される。レノンは逃げる手順を反芻した。

しかし二言目はこない。メイアはカインと顔を見合わせると、一歩後ずさりカインが前へ出た。彼はすうっと息を吸い、あとを引き取る。

「：……お前たちの今後について。——中央に出てきたり騒ぎをおこしたりしなければ、私たちはこれから一切感知しない。」

一気に言い切ったカイン。平たくいえば不問だ。死刑を免れるだけでも難しいのになぜこんな。

真っ先に反応したのはリナジンだった。

「：……そんな、どうして」

「理由なんてどうでもいい。せつかく拾ったその命、殺されたくない

ければ質問などせず黙っていることだ。」

どうして。暴動が起きているのに。こんなのは滅茶苦茶だ。質問できないことがもどかしい。双子を気迫で黙らせたカインは初めて修道女のほうに向いた。

「さて、ハク……。君はこの双子を受け入れられるのか？」

過去を知ったうえで。言外にハクはカインの言わんとすることを読み取った。

「……ええ、さきほどここで暮らすことについて話していたところです。」

臆さないハクをみて、王子は興味を失ったようにそっぽを向いた。そして、リナジーンと視線を直接あわせないようにしながら独り言のようにつぶやく。

「……まったく、君とよく似た女の子がいてね、妹みたいでかわいかった。……でもそのこは私の愛する人を殺した。……愛は怖いね。まあ革命に参加した私も私だが。」

声をかけようとしたリナジーンを、レノンが静かに止めた。カインはなにも求めていない。そうこうするうちに、カインはため息をついてもときた道へ進んでいく。

「そうだ、ハク。」

カインは立ち去り際にハクに笑みを向けた。

「もしも。悪ノ娘かその手のものがこのあたりに現れたら、伝えておいてくれ。」

双子が注目する先で、音を発する王子。

「私はどんな理由があろうとも、君たちを許さない。許すことなど絶対がない。」

ハクが口をつぐみ、二人は視線で会話する。静かに言い切ったあと、カインは黙って立ち去っていった。

「……っと、お邪魔しました。もう会うこともないでしょう。」

様子を見守っていたメイアは軽く礼をすると、机の上にだされていたままの書類に目をとめる。

「修道女に神父……。いいんじゃない？ただ中央は今立て込んでいるから、一月ほど経ってからにしたほうがいいわよ。」

無表情で誰とも無しに伝えると、カインのあとを追おうとする。そのとき扉の前に黄色が現れた。

「……どうして!？」

メイアの前に立ちはだかったリナジーン。体は小さいながら両腕を精一杯のばしている。

そこに場違いな鈴の音が響いた。呼び鈴。修道女さーんという声が遅れて聞こえてくる。後ろ髪を引かれながらハクは入り口へと小走りで向かった。

「……別に知らなくてもいいじゃない。余計なことしなければこれから二人で暮らしていけるわ。それじゃ不満？」

そこでメイアは言葉を切る。右手首に力がかかっているのを感じ振り返ると、少年がほどほどの力でつかんでいた。

「……確かに生きていくことを許されたのはうれしいです。でもこんな説明もないままじゃ、納得できませんよ。」

メイアは交互に前後を見やる。二人とも揺らぎのない瞳だ。

「……………わかったわ。」

年長者は首を振ると、肩にかけていたかばんから大きな茶封筒を取り出した。

「後悔しないというのならその中を見なさい。」

渡された双子が無地の封筒に見入っているうちに、メイアは静かに立ち去った。

彼女が明るい廊下を歩いていると修道女とすれ違う。白い娘は小さく会釈をしてくれる。

「……あの二人を、よろしくね。」

すれ違いざまにささやかれたハクは、聞き間違いかと立ち止まる。しかし振り返って詳しく聞かないうちにメイアの姿は消えてしまった。

「……………」

ほどなくして馬のいななきが聞こえ、遠のいていった。

「……レノン、開けてみよう？」

封に指をかけたまま動かないレノンは、リナジーン言葉にはつとした。

そうだ。いまさら後悔なんてない。きっと知らない後悔する。やった後悔のほうが、きっと折り合いだってつけられる。

レノンは丁寧に蠟ではりつけられていた封筒をぴりぴりと破る。入っていたのは紙質の悪いビラ。黒字ででかかど書かれているゴシック体。

「————なんだこれは!!！」

戻ってきたハクがびくりとする。レノンは封筒を床に投げつけ、隣のリナジーンは震えている。室内にまっている一枚のびら。ハクは号外を思い浮かべた。

いったい、なにが。ハクは手をのばしてその紙をとる。一秒で彼女は理解した。

逃亡中の悪ノ娘、捕まる。

処刑の時間は、本日午後三時。

通知（後書き）

少しかみ合わないところがあったので、後ろ二行分修正しました。
2月23日。変換ミス修正しました。

ピリオドまでの距離

「どうということなんだ！暴動をおさえるためにリジীর身代わりを処刑するっていうのか！！」

リナジーンは、レノンがここまでひどく激昂しているところを初めてみた。いつも冷静沈着な様子を崩さず的確な判断をするというのに。

レノンの熱っぽい語り口は止まらない。

「それともリジীর誘拐して処刑するだけでも？」

駄目だ。おさまりそうにない。

興奮覚めやらぬレノンにリナジーンはずいと歩みよった。

パシン。一般より軽いものの、彼女最大の平手打ちが繰り返される。

「レノン、落ち着いて！」

不意打ちに面食らったレノンは我に返り、唇を震わせながら考えこむリナジーンをみやった。

「ここから中央まで半日かかるんでしょう？だったら誘拐のチャンスなんてないわ。：ねえハク、あの二人はもう帰ったでしょう？」

いきなり話を振られたせいかハクはびっくりとしたが、すぐに居住まいを正した。

「ええ。帰ったわよ。」

その言葉にリナジーンは息をつく。

「：だったらこの線は消えるわね。それに身代わりだけど：レノン以外になってくれる人はいないと思う。」

「だから、暴動をおさえるために：！！」

「それにしあって他の方法があると思わない？」

強い調子でレノンを遮ると、リナジーンは続ける。

「レノンはあの剣士さんと顔見知りでしょう？：カイン兄様はあの状態だからともかく、剣士さんは暴動を鎮めるために無実の身代わ

りを殺すような人なの？」

諭す口調に動きを止め熱を収束させると、元召使はゆっくりとこたえる。

「…いや、メイアは曲がったことが大嫌いだ。仮に王子の発案で国を安定させる理由だとしても、そんなこと許さない。」

冷静になされる分析に修道女が補強を加える。

「…それに、カイン様は、その…：あなたたちを憎んでいたわ。あの二人なら私たちを力でねじふせてリズを連れていくことだってできたはず。そのほうが手っ取り早くて面倒がないんじゃないかしら。」

気味が悪い現実を考証するため、リナジーンが総括する。

「…暴動をおさえるには、名目だけでも王女が死ねばいいんでしょ？ 自殺とか抵抗されてやむなく殺したとか、言い訳だってできるはずよ。わざわざ大々的にこんな公開処刑にする必要ない。」

…公開処刑？ ハクは瞬きをすると、ビラを二度見する。処刑について書かれているのは時刻のみ。公開の文字はない。そんなハクの様子を見て、レノンがこともなげに口を開いた。

「…ああ、黄の国では私刑を防ぐため、死刑は原則中央の広場で公開処刑なんです。もっともそれは名目で、だれもそんな場面見たくないのでも多くは監獄で病死という処理になります。先代から公開処刑が増えました。主に政治・思想犯へのみせしめっていう効果をふまえー」

レノンはそこで目を見開いた。

待て。僕たちは今どうして公開処刑をするのかの話をしていた。無実の人が処刑される。倫理に反する。わけが分からない。デメリットだらけ。これが前提だった。では逆に考えたら？ 公開処刑をしなければならぬ意味は？

「…ピリオドだ。」

「え？」

「ピリオド。革命は王女の死で終わる。だからしつかりと終わらせ

なければいけないんだ！」

レノン は室内を歩き来し始めた。

「王女の死をみんなに見せることによって、革命軍への不満をそらす。革命で死者も多数出ただろうから、王女は死にました、おしまいだけじゃ暴動は収まらない。」

「ちょっと！」

リナジーン はレノンの腕を掴んだ。

「それじゃあ、説明になってないわよ！公開処刑をする背景だわ！」

レノンは不満げな姉の手を優しく払いのけた。

「わかってる。続きがあるんだ。」

そうだ。ほかでもない騒動の原因、自分達のことを忘れていた。

「王女が処刑されることで、僕たちは追われることがなくなる。昔関わった人たちが多くいる中央にいきさえしなければ、流れ者の双子とか、どうとでも言い張って暮らすことができる。王女は国民の前で死んだんだから。」

とつとつという、リジーが正面で首を捻った。

「…確かに、レノンのいうとおりだと思う。ただそれだと、まるでだれかが私たちを助けてくれるみたいよ？心あたりなんてないけど…。」

様子を見ていたハクはおずおずと口をはさむ。

「あの剣士ーメシアさんかしら？」

レノンは難しい顔をして丁寧言葉を選んだ。

「メシアとは親しくしていたので可能性はありますが、違います。」

メシアはリジーと体格が違いすぎ、また革命軍のリーダーなので処刑人に気づかれないわけがありません。」

部屋は沈黙に包まれた。

「…私は嫌われていたから、身代わりなんていないわよ。もう一度考えましょう？このビラが正しいとは限らないわ。」

この堂々巡りを終わらせようとするリナジーン。しかしレノンは食い下がる。

「メイアはよっぽどのがないと思えない。きっと話してくれないのは理由があるからだ。：リジー、心あたりない？金髪の人で。誰でもいい、思い出して。」

半信半疑のままリナジーンが記憶をたどるなか、ハクはぼとりとビラを落とす。

「：レノンくん、どうして金髪の人なの？かつらは駄目？」

呼ばれたほうは怪訝な顔をしながらハクに近づく。

「処刑はギロチンなので、かつらだったら衝撃で外れてしまいます。確実性を求めるなら地毛が金髪でないと。」

「……そんなんっ！」

ハクはよろよろと座りこんだ。

「ハクさん？」

「ハクっ!？」

頭が痛い。めまいがする。求めていた答えは自分のなかにあった。

「：さっき呼ばれて入口にいったら、金髪の女性がいたわ。：その人は、自分の分と夫の墓を作ってくれていったの。：自分の死期が近いから、せめて夫が死んだ場所で死にたいって。骨はないけど墓を……って。」

レノンの顔がみるみるうちに青ざめていく。夫が死んだ。金髪の女性。

「――その人が何歳ぐらいだったかわかりますか!？」

「多分：二十代後半から三十代前半よ。」

年代は、多分そう。でも外れていてほしい。

「：リジー、封筒持ってきてくれ!こんなビラ一枚大きな封筒にいれるはずない。まだなにかあるはずだ!」

少女は言われるままにあたふたと封筒を持ってきた。中ではかさこそと音をたてている。

馬鹿。どうして気づかなかったんだ。このビラだけに気をとられてしまった。

「レノン、封筒……!」

封筒のなかに、ふたまわり小さい茶封筒が入っていたらしい。厚みがあるそれを受け取ると、差出人、宛名ともに書かれていない。

「…これを。」

ハクが差し出したペーパーナイフをレノンが受け取り、やや雑に開封する。ハクからは何枚かの便箋が見えたが、二人は最初の数行を読んで蒼白になった。

「…なんで？」

だがリズの戸惑いはレノンの比ではない。彼の手から封筒が、続いて便箋が滑り落ちる。

「…リジー、すぐに出る準備して。」

「…え？」

突然のことに、リナジーンは頭がついていかない。落ちた封筒をハクが広いあげると、二つの包み紙と四角い物体が入っている。

「…っ、はやく！王女として処刑されるのはリランナーハクさんが会った人だ！その人は僕らの…」

ハクの持っていた写真立てには、幸せそうな家族が写っていた。

先ほどあった女性の若いころの家族写真だ。

夫と見られる男性が彼女を気遣っている微笑ましい場面。母親は女、父親は男の赤ちゃんを抱いている。双子だ。日付は今から14年前。

…どうということ。ここにいる女の子は王女様で、男の子は召使。

この身分になった経緯は分からないけど、二人は双子。

ハクは取り付かれたように包み紙をあける。

「僕らの本当の家族だ！」

包み紙には、へその緒と生まれた詳細なメモがあった。

…あなたたちは、一体誰。

ハクが呆然と見ているなかで、双子は慌ただしく準備を始めていた。

身代わり（前書き）

自分のことは棚に上げて。

身代わり

「――本当によろしいんですね。もう後戻りできませんよ。」

赤い剣士は隣の人物に声をかけた。生なりの粗末なドレスを着た女性は、くすりと微笑む。

「ええ、後悔なんてしません。：メイアさん、願いを聞いてくださりありがとうございます。」

馬の足が地面を掴むと同時に、女性が被っているボールが揺れる。メイアは返事をしないまま前だけを見た。

「――はいはい、どちらさまですか？」

金の髪の女性はおっとり対応した。人に好かれそうな柔らかいかたなこと。：でも時間がないの。

「革命軍の責任者、メイア・ロートと申します。処刑を控えていた王女が何者かに手引きされ逃げました。こちらのお宅に彼らの使っていた馬がつながれていましたので、失礼ですが改めさせていただきます。」

メイアは一気に言うと、返事を聞かず部屋に踏み込んだ。革命軍のメンバー三人がそれに続く。

「あら、あのあおい馬は私の馬よ？」

「手分けして探してちょうだい。隠れられそうな場所は見えて。私は入口を固める。」

無視してメイアが出した指示にメンバーは従う。だが女性は動じる様子もない。

「申し遅れました。リラン・モルデントです。どうぞお調べになってください。何もありませんが。」

メイアはリランと対峙しながら周囲を盗み見た。テーブル、棚、キッチン……。中流階級の家なのに飾り気がまるでない。馬を養える

なら余裕はあるだろうに。

メイアはじりじりと結果を待った。

「…異常ありません!」

「こっちもだ。」

「同じく!」

足早に帰ってきた三人は悔しそうな表情をしていた。視線はみなリランに向けられる。

それにしても油断ならない。あおい馬……黒の肌をもつ馬は珍しい。その雄大さから値も張る。貴族階級でもなかなかいないのに一般人が持っているはずがない。この人は嘘をついている。

「…あんな馬、買えるわけないでしょう。悪ノ一味はここに立ち寄った。違う!？」

メイアの糾弾に、リランは笑った。

「そう、悪ノ娘だったの!」

悪びれる様子もないリランは革命軍を尻目に続ける。

「あおい馬を連れた女の子がやってきて、私の持っていた馬と交換してくれて言われたの。」

追跡メンバーはみなあきれている。少し考えれば悪ノ娘だとわかりそうなものののに。

「…リランさん、応じたんですか？」

「ええ、転売したらお金になるでしょう? 最近やりくりに困って大変なもの。」

悪びれる様子もないリラン。悪徳商売人め。商売根性をおさえないよ。メイアは心中で罵っておき、頭を切り替える。そして、声を抑えて質問した。

「…どっちに逃げていったかわかりますか？」

リランは首を傾げた。

「確か…もときたほうへ戻るといっていたわ。」
その言葉に三人は騒然とする。

「馬鹿な、どうしてわざわざ戻る!」

「いや、気づかれずにUターンして変装でもしたら悠々逃げられる。俺達は逆方向を探してるんだから。」

「でも鉢合わせしていませんよ!?! 攪乱かもー」

メイアは手をうち鳴らした。三人はいっせいにリーダーを見る。

「手分けしましょう。アルフレッドとビルはきた道に戻って。チェットは海へ向かって。」

「メイアは!?!」

指示者はゆっくりと息をはく。

「私はここで、悪ノ娘がこないか待つわ。近くに隠れている可能性もある。: 2時間後にここへ戻ってきて。戻ってこなければ追跡中とみなしすぐ後を追うわ。」

三人は足早に家から立ち去った。

室内には女性が二人。

「:メイアさん、どうしたの?」

まだ、シラを切るか。

問われたほうは、馬の足音が完全に聞こえなくなってから口を開いた。

「:キッチンにマグカップが二つつけてありました。:悪ノ娘はしばらくここにいた。時間的に考えてついさっきまで。」

「:あれは夫の分」

「ありえない。」

ばっさりきって捨てたメイアをリランはにらみつける。

「リラン・モルデントさん。あなたのご主人は革命に参加していました。いつのものですか。そんな前のもの放っておくんですか?」

沈黙が流れ、リランは息をつく。

「:マグカップのこと、忘れていたわ。」

失敗した、と悪戯っぽく笑ったリランに、メイアは詰め寄った。

「リジー、とにかく着替えてきて! :ハクさん、教会（こい）に馬はいますか!?! もしくは馬車か荷車でも構いません!」

ハクは彼の剣幕におののく。

「いいえ…。台車も人力のものしか…。」

レノンは小さく舌打ちをする。

「速度は落ちるけど二人乗り…ぎりぎりいけるかいけないか。…
…くそっ！」

レノンは外へと飛び出していった。

「…待って！　どういうことなの！？」

ハクは封筒を持ったまま追いかける。流し読みだが、この手紙に書いてあることが真実だとすると。

「…どうもこうも、そういうことです。僕とリジーは血がつながっています。純粋な王族じゃない。小さかったので理由はわかりませんが、実の親とは離れて育てられました。今までどこの誰とは分からなかったんですけ…ど！」

レノンは近くの木に繋がれていたジョセフィーヌを放した。軽く歩かせ、走れる準備をする。

「二十代後半…年齢から考えて、実の姉か、年の近いところかおばにあたる人だと思います。…あまりかかわりが無い家族だとしても、勝手に死なれるのは、正直抱えきれません。」

…と、着替えを終えたリナジーンがこちらのほうへ走ってくる。ブラウスにキュロット。修道服が着脱しやすかったからか。こんな早く来るとは誤算だった。

一瞥するとレノンは無表情に告げた。

「リジーはハクさんとここにいて。僕が処刑を止めてくる。」

「なに言ってるのよ！　私は行くつもりだったわ！　なにがなんでも止めなくちゃ。無実の人が殺されるなんて！」

本人がでてきてどうする。最悪共倒れだぞ。言っても聞きそうになかった。レノンは現実をつきつける。

「でも馬が…！」

そのときジョセフィーヌがいなかった。三人が振り返ると、そこには一頭の馬がいる。

リランのところにいるはずの、あおい馬だ。

「…止めないでよ、レノン。」

レノンは無言でジョセフィーヌにまたがった。

「…私も行くわ。」

ハクは小さく、だがはっきりと二人に告げた。

身代わり（後書き）

3月3日..誤字修正、漢字変換しました。

あいぜふ

「…私も行くわ。」

ハクはぽつりとつぶやく。予測しなかった言葉に双子は動きをとめた。

「…これは僕たちの問題です。ハクさんは関係ないんですよ!」

「レノンっ!」

余裕を失ってる彼に事実を投げ掛けられる。わかってる。お節介ってことくらい。

「確かにそうよ。でも関係ないことないでしょう!これから暮らしていくのに!!」

傷つくのが嫌だった。でももう逃げない。

「それに修道女の地位を利用して、いざとなったら二人を逃がす時間くらいは稼げるわ!」

レノンは教会にとりつけられている時計を見る。8時半…。ぎりぎり…いけるか。一人が大きなため息をつく、馬からおりた。

「リジー、ジョセフィーヌに乗って。ハクさんはその後ろに。」
目をぱちくりとさせるハク。

「まだ肩が本調子じゃないのでリジーに捕まってください。…乗馬の経験は?」

「え、ーないわ。」

再度吐かれるため息。

「…怪我しても知りませんからね。」

ハクは唾を飲み込むと、覚悟を決めてうなずいた。

「…一体どういうことですか?悪ノ娘を助けるなんて。」

いきり立つメシアに、リランは椅子を勧める。メシアが言われるまま座っていると、リランはお茶の準備を始めた。

「：助けたくなったから。では駄目かしら？」

かちゃんと差し出されたティーカップ。隠していたことがばれてもリランはなにも変わらない。メイアは軽く礼をして紅茶に口をつける。ほどよい温度。

「：駄目です。理由を説明してください。内容次第ではあなたを――」

「いいわよ、死んでも。」

座っていたリランはふいと立ち上がる。怖いものなしの彼女は棚の引き出しから写真たてを取り出した。

「：私の夫は革命軍に入りました。やるべきことをするために。帰ってこないということは、誰かに邪魔されてできなかったんでしょう。」

ついと押し出される写真立て。そこに写っている男性。

「：っ！」

思わず取り落とすカップ。陶器のそれが割れて、床に紅茶が吸い込まれる。

「：メイアさんなら分かるんじゃないかしら？ 見覚えがないとは言わせないわよ。」

知っている。職種は違えど共に城で働いていた人だ。そして。

「：教えて、メイアさん。あのひとは誰に殺されたの？」

顔見知りだった私を殺そうとして、青の王子に、倒された。

「カインさん、私のこと恨んでいます？」

金の未亡人の問い掛けに、王子は見もせず答える。

「：聞かなくてもわかりそうなものを。」

未亡人はころりと笑った。

「そうですね。私もあなたと同じです。余計なことをしてくれたな、と。」

そこで王子は初めて顔を向ける。

「…あなたは私の夫を殺しました。メイアさんが殺されかけていたから、が理由でしたけど、私の愛する人を殺したことになるありません。私はあなたを許しませんよ。」

ベールの向こうの表情は伺えない。しかしカインはひるまない。

「…だが愛を語る貴女が夫の死の原因をカードにこんなことを申し出る。貴女も悪だ。」

「…ふっ。」

愛憎は表裏一体よ。愛は相手がいなければ成立しない。奪われたら全力で憎み、奪われそうになったら全てをかけて守る。

「…愛を語りながら人を殺すあなたに言われたくないわ。」

愛するために悪にもなれる。それが人の本性よ。

それきり一行は黙り、馬の駆ける音だけが響いた。

「ハクさん、急発進や反動があっても馬のお尻は蹴らないように。

すごい勢いで走りだしますから。で、しっかりとリジーに捕まっていってください。…リジー、僕が合わせるから、ハクさんが大丈夫な速度から走らせて。ハクさん、最初はゆっくりいきます。だんだん早くなっていくので覚悟してください。」

「ハク、しっかり捕まっていってね。…いくわよ!」

リズが手綱で合図を出す。馬はゆっくりと走り出した。

「…きゃ!」

思わず声をあげ、横座りのハクは自分より小さな少女にしがみつく。ちょうど自分の正面を走っている少年にちらりと様子を伺われた。

思ったより反動があるけど、もう声は出さない。無理矢理ついてきたんだから足手まといにならないように。ハクの懷で、持ってきたままの手紙が音をたてた。

「……………」

城に向かうまでの間、メイアは黙りこくったままだった。逃げた

王女探しで疲れたのかもしれない。いくら強くても男と同等以上の体力を求めるのは無理があるだろう。

「メイア、大丈夫か？はやく寝ろ。」

濁った目の彼女は緩慢にうなずく。

「…そうね、そうさせてもらうわー。」

今にもメイアは目を閉じてしまいそうだった。何か話し続けなければ。カインは手近な話題を投げた。

「それもこれもすべて悪ノ娘と召使のせいだ。逃げだしたりしなければ」

「やめて。」

か細い声がカインの耳朶に突き刺さる。

「…なにが悪なの。分からなくなってきたわ。私たちは王女が悪で、倒すことが大義だと信じて行動してきた。でも……。」

「メイア、何があった。」

ただならぬ様子に、カインは狼狽する。

「……なんでもない。やっぱり昔あのこー悪ノ召使と一緒に剣の鍛練してきたから、すこし感傷的な気分になっただけ。」

…そう。疲れているだけよ。だからあんなのは見間違い。

間違っていないとしたら、私たちは最初からかなうはずのないものと戦っている。

おはなし

二頭の馬は人が走るほどの速度で進んでいた。女性二人には悪いが、今はレノンが少しずつ速度をあげ、リジーがそれについていている状態だ。休憩は…とれないだろうな。息切れ混じりの声が風にのる。

「レ、ノン、あの、今更な話なんだけど、公開処刑よね？顔を見せたら一発でわかつちゃうわ。想像なんてしたくないけど…どこかで首だけ落として体だけ公開とか、そういうのは考えられない？」

「それはないよ。」

前方に障害物が無いことを確認して、リジーのほうに向き直る。

「革命で死者は出てる。やるなら適当に見繕ってとっくにやってるよ。」

そう。それだけ僕らを殺したかったというわけだ。あの青の王子は。

「手紙の冒頭にもあった。『私は王女として処刑されているでしょう。』って。僕の処刑のときギロチンが動作不良を起こしたから、執行人が直接斬首…ってなるはずだ。あの刑は罪人の顔に布をかぶせることが認められている。引き出されるときもメイアたちが手をまわしてはやくからつけていれば問題ないよ。」

全く関わってこなかった家族。聞きたいことは山ほどある。レノンは少しスピードをあげた。

「お話があります。」

——教会から少し離れて。暴動を収めるため出発していた私たちを止めたのは、馬に乗ったリランだった。

「…失礼、何用でしょう。急いでいるのです。」

私は反応できずにいた。

機嫌の悪いカイン。ひとまず対応しただけでもよしとするか。

「：教会にいるはずの双子のことです。」

この言葉に、さっとカインの顔色が変わった。私がカインに昨日のことを話していないのが原因だけれど、きつと心のなかは得体のしれなさでいっぱいだろう。相手が悪すぎる。

「：何者だ、貴様。」

敵意むき出しのカインに微笑む女性。

「：あなたに殺された人間の妻です。カイン・ブラワ殿下。」

そこで初めて、リランが本性を現した。

一行はある家の前で止まった。そこは子供のいない夫婦が住んでいて、これから家主がいなくなる家だった。

「：昼休憩だ。食材は拝借する。準備ができるまで待っている。メ
イア、見張りを頼む。」

カインが単身家に入り、外には女性が二人。

「：休憩をとったあと、しばらく走って荷馬車に移ってもらいます。
乗り心地はよくありませんが罪人なのでー。」

リランは答えない。自分の家を前に何を思っているのか。メイアはふと聞きたくなった。

「：貴女は満足ですか。」

振り返った勢いで、リランのベールが舞い上がる。彼女は隙をつかれた表情をしていた。もろに反応されるとは思わなかったので、メイアのほうが面食らってしまう。

「：ええ、とても。」

ベールの下は晴れやかな顔だった。分からない。読めない。笑顔の裏の感情なんて。けれど読めないということは、彼女の本心なのかもしれない。

「ハク、大丈夫？お水飲む？」

地上でへばっているハクは、すこしだけ水を飲み、リズに突き返した。

「…ありがとう。」

双子は疲れている様子がない。レノンなどはやく出発したくてしょうがない様子だ。馬を休ませるため必要最低限の休憩をとるといったとき、ハクが涙を流さんばかりに喜んだのは永遠の秘密だ。

「時間はかかりますけど距離的には大丈夫ですよね…。帰りますか？」

負傷している肩をさけながら柔軟体操に励む少年。冗談じゃない。

「いいえ、帰りません！」

ハクが出せる限りの声で反応すると、レノンはにかつとする。

「それだけの声が出るなら大丈夫ですね。…行きましようか。負担を分散したいので、次はあおい馬のほうに乗ってください。」

彼は草をはんでいる馬をゆっくり引き戻しはじめた。

悪なんてもものじゃない。悪魔だわこのこ。…いえ、無理してるだけでしょう。家族が殺されかけているのに。

ハクはできるだけしつかりとした足どりで馬に近づく。懐から紙が数枚落ちた。

「あら、なにか落としたわよ。」

すでに馬に乗っていたたりズに指摘されはつとする。ああ、大事な手紙。拾わなければ。

彼女のおろした手が便箋を拾うことはなかった。

「ハクさん持ってきてたんですね。…あ、とりあえず乗ってくださいい。」

またも双子に助けられ、ハクはほうほうのていで腰を落ち着ける。「…：よつと。大丈夫ですか？…：手紙、落とすといけないので僕が持ってます。」

レノンは便箋を四つ折にするとズボンのポケット深くにしまった。あまり丁寧でない手つきにハクは思わず口を出す。

「レノン君、あなた家族をどう思ってる？」

ジョセフィーヌに跨がる少年は思案顔だ。

「…僕にとっての家族はリジーだけですよ。育ての親はメイアの家族。…リランさんには逃げるときに助けられたのでお礼を言わなきゃ。そして後味が悪いので、メイアあたりを説得して処刑されたことにして終わらせる…そう考えています。」

微妙にはぐらかせたあと、レノンは馬を走らせた。一呼吸遅れて走る馬。すこしだけ曲がった背中。

「…手紙は全部読んだの？」

「いえ、二、三行程度です。」

ハクは息を吸い込んだ。

「すぐに手紙を見なさい！はやく！リランさんのために！」

剣幕に圧倒され、リズとレノンは手綱捌きを数秒忘れた。

「私も詳しく読んでないけど、あなたたちが家族と離れなければならなかった理由が書かれているはずよ！」

レノンはやや緩慢に手紙を広げる。その目がみるみる険しくなっていた。貪るように便箋を加え、次々と文字を追っていく。全て読み終えたあと、彼はくしゃりと手紙を丸めた。

「…リジー、ちょっと飛ばすよ。置いていくことになると思う。ハクさんが大丈夫そうなら追いついてきて。」

言うがはやいか、あおい馬は加速した。

「…ちよ、どういふことなのよ！？ーごめんねハク、飛ばす！」

ジョセフィーヌも緩やかだが速度をあげていく。ハクは振り落とされないようにするだけで必死だった。

おはなし（後書き）

3月3日..一部追加しました

ステージ

——拝啓、双子様。

こんにちは。リラン・モルデントです。影武者さんのほうは書面上は再会、王女様のほうは初対面ですね。

これを読んでいるころには、私は王女として処刑されているでしょう。ですから、理由も含めて話しておこうと思います。

あなたたちは血の繋がった双子です。もちろん姿かたちがそっくりなので、言うまでもないことかもしれませんが。保証ですか？教会でお産をしたので、その緒をいただきました。二人分、封筒に同封しています。あなたたちはちょうど教会の鐘が鳴っているときに生まれたんですよ。

双子で大変そうだな、と思いました。育てていこうと思いました。リナジーンとレノン。悩みながらつけた名前です。でもできなかった。なぜか。

私たちが二人の子供を育て生きていくにはまだ若すぎたからです。夫の収入も充分ではありませんでした。

幸い、城に勤めるかたに引き取っていただくことができました。女の子はさきの女王様にかわいがられたようですね。二人そろってでなかったのが残念ですが。

姿をみせる資格などなく、また許されないと判断したので、あなたたちのところに赴きませんでした。生活に余裕ができて、引き取るには二人の身分がかたまってしまっていました。

勝手ですが、様子は知りたいと思っていたので、城下街で警備の仕事をしていた夫に見てきてもらいました。リナジーンさんは見かけるかどうかのレベルでしょう。レノンさんはしゃべったことがあるはず。ロートさんのご主人が同僚だったので。

革命が起きると聞いて、私たちはなにができるか考えました。

その結果がこれです。夫はあなたたちを連れだそうと城下へ向かいましたが、できたのでしょうか。ともかく、無事に逃げられたように思います。

その命を無駄にしないよう。二人でこれからを過ごしてください。

「――では行こうか。」

カインはリランを荷馬車へと案内する。彼女はふらついた足どりで乗り込んだ。

「……カイン殿、なぜ王女はこのような出で立ちで？」

馬車を持ってきた御者は、包帯でぐるぐる巻きにされた目と、その上からベールを被っている姿に疑問を持った。

「逃げているところに矢を放った。振り返った王女の目に当たった。」

「だから弓はやめろっていったのに。……包帯は止血、ベールはとりあえずね。……見ていて気持ちのいいものじゃないし。」

「ふん。死んでもらっては困るから巻いたままだ。それでも手加減したつもりだが。」

押し殺した声と、反省の色が見えない王子。

御者は思わず身震いする。剣士が気づいているかは知らないが、振り返って目に当たるといことは最初から頭を狙っていたのではないか？ 殺すつもりで。……もちろん警告として頭の横へ射た可能性もあるが。

……悪の娘が、青の王子を悪にしたか。

御者は合図なしに馬車を出した。

「――なによ、それ。」

リズは早口で受けた説明に呆然としていた。初心者に優しくない

速度は以前保っている。

「ーっ、もう一言いってやらないと気が済まない。…ハクさんすみません、しばらくはこの速さで。」

「わか…った……」

ハクは意識を手放す寸前だった。

「絶対手を放さないでくださいね！時間がタイトなので落ちても拾えませんか！」

ハクはぎゅっとリズにしがみついた。

「…あなたにお願いがあります。きいてくれますか？」

メイアはがたがたと手を震わせる。怖い、体が熱い。

「悪の双子を見逃して。私を代わりに処刑しなさい。」

相対する女性の据わった目をみて、メイアは気力が吸い寄せられるのを感じた。

「それは…できない……。筋は通さなければ。」

「あのこたちの運命を変えておいて筋ですって？そんな曲がったもの折ってしまいなさい！」

リランの怒りに、剣士は震えることしかできない。

「…無理にでもきいてもらうわ。死にたくなければ聞きなさい。」

メイアは椅子から転げ落ちて、すぐ近くにある染みに目をやる。

「謀ったなー！何を入れた……。」

もっと、警戒するべきだった。

「強毒性、自家製の薬を。……毒がまわるまでお話でもしましょうね。」

この人は、悪ノ娘を逃がしたのだから。

——馬車の両脇にカインとメイア。念のために二人は馬車に乗り込まなかったのだけれど、どうやら正解だったらしい。

「御者さん、このままスピード出して広場へ向かって。振り返っちゃダメよ。カイン、引き続き護送を頼むわ。」

メイアは手綱を掴み徐々に速度を落とす。

「どうしたメイア！」

問いに顎で後方を指し示す。小さな点。それが二つ。

「…あいつら」

「加勢はいらない。あたしが止める。流れ矢が怖いから変なことしないでちょうだいね。」

メイアは答えを聞かず、剣の柄で馬の尻をついた。驚いた白馬は勢いよく走り出す。頭をフル回転させるため、カインのほうを見やりにしない。

さて。いったいどうしたものか。

「……さしずめラスボスってどこかしらね。」

いいじゃないの。やってやるわ。どうせ、誰も幸せになれないお話よ。見境なく暴れてやる。^{ゲーム}

ステージ（後書き）

3月1日.. 一部描写・誤字訂正しました

それはできない相談だ

レノン目は細める。赤いものが前方にいる。メイアだ。じつと止まっていて剣をひっさげている。これは避けられないな。彼はぎゅっと短刀をにぎりしめた。

「…荒っぽいことになりそうです。リジーは構わず先に行って。僕がなんとかするから。」

「一人でなんでもしないでよ！」

「騎乗したときの戦いかたなんてリジー教えてもらってないだろ。まして相手はメイア。男でも互角に戦うんだから。」

ぐうの音もでない彼女は、ふくれっつらをした。

「自分ができることをやるんだ。いいね？…ハクさんが襲われることはないと思いますが、充分注意してください。…リジー、行って！」

むき身の短刀を顔の前で横向きに構え、レノンと加速してきたメイアは真っ向からぶつかりあった。

「——確かに私は何人か殺した。革命軍に対立した人をね。しかしわかっていたはずだ。殺すか殺されるかだと。それを、恨まれる筋合いなどないよ。」

「あら、そうかしら？恨むには理由があるのよ？」

そうして彼女は、私のほうを見た。

「持ち帰って検討する…。メイアさんがそう言ったから、昨日は鎮静剤をあげたのに。このままじゃ、あなた死んじゃうわよ？」

私は馬に掴まっているのがやつとの状態だった。容態の変化にカインは動揺する。

「な…っ、貴様何を！」

「願いを聞いてほしかったからこんな手段まで使っちゃった。強毒

性。鎮静剤を打ったら一日くらいもつけど、じわじわと効いて最終的には死ぬわ。」

芝居がかった説明口調。私の横で、カインが矢をリランの首にあてた。

「今すぐ解毒しろ。」

「双子を助けてくれるなら。」

「できない相談だ。」

「なら私もできないわ。」

静の女性と動の男。カインは矢を抜き振りかぶった。

「私を殺したら。」

王子の手が寸前で止まる。

「彼女の解毒は不可能になる。革命後の処理について意見が割れ、青の王子がリーダーを毒殺。……こんな筋書でどうかしら？」

「貴様……！」

「それとも仇として、あなたが死んでくれる？ただ殺すのでは足りないから、あることないこと書き殴って社会的に抹殺してあげる。

ビラの準備はできているのよ。風船にくくって飛ばせば青の国にも届くでしょうね。」

二重三重の綿密な計画。そこまで考えるか。それだけ本気か。メアは張っていた気を抜いた。どうせ彼女の本気には敵わない。

鎮静剤の効果が切れそうで、限界は近かった。私はカインの腕を掴む。彼は迷っていた。

「……どうするかは、あなたが、決めて。もともと私情で始めた革命よ……。たまたま国民の不満と混ざって成功しただけ……。あなたも、決着をつけないといけないから、あなたが、決めて……。……。」

長い沈黙だった。潮風のおいが運ばれてきた。

「……解毒剤をよこせ。それができなくても鎮静剤くらい渡してもらおう。……話はそれからだ。」

顔をあげることにすらできなかったから、彼らがどんな表情をしてい

たのか、私にはわからない。みなくて正解だったかもしれない。

「邪魔、するな！」

すれ違いざまに剣と剣がぶつかりあう。リジーにはああいうことを言ったが、剣の重量が違いすぎる。レノンはずれを思わずよろけた。不利だ。しかもメイアは即座に方向転換し、後ろからレノンを追ってくるかたちになった。振り返りながら相手をしていると手綱捌きがおざなりになる。

「あんたこそ、帰りなさいよ！」

メイアは手加減なしに打ち込んで来る。さすがに頭や首は避けているが、場合によると腕一本くらいは持って行かれそうだ。少し怪我をしている肩が痛む。

「どうして、とめる！あの人は僕とリジーのっ！」

レノンはメイアの馬を狙った。しかしすんでのところで馬を離されたので、刃先はかするかかすらないかだった。

「だからよっ！！あんただけは分かってあげなさい！」

「嫌だ！」

何度目かになる打ち合い。勢いよく短刀が弾かれる。レノンは反動で転げ落ちそうになったが、手綱をしっかりと握っていたのでなんとか踏みとどまれた。

「この、大馬鹿野郎！」

怒声とともにメイアの馬が密着する。真つすぐに進むことができなくなり、徐々にジョセフィーヌは道をそれる。

「…あたしだってねえ、いったいどうしたらいいかわかんないのよ！…ったく、揃いも揃って引っ掻き回して…。」

メイアはだらりと剣を下げ、下を向いた。

彼女だって関係者だ。いや、家族だから。

「メイア姉さん、頼む。行かせて？」

昔の呼び名に、彼女はぴくりとする。気持ち分かるなんて言わ

ない。でも推測くらいはできる。

「『家族』ってよくわからないけど、多分行かないといけないから。」

僕は卑怯だ。真実を知って迷っているメイアに『家族』という言葉を使っただけから。

メイアは無言で離れていく。二人は距離を保って走った。

「待ちなさいって、ば！」

先行しているリズは荒っぽく馬を走らせる。ハクが恐々と様子を見ると、青の王子が振り返ったところだった。

「…先に行ってくれ。すぐに追いつく。」

御者に投げかけると、カインは手綱を離した。

「ーあなたは、なんでこのこ出ていくのよ！」

リズは声を張り上げる。荷馬車の材質がみてとれる距離だ。声は届いているはず。

「悪なら悪らしく、最後にいい人ぶってるんじゃないわよ！素知らぬ顔して無関係装ってるんじゃないわよ！！」

涙混じりの罵声にも、偽物の罪人は振り返らない。御者が何事かと見ようとしたのを青の王子がとめた。

「おっと、安全運転をしてくれないと。」

「しかし…奴らは何者なのです！」

なぜこんなやつを追ってくる。不安に駆られた御者は王子をにらみつけた。

「…多分王女を恨む国民だ。殺したいほど憎く、自分が手を下したかったのだろう。心配ない。組織だった反抗ではないから。…だが邪魔されては困るな。」

王子は肩にかけていた弓を取る。立派なつくりのそれに矢をつがえ、王子は白馬の速度を徐々に落とした。

「……あんたには、言っただけのこと山ほどあるのよ！」

すでに馬車とは馬二つ分しか離れていない。心なしかリランの肩が震えている。御者が振り返った。

顔を見られる。ハクはリズムに体重をかけ無理矢理うつむかせた。

「きゃっ…」

このとき、ちょうど平行線にいた王子はぴんと矢を構えた。充分にしなせたとうえで、目を細める。

「……失せろ。」

態勢を取り戻したりズに謝る途中、ハクは殺気に気づいた。

ひゅんと放たれる矢。

「…リズム、避けて!」

「え?」

ハクと同じ方向を見た彼女は、次の瞬間手綱を捌くことができなかった。

馬は想定外の事態に我を忘れる。

少女の手から手綱が離れた。少女につかまっていた修道女はバランスを崩す。二人は地面に落ちていく。馬は乗り手を失ったまま走る。

「…リジー! ハクさん!」

レノンの目の前で、青の王子と馬車はぐんぐんと距離をはなしていった。

覚悟

たたきつけられた地面は思ったより固かった。一部の感覚が麻痺している。それは一時的なものだった。痛い。肩から着地したみたい。動かせるから……ただの打ち身ね。骨は折れてなさそう。いきなり振り落とされてびっくりした。……そう、青の王子がこちらに矢を放って……ハクはがばりと起き上がる。

「リズ！」

彼女はぴくりとも動かなかった。もしかして、矢が……？

「リジー、大丈夫か！？」

追いついてきたレノンが馬から飛び降り、姉に駆け寄る。リズは揺すられるままだ。

「リジー！」

「……っ、ああ、……！！！」

ぷるぷると少女は震え、奇声を発すると跳ね起きた。心なしか鼻が赤い。

「あぁんの、馬鹿王子！」

首をぶんぶんとふると、彼女は鬼の形相で髪の毛の土を払い落とす。

「……リジー、さん？」

努力にあてられ、レノンはこれしか言えない。

「痛い、鼻から落ちた！」

メイアも交え全員で彼女を凝視しても、目立った外傷はない。

「……カインは、馬に当てたわね。」

静かな声に、リズは首肯する。

「そうよ！いきなり暴れだしたから思わず手綱放して、振り落とされて……。」

安堵したレノンは現実を見る。

「……待って、馬は……！」

我を忘れた馬は、すでにその姿を消していた。……王子の狙いはこ

れか。二頭の馬でもぎりぎりなのに。3人乗りは無理だ。これじゃあ間に合わない。どうしたら――。」

「…しかたないわね。」

言うがはやいかメイアは馬から下りた。

「ハクさん、私と一緒に町まで歩いて、そこから馬車に乗りましょう。あんたたちは、先に馬に乗っていきなさい。どっちかあたしの馬を使えばいいわ。」

一変した態度に、リナジーンはうろたえる。

「そんな、どうして――！」

「家族だから。」

メイアは剣をつきつけると、剣呑な目とともに黙らせる。空気の硬直を認めると、すぐにそれを収めた。

「家族だから。あなたたちと血はつながってないし、特にあんたとは関わりなんてほとんどなかったけど、あんたたちに悲しい思いはしてほしくないから。」

背を向けて自分の馬の首元、口のあたりをなでると、メイアはふいにそれをとめた。

「…だから、行きなさい。」

双子は顔を見合わせうなずくと、それぞれ馬に乗った。

「…ハクさん、先に行きます。」

二人は手綱をつかむと、ハクとメイアの前から走り去った。

「…こうして二人で話すのは初めてですね。」

ハクの小さな声に、メイアはにっこりと笑う。

「ええ。お騒がせ双子もいったことだし、話に付き合ってもらえるとうれしいわ。」

「――この解毒は、鎮静剤を3日連続して服用することで完了するわ。処刑が終わったあとを目安にして飲んで。時間と用法を守らないと効かないから注意してね。」

計画を立てた後で、彼女は落ち着いていた。

「…あの二人に会わなくてもよかったんですか。」

時刻はすでに夜。リランの家から行けないこともないが、教会に着く頃には訪問は失礼になる時間。それでも、チャンスはもう。

「会いたくないっていったら嘘になる。けれど、会ったら未練が残るし、もともと二人の記憶にはなかった存在だから。…会わないほうがいいのよ。」

リランはふっと顔を伏せた。

「手紙を書いたのだけど、ちゃんとするのなら、書かないほうがよかったのかもしれない。結局私は、何らかの形であのこたちに関わりたかったのかもね。」

ついと押し出された手紙に、私は手を伸ばすことができなかった。

「…あの二人に、渡してちょうだい。」

私は、黙って受け取った。

「…カインとリランさんを説得して、夜中出発で教会に行ったわ。

結局双子には会わなかったけどね。たぶんリランさんは、悪ノ娘に声をかけられて、振り返りたかったのだと思うわ。」

地面に二人分の足跡がつく。馬の姿は見えない。

「メイアさん、ひとつ、聞きたいことがあります。」

「ん？なに？」

ハクはメイアの目を見た。

「…どうしてあんなにあっさりと馬を貸したのですか？馬の口元に触れたとき、なにかを食べさせてやっているのを見ました。あれはなんですか。」

メイアは口元をゆがませる。

「…見られてたかあ。」

次の瞬間メイアは殺気を放った。

「…家族だからよ。あのこはあたしの弟も同然。エゴでもいいわ。処刑を止めさせたりなんかしない。」

「…レノン？」

レノンが乗っていたメイアの馬は、明らかにペースを落とし始めた。乗り手はそれに戸惑っている。様子がおかしい。レノンは馬を止めた。

「…どうしたの？馬の調子が悪い？」

街中で、二人は馬を見る。弱り方がひどい。そういえば、メイアは馬になにかをしていた。

微量の、毒薬か。

「…くそっ！だまされた！！」

自分の信じていた相手に、謀られた。レノンはその事実にも、しばらく立ち上がることができなかった。

「考えても見て。処刑をとめるには少なくとも何人かを相手にしないではいけないわ。中央に行くにつれて革命軍の見張りも厳しくなる。弟はともかく、姉のほうははっきりいって足手まとい。戦えないわ。運よく護送途中を襲って連れ出しても、そのあとは？さすがにもう逃げ場所なんてないでしょう。全員ギロチンよ。それこそ何の意味もない。」

吐き捨てるメイアに、ハクは声を張り上げる。

「おかしいわ！レノンくんが言っていたけど、あなたは曲がったことが大嫌いだと！こんなふうに騙すような人じゃないでしょう？それなら最初から、…そう。革命で出た誰かの遺体を王女の死体に見立てればよかったじゃない！」

「あんたに何がわかるの！」

強い力で、メイアは修道女の腕をつかんだ。

「…あのこはね、あたしのことを買いかぶりすぎ。…そうね。最初からそうしておけばよかったわね。でももうどうにもならないから。…弟みたいに育ったあののを助けたい。けど悪事を働いたことは許せない。曲がったことは許したくない。どこかで生きていて

ほしい。……全部本当の気持ちだから、手に負えないわ。」

興味を失ったように腕を離すと、剣を抜き、ぐさりと地面に刺す。
「…そう、正しいことなんてないのよ。あたしはあたしの信念に従って行動する。あいつはあいつの信念のもとに。意地のぶつかりあいね。……どうすれば、いいの。これで、よかったの？」

座り込むメイアに、ハクは後ろからぎゅっと包んだ。

「…あなたは、間違っていないわ。」

二人は、しばらくの間そうしていた。

正しいことなんてない。正解なんてない。誰が間違っているかなんていえないし誰にもわからない。

誰かにとって誰かは悪で、誰か自身にとってはそれが正義であり信念だ。

だから、間違っていることなんてない。

そう思わないと、悲しいじゃない。

ハクは強い女性を抱きしめ続けていた。

覚悟（後書き）

3月4日…誤字訂正しました

処刑(1)

「リジー、ひとまず先に行って！走って追いかける！」

「無茶言わないで！追いつけるわけじゃないでしょう！」

リナジーンは一喝するときよろきよるとまわりをみやる。この弟は焦るとたまに無理なことを口走る。それだけ重みを抱えて生きてきたのだろうか。

「ーっ！レノン、走って！」

リナジーンは運よく通りがかった荷運びの若者に突っ込んでいき、若者を飛びのかせると括りつけられていた荷物を全て払い落とした。

「なっ、君ねえー！」

「借りるわよ！」

有無を言わず宣言すると、リナジーンは被害者を蹴り飛ばす勢いで走らせる。

「…すみません、お借ります。たぶんきつと、後で返しますから。」

レノンは飛び乗ると、やはり返事を聞きもせずに走り去った。

あわれ二人組の強盗にあった若者のまわりには、散らばった荷物があふれている。

「…この、泥棒ー！！」

ーここからは、お節焼きの書き散らしたものだから、読み飛ばしてもらってかまわない。どうか、生きていく上で後悔だけはないで。考えて考えて、踏み出すときは迷いなく踏み出して。…なんて、あなたたちにはかつこよく言えないわね。

「……大きな声が聞こえてきたけど、金髪の二人組にでもやられた

の？」

「あっ、メイアさん！そんなすよ！とんでもねえガキで。」

「王女の処刑がどうしても見たいんですって。後でお詫びするから、見逃してあげて。…それと、馬車って出してもらえるかしら。人も運んでくれるのよね？」

運送業の若者の顔は引き攣る。相手は英雄だ。しかしこちらも予定が。

「今すぐ。私も処刑を見なくちゃいけないから。どうせ納期が少し遅れても、このめでたい日、大丈夫よ。」

若者は折れた。

「きつとあなたたちは私のことを許さないでしょうね。勝手になにをやってるんだと。関係者のかたたちも、けじめをつけさせないつもりかと怒っているはず。ただ、私は後悔なんてしていない。死ぬまでの短い間だけど、全部責任を持って批判を受ける。」

「ハクさん、悪いのは誰なのかしらね。」

暴走特急の馬車で、メイアは舌を嚙まないようにつぶやく。

「……多分、一生わからないと思います。」

頭をぶつけて涙目になりながらハクは答える。

「…それもそうね。あ、もっとスピード出して！」

「ー私はレノンくんと同じことをしている。前にも言ったとおり、これは一方的でおしつけの親切心。悲しませるとわかっていても自己満足。わかっているけど、あえてやります。あなたがたに拒む権利はありません。」

「――本当に、いいんだな。」

「何回聞くんです？」

用を足すとの名目で馬車から離れた二人は、小さく言葉を交わす。
「私はあなたを許さない。あなたも私を許さなくていい。」

「エゴイストめ。」

「お互い様よ。」

舌戦を終えると、カインは手を差し出した。見えてはいるが、包帯を巻いて目を痛めている名目のため、このようにエスコートしなければならぬ。

「では行こうか、最後のステージへ。」

すでに広場は満杯だ。

――私は、世の中因果応報だと思います。自分がしてきたことの報いは、いつか受ける。レノン君、これはあなたがしようとしたことです。リナジーンさん、本来ならあなたが辿るはずだった未来です。

広場に近づいてくるにつれて、馬では進みにくくなってきた。今はなんとかなっているが、前の処刑より人が多い。

「リジー、おريよう！そのほうがはいい！」

二人は馬から降りると、人混みのなかを掻き分け進んでいった。

処刑台に、ベールを被った王女と、青い王子が立った。観衆は姿をみたたん、一斉に静まり返る。

「黄の国の民よ！悪ノ娘は捕らえられた！神は我々を見捨てず、公正な裁きを下した。あの処刑事故は、おそらく神の悪戯だろう。悪に儚い希望を与えられたただだったのだ！」

観衆は王子の演説に熱狂する。雄叫びをあげ指笛を吹き、野次を飛ばす。

「――さすが、王子の名前は伊達じゃないわね。恐るべきカリスマ。」

少々遅れて到着したメイアとハクは、群集のなかでも動きがある部分を見る。

「あっ、あそこ！」

メイアはハクの示す方向に目標を認め、彼女を引っ張って突っ込んでいった。

「我々はこの革命を名実ともに終わらせるため、王女を処刑しなければならぬ！ただし、断頭台は先のような事故があつてはならないので、処刑人が執行する斬首刑に処す！」

王女が微動だにしないなか、群集は熱狂的に叫んでいた。

本当は、分かっていた。どうにもできないなんて。ただ、信じていたかった。どうにかできるって。

「レノン、こっち！」

誰かとぶつかる度に痛みをしかめていたら、リジーに手をひかれる羽目になってしまった。そういえば、短い間だったけど自分はある人と話すことができた。リジーはどうだったんだろうか。

「…できるだけ近づくの！」

なんでって、辛いときいつも思った。どうして私たちを捨てたのって。答えて。教えてよ。まだ聞きたいことがいっぱいある。

なかなか近づけない双子の前では、青の王子が再度王女に布をかぶせているところだった。

処刑（2）

青の王子は気づいていた。渦中の双子が処刑を見に来ている。間に合うわけがないのにこちらへと向かっている。

「…最後だ。」

カインはリランの包帯を巻き直し、ベールを被せた。久しぶりに入った光にリランは目を細める。動く黄色がかすかに目についた。

――ずっと夢を見ていました。家族みんなで暮らしたかった。誰にも邪魔されることなく、ささやかな幸せに包まれながら生きていたかった。もうできそうもないので、私は次善の策を実行しました。

邪魔だ、どけよ。なんでこんなに、人がいるのよ！二人は押し潰されそうになり人の壁に阻まれる。もうこれ以上進めないと分かっってしまった。あきらめきれず、二人は処刑台に視線を向ける。ベールの向こうで、目が合った気がした。

…本当に、最後に、いいものを見せてくれた。ちよっとだけ、王子に感謝してもいいかしら。

目だけが現れているリラン。本当に微かに、近づいてくる子供たちが見える。

…うん、悪くない。こんなふうに見取ってくれるのも。ちよっと普通じゃないやりかただけだね。

冷たい刃先を感じながら、リランはついと微笑んだ。リナジーン。リジー。たくさん話したかったね。女王様（義理の母）にはかわいがられましたか？

レノン。気を張りすぎないで。もっと楽に。

観衆の声が一段と大きくなる。教会の鐘が鳴る。

ひとつ。

あのときも、こんな風に鐘が鳴っていた。
ふたつ。

強い風が吹いてベールが舞い上がり、双子の強張った顔が見える。
みつ。

執行人の鎌が振りおろされる。

そんな顔しないで。

私は、笑う。

鐘の余韻が微かに聞こえる。

「さあ、ひざまずきなさい！」

くぐもった声。届いたのだろうか。二人の顔が見えない。

あおいそら。近くて、遠くて。

私は

「おかあさん!!」

二人分の叫びは、群衆の歓喜の声に掻き消された。王女の処刑は、
成功した。

「…嘘よ、こんなことって…。」

リナジーンはぺたりと座り込む。涙が一粒こぼれ落ちる。

「…なんで、笑うんだよー！」

興奮に酔いしれる観衆と、全ては終わったと考えわらいあう国民。
すでに動く人の波もある。

「なんで、僕らが生きて、」

「どうして、あなたが死んでー！」

事実を受け止めきれない双子に、メイアとハクが後ろから近づく。

「…それでも。」

メイアは二人まとめて抱き寄せる。

「生きるしかないのよ。」

低い声は、双子にとって酷か糧か。

観衆たちは、めいめいが自分たちの幸せを噛み締めるのに精一杯

だったので、一行は特別なにもあやしまれなかった。ハクは二人をあやしながら、生きる意味を考えていた。

「ーできることなら一度でいいから呼んでほしかった。私もあなたたちを呼びたかった。私のわがママを、どうか許してください。」

あなたたち双子の母
リラン・モルデント

処刑の前に、あなたを母と呼びました。聞こえていましたか？もう手紙でしかあなたに会えないし、名前も呼んでくれないけど。僕らのこの出会いはなんだったんですか。

いつか、わかる 때가 来ますか？私が母になったらわかるでしょうか。何度も生きたくないと思って、その度にあなたのことを思い出します。

だって、私たちは生かされているのですから。

「あーっ！駄目じゃないレノン！馬に人参をあげるときにはちゃんと手を広げないと！」

「リジーこそなに馬の右から乗ろうとしてるんだよ！最近乗馬してないからって忘れるか普通！？」

「うっさいわね、自分がちよっと頭いいからって！」

「なにをー！？」

「って、きゃー！ブリオツシュ放置したままじゃない！3時のおやつ、焦げるわよ！」

「ええ！？ったく、なんでほっとくんだよ！？」

ばたばたと、双子はキッチンに向かってかけていく。慌ただしい様子に、ハクはくすりとしながらペンを進める。キッチンの処理は任せよう。

幾度かページをくって、修道女は大きく伸びをする。…ひとまず、こんなところかな。と、そこにいいにおいがしてきた。最近リズをつくる料理は格段にうまくなってる。

「ハクさーん、おやつですよ！部屋にこもらないで、でてきてください！」

「ハクー！今日のブリオッシュはうまく焼けたわよ！食べてみて！」
「偶然だろ！目、離してたんだから。」

「何よ、なんか文句あるの？」
このやりとりも、いつものことだ。ハクはペンをおき、書きかけの書物を閉じる。

「はいはい、今行くわ！」

声を張り上げ、ハクはドアを開けた。

処刑（2）（後書き）

あとがき。

こんにちは。奏手です。やっとこさ区切りができました。原曲が好
きで思いついて書いたのですが、まさかの六万字ごえ……。でも楽し
んでかけました。

タグに、悪ノハッピーエンドとついていきます。双子は結果的に生き
延びましたが、これがハッピーエンドなのかはわかりません。タグ
詐欺になるのかもしれませんが。

原曲を聞き、その流れで派生動画を見て、どうにか全部つなげてみ
ようと思いつくったのがこの作品です。

初めての二（n）次創作でしたが、手抜き・妥協せず書いたつも
りです。読んでくださったかた、ありがとうございました。

まだ書きたりないことがあるので、もう少しこの作品は続きます。

以下、原作様

原曲…悪ノ娘、悪ノ召使、白ノ娘、リグレットメッセージ、Re
birth day

派生曲・動画…緑ノ娘、復讐ノ娘、悪娘ト召使ノ父？、悪ノハッピ
ーエンド

1-1 (前書き)

第二部です。双子の両親の話になります。第一部からの流れですが、時系列的には第二部↓第一部です。若干の時系列で読む場合、若干のネタバレがあります。ご了承ください。

陽のあたる窓辺に写真立てが飾られている。一組の夫婦と双子の赤ん坊が笑顔でおさまっている写真だ。窓は換気のために開けられていて、ほどよい風が室内に吹き込む。何度目かの強い風が吹いたあと、パタリと写真立てが倒れた。スタンドがついている裏蓋は不自然に浮き上がっている。

部屋にいた人間は写真立てをとり、不自然な裏蓋を外した。中から写真がでてくる前に、折り畳まれた紙が現れた。

——十四年前、首都の教会。

「おーい、生まれたぞ！母子ともに健康だ！」

「本当か！？王様の忠臣、モルデント家の後継ぎか。…で、男の子か？女の子か？」

「それが……」

ある冬、教会の鐘が三つ鳴ったときに、男女の双子が生まれた。

「…リラン、正氣かい？いくら僕たちが婚約しているといえ、君が未婚の母にならなくてもいいんだぞ？しかも双子。…別に無理する必要は。」

「何言ってるのよロン。もう決めたの。」

そういって、私と、幼なじみで許婚のロン、双子の赤ちゃんが、家族写真におさまりました。当時私が15、ロンが18。不測の事態で婚姻前に子供を授かったものの、私たちはそれなりに幸せでした。

写真の裏側に、増えた家族の名前を。女の子はリナジーン。男の

子はレノン。

「：リラン、迷惑かけるな。」

部屋に入ってきたロンは、申し訳なさそうに言います。

「なに言ってるの。平気よ。」

ロンは笑ったけれど、辛そうな感情が目には浮かんでいました。彼は私に負い目を感じている。だから私は、そんなときいつも言ったのです。

「家族が増えて、本当に楽しいの。」

心からの笑顔が、夫に届くと信じて。

——私の妻、リランは幼いときに家族をなくしました。彼女の親戚もすでになく、幼なじみ兼許婚だった私の家で暮らすことになりました。家柄もよく博識だった彼女は、後ろ盾さえあれば王族お抱えの家庭教師にでもなれたでしょう。それがいきなり母として家に籠らなければならない。満足に社交界にも出してやれない。双子で世話も大変だった。でもリランは泣き言一つ言わず、笑顔で子供達と接していた。だから私は、リランが本心で笑っていると分かってから、一緒になって笑うことにしたのです。

——そうして一年が過ぎました。リナジーンはよくレノンにちょっかいをかけました。泣き叫ぶレノンと、ぽかぽかと叩くリナジーン。昼間は引き離すのに苦労しました。夜泣きはリナジーンのほうがひどかったな。親子そろってなかなか眠れませんでした。よく抱っこしましたよ。

——目のしたにクマをつくりながら暮らしていたときだった。辺境の家に、王族直轄の親衛隊がやってきた。

「ロナルド・モルデント、ならびにリラン・モルデントだな！」
仰々しく踏み込んできた隊員達は鉄の表情をしていた。

「我が国の信仰する神の教えに貴様らは背いた。よってその罪の証である双子、もらいうける！」

指揮官は王家の紋入りの証書を乱暴に突き付けると、寝室へ向かった。そこには、双子と世話をしている妻がいるはずだった。

「…あなたたち、なにをするの！」

リランの叫びにも躊躇することなく、隊員は双子を連れ出した。

「…おまえたちも知っているだろう？婚姻前の交わりは固く禁じられている。しかも生まれてきたのが双子！これぞ罪の証！」

確かに教会に結婚の届けを出したのは最近だ。それについては反論できない。

「さつきから聞いていればなんなんですか？生まれてきた双子に罪はないわ！」

「それに、私たちはこの子達と暮らすことについて、教会からお墨付きを得ている！特例として証書もある！」

私は特例の証書を戸棚から出して見せた。指揮官はそれを乱暴に掴んで読みはじめると、前触れなく破り捨てた。

「…なにを！」

部屋に紙片が舞う。吟味されないまま否定される。

「…こんなものはどうだっていい。この双子は我々が預かる。」
証書だったものを踏み付け、彼らは去ろうとする。

「やめろ！二人をどうする気だ！」

私は隊員の一人にしがみついた。

「…教会が、双子の一生をかけて汚れを落とす。子供らには関係者専用の区域で生涯暮らしてもらう。」

そう冷たく言い放たれ、私は屈強な男に突き飛ばされた。赤ん坊の泣き声が激しくなる。

「二人を放しなさい！」

出ていこうとする隊員達を、小さな体が塞いだ。

「…お嬢さん、悪いことは言わない。どきなさい。」

一同のなかで年若い隊員が警告する。しかしそんなもので怯むリランではない。

「…あなたたちの言っていることは嘘だわ。教会が汚れを落とす？何を今更。本当だとしても教会のかたがくるのが筋でしょうに！」
ずい不久前に出たのは指揮官だった。

「…可愛いげのない女だ。だがさすが、王族の家庭教師候補に挙がるだけのことはある。」

怪訝な顔をする私たちに、指揮官は告げた。

「二年前、世継ぎが誕生なされたことは知っているな？」

知っている。ちょうど二人の出産時期と近かったはずだ。国中が喜びに包まれていた。

「確か、王女のエリザベス様か…。」

金髪緑眼の国王と、金髪碧眼の王妃の子だからきつと美人になるとー。

「そう。そのエリザベス様が先日崩御された。」

さらりと指揮官は極秘事項を口にした。

「実は公にされていないが、死産だったお世継ぎもいたのだ。レオナルド様。まだお小さかったのに。お子を亡くされた心中、さぞ辛かろう。王妃様は悲しみにふけりご公務に支障をきたしている。」

「…返して！この子たちはなんの関係もない！身代わりにするなんて許さないわ！！」

私はやつと事態を理解した。

「…連れていけ。」

リランが乱暴に押し退けられる。私は彼女の体を受け止めるのに精一杯だった。

「やめろ…。連れていかないでくれ！」

「いや…返して！そのこたちを連れていかないで…！」
扉がバタンと閉められる。

「リジー！レノン！！」

彼女の悲鳴は今でも耳にこびりついて離れない。
二人が二歳のときだった。

1-1 (後書き)

3月18日..誤字訂正

ーリランはあの事件から寝込んでいた。身体はなんともないが、どうしても起き上がれない。私は辺境警備の仕事の合間を縫って何度様子を見に帰った。

「ロソ」

「リラン、身体は大丈夫なのか？」

今日、彼女はなんとか起き上がっていた。

「…負担がかかるでしょう？ 私は大丈夫。あなたは自分の仕事を考えて。」

私はいたたまれなくなった。

「そんな…。長い間おまえを家に一人置いておけるわけないだろう！」

二人の子供が連れ去られ、寒々としているこの家に。たった一人は辛すぎる。

「なにを言ってるの。私はさみしがりの子供じゃないわ。」

頼りない力で、私はとんと突き放された。

「私は大丈夫だから。」

そう言つて、彼女はいつものように笑つた。今にも泣きそうな顔だつた。∴私は仕事に戻つた。子供時代を一瞬で終わらせ、大人のように生きてきた彼女にかける言葉が分からなかつた。

幼いときに親をなくし、親しいといえど他人の家で暮らす。十五で子供を持ち、将来が閉ざされる。十七でその子供を奪われる。

こんな人生を過ごした妻にわかったような口を利くなど、夫、家族、友達。どの肩書きでもできない。

ーけっこんなダメージでした。ご近所のかたとは良好な関係を築いていたので、みなさん私たちに同情してくださり、家事の手伝

いもしてくださりました。一ヶ月くらいして、私はなんとか動き回れるようになり、対策を考えました。二人を追って首都に出ることです。モルデントの家に厄介になっていたときは首都暮らしでしたが、独立の際私たちは辺境へ移りました。年齢と、物価の問題で。幸いロンの財産を崩せば、首都で暮らすだけのお金がありました。職は、ロンが城下街の警備隊、私が王室付き教師。書類を送って、結果を待っていたときのことです。

「…僕はできたか分からない。君はどうだった？」

城下を守る人員は選りすぐり。家柄よりも実力重視です。ロンは自信なさげでした。

「私は自信あるの。座学は満点がとれたと思う。」

理想は二人が採用されること。でも片方だけでも構わない。引越せばいいだけの話。通常勤務地近辺に構える家。一度首都に行く口実をつくれればこっちのものです。

食後の紅茶を飲んでいたときでした。丁寧なノックの音がします。郵便屋さんかもしれない。私はいそいそとドアを開けました。

「…っ！」

私は、思わず息を吞みました。

忘れるものか。

「…失礼する。」

立っていたのは、いつかの年若い親衛隊員でした。歳はロンより少し上でしょうか。

「貴様、何しにきた！」

ロンはティーカップを乱暴に置き、彼のほうに歩み寄ります。

「ライアン・ロートだ。お二方に通知書を持ってきた。」

そう名乗った人物は、肩掛け鞆から二通の封筒を取りだしました。ひとまず受け取り、私は王家からの封筒をびりりと破りました。

中からは紙一枚。

不採用の知らせが無味乾燥な字体で綴られていました。

「……そんな。」

一方のロンは、わなわなと唇を震わせています。

「…説明してくれ。」

ロンは分厚い封筒でした。書かれている配属先は、王宮。職務は王宮警備。

「…なぜ！この人事はなんだ！」

ロンの問いに、一人が口を開きました。

「…親衛隊員が一人大臣に昇格してね、王宮警備に欠員が出たからこうなった。リラン殿は残念ながらご希望に添えない形となった。」

「そんな建前どうでもいい！」

ーロンの声に、彼はどっしりと構えた。と思ったら、にやりと笑った。

「……きみらの魂胆はわかるんだよ。首都で職を見つけて双子を追おう、あわよくば取り返そうって腹だろう？そんなのは困る。特に母親。かなり優秀だが、王室付き教師などもつてのほか。絶対に双子と会わせるわけにはいかない。不採用にしてしまおう。これがその結果だ。」

やはりあちらの思惑が動いた。旧姓で書類を送ったのも無意味だったか。

「……というのがお偉いさんの本音。」

いきなりトーンを変えると、彼は大仰にため息をついた。

私たちは面食らう。

「だからあんたたちは絶対首都に行けない。しかも勅命で移動禁止令が出るから、あんたら下手に出てくると城下の警備隊員に捕まるぞ。ほれ。」

私たちはぼいと投げ出されたビラを見ました。警備隊に配られる手配書の類でした。

「……くそっ！ふざけやがって！」

ロンはぐしゃりと握り潰します。

「そこでだ。俺からの提案がある。」

彼は私とロンの肩に手をやりました。

「俺、ライアン・ロートは近く大臣に昇格する。最高権力者は王だ。でも俺が担当する親衛隊、城下警備隊とか軍がらみの人事は丸投げ。あんた一人くらいだったら、俺の推薦でなんとかしてやれる。モルデントの家柄と、あんたらの表に出せない事情。俺の推薦。全部合わせてプライゼロの評価ってとこか。」

指折り数えるルートに私は不信感しかない。

「：一体どういう風のふきまわし？ あなたは私たちの子供を奪ったくせに。」

彼は肩に置いていた両手を放した。

「そんないい条件信じられない。あなたみたいな若い人が大臣なんてー」

「口封じと後始末だ。」

低い声に、私は黙るしかなかった。

「双子を連れてったときに言っただろう。王妃は心を病んだ。未だに王女は生きていると言い張っている。国王とは毎日けんかだ。王は疲れからか短気・強権的になって、逆らうものは皆殺し。上の首がころころ変わって次は俺の番ってわけさ。」

「：そう。それはご愁傷様。あの誘拐は極秘任務かしら。だったらあなたは秘密を守らせるために鎖に繋がれてるのね。」

「言ってしまうばそうだな。あのときの残りは王に意見して殺された。残る関係者は俺ってところだ。双子の出自は暗黙の了解になっているが、真相を知るものとして俺に仕事しろってことなんだろう。」

私はどこか人事のような彼に、冷めた紅茶をかけました。

…妻はいつも言葉で戦った。だから、ライアンに紅茶をかけるなんて思ってもみなかった。

「…それで？今度はロンを人質にすると？それとも私達を殺しに来た？吐き気がする。あんたたちは一体どこまで滅茶苦茶にしたら気が済むの！！」

ライアンはゆっくりと顔を袖で拭った。

「…罪滅ぼし。」

一瞬動きをとめた瞬間を見逃さず、私はリランをおさえる。

「…俺にも娘がいた。それで、病弱な女房もいた。あの仕事は昇進と莫大な報酬と引き換えだった。断れば家族共々命を落とすことになるとも。」

私を振りほどき、リランは詰め寄る。

「だからって帳消しになるとでも思ってるの？あんたのやってることとは偽善だわ！」

「リラン、やめろ！この人はよかれと思って…！」

正直、私まで人質にとられるとは思わない。殺すならもうとつくに殺されている。この人に嘘はないだろう。ライアンは糾弾されても落ち着いたまま。

「…あんたらに何言われてもいい。俺の力じゃ旦那を連れてくだけで精一杯だ。こんなことしかできないし、俺が助けるから恨んでくれるな、なんて言えねえしよ。」

リランの警戒心が薄れていく。

「…俺が言うのもなんだが、またとない機会だと思うぞ。あんたを連れてけないのは残念だが、旦那のほうはうまくいけば子供に会えるかもしれない。」

私は希望を感じた。あの子達に会えるかもしれない。それだけでこんなにも嬉しかった。少し遅れて気づく。リランはどうだ、と。

彼女は会えない。願いを叶えると、私は妻を裏切る。

「……これでチャラだなんて思わないで。仮に嘘が一つでもあれば、末代まで呪ってやる。」

リランはとんとライアンを押すと私のほうを見た。

「ロン、行つてきなさいよ。いい条件だわ。」

「な、僕一人が行けるわけ……」

「王宮勤めなら高給でしょう？ がつつり稼いで本を送って。他にも欲しいものがいっぱいあるの。だから行つてよ。」

リランは本好きだ。科学や医術の類もかじっている。が。

「ロートさん、確約書出してもらえませんか？ あと具体的なこともお話してくださいね。」

待て。勝手に話を進めるな。ライアンもそう感じたのか何も言わない。私はリランを奥に引っ張った。

「……どういうつもりだ。僕はまだなにもー」

「一生会えないより、二人ともできないよりはいいでしょう？ 計算したらわかるじゃない。」

リランは顔を伏せたままだった。

「君はあきらめたのか！？ 会いたくないのか！？」

リランは私に身体を預けてきた。ちょうど彼女の顔が胸にあたる。

「……………ばか。」

ついと涙が流れ落ち、服についた。

「会いたいに決まってるじゃない。」

……何を言ってしまったのだろう。そのはずだ。一番泣きたいのは彼女だ。

僕は彼女に手をまわした。

「……手紙を、書いて。できたら二人の様子が知りたい。……噂話程度で、いいから。……音沙汰くらいは、欲しがってもいいわよね？」

「ああ。週一で送る。リランが欲しいものは本でもなんでも都合つけて送るから。」

安心させるように、僕は彼女を抱きしめる。リランは腕のなかでくすりと笑った。

「あれは冗談よ。本なんて高いんだから、無理しなくていいわ。」

「…僕はそこまで甲斐性なしじゃないぞ。」

知ってる。じゃあ期待しちゃうわよ。後悔しないことね。

小さく彼女は言った。

「…確実に首都に出ないと。私も頑張るから。」

すうっと離れたリランは、赤くなった目を力強くした。

私はライアンから説明を受け、数日後首都へ発った。何回か二人を見ることができ、息子のほうとは存分に触れ合えることができた。どうして妻は我慢ばかりの人生なんだろう。片隅で思い、私は息子を抱き上げた。

ロンは本当に週一で手紙を送ってきました。自分の暮らし、双子のこと。冗談半分で頼んだ本まで。私は毎週のそれを糧に生きました。会いたいという思いは消えなかったけど、これまでよりは遥かにましかったです。

息子が大きくなって。彼は娘付きの召使になっていた。そして、娘の。王女の評判は芳しくないものになっていった。

「――暗殺計画？」

城下街は日を追うごとにつれ殺気立っていった。そんなとき、私は物騒な噂を聞いたのだ。なんでも、青の王子が婚約を蹴ったとかで王女が乱心。大臣に原因の女を殺せとわめいていたという。内勤の前同僚からの情報だ。

「ああ、確かだ。本当に起きたらもう国は傾くぞ。頭回転が速いやつはちらほら辞めてる。」

私はそのとき城下の警備担当になっていた。もろに世論を受ける。双子の様子も入ってこなくなったので、リランと相談した結果仕事をやめ、自宅からほど近い街で働き口を見つけることにした。

「……革命は避けられないわね。矛先は王女に、リジーに向かうでしょう。」

時折首都に動向を探りに行ったロン。彼から聞いた限りで出した結論です。緑の国を攻め、疲弊した国民の怒りが爆発。革命軍なるものが結成され、その数をどんどん増やしている。

「……確かに王女は悪政を強いている。だが二代前の……正当な国王も王妃も、エリザベス様が死んでからまともな政治をしていない。リジーだけに責任をおしつけるのは筋違いだ。無能な王族は殺せと声高に叫んでるが、血脈はすでに絶えている！」

実は私たち、微かに期待したのです。あなたたちが戻ってくるかもしれないって。でも冷静に考えればないことですね。

二人には私たちのことが伝わっていない。それに逃げ場はない。亡命先もないでしょう。私たちがこっそりと二人を連れ出すには、事態は動きすぎました。

「……リラン。」

私は立ち上がり、上等なお茶を煎れました。

「……ええ。」

それでも、なにかせずにはいられなかったんでしょう。私はロンを止めることができませんでした。

後悔は、していません。……こんな愛情、重たいですか？十二年分のものをまとめたと思ってください。私達ができる最後のことです。

から。

双子の母 L・モルデント

私は革命軍に入り込んだ。元は王宮で働いたので弾かれるかと思
ったが、辞めた時期が早かったので受け入れられた。内心ほっとし
た。街の至るところには見張りもいる。手引きがあっても王女の脱
出は難しい。：リランなら突破口を開くのもかもしれない。私は置
いてきた妻を思った。

生きて帰れるとは思っていない。二人に場所を教え、私が時間を
稼いでいる間にリランのもとへと向かってもらおう。彼女がいるなら
後のことは任せられる。双子にしてやれるのはこのくらいだ。

ついに王宮へ踏み込むときがやってきた。みな木の棒や農具、武
器屋が配った剣を持っている。私も剣を握りしめ、先頭に立つ赤い
女剣士を見た。

傍らに長い弓を持つ青い髪の男がいる。男も助言しているがリー
ダーシップを発揮しているのは剣士のほうだ。彼女になにかあった
ほうが混乱の度合いは大きいはず。私は戦うふりをして先頭集団の
後を追った。

「ひとまず自分の命を大事にして！ 投降してきたら認める。抵抗し
てきたら戦うしかないわ。王女は多分この奥！ もうすぐよ！」

リーダーはそう呼び掛けながら剣を振るっていた。回廊は戦場と
なっており、一人抜けて先を行くのは無理だった。：先に二人と会
いたかったが仕方ない。第二のプランだ。私はそろそろと近づく。
この国の人間でない雇われ兵士の相手に忙しい彼女の背中。

間合いを測る。大股で四歩、走って三歩。静かに近づき、走り込
んで袈裟に斬ったらいい。その場に隙を作ったら全力で走り、二人
に会って簡単な方角を伝える。敵わなくても。時間稼ぎくらいでき
たら本望だ。

私が右手に剣を持ち、走り出したときだった。

なにかが、私に突き刺さる。ひとつ、ふたつ。私は走れなくなる。気配に気づいたリーダーが振り返り、驚きの表情を見せている。さんはつ、よんはつ。どれかが深く突き刺さり、私は剣を落とし、うつぶせに倒れた。

……結局、なにもできなかったか。革命軍にいたんだから、二人が捕まっているときに逃がせばよかったのか。……問答無用で殺される可能性も捨てきれなかったから、そんな悠長なことできなかったのだ。リランならやっただろうか。

許してくれ。なにもできなかった。王女を狙う革命軍が私を侮蔑の表情で追い越し、踏み越えていく。王女の隣に召使はリナジーンレノンレノンについているだろうか。君達を救う術を私は持たない。

足音を追いたい。身体が冷えていく立ち上がれない。震える指先をベストの内ポケットに入れ、私は紙束に触れた。

最後に飲んだあのお茶はうまかった。許せ。先に逝く。

もしも、生まれ変われるならば。

リラン、また一緒になろう。

リナジーン、レノン。誰にも邪魔されることなく、今度こそ、本当の、家族に……

知る必要のないことかもしれないが、書いておく。双子の出自について。

現在の黄の国元首エリザベス様は王族ではない。私たちの子だ。王族の命で無理矢理奪われ、秘密裏に育てていた。

だが、実を言うと私たちの実子でもない、それは、王女付きの召使も同様だ。

二人は私の兄の子供だ。モルデントのならいとして王に仕えていた。兄は国王に意見して粛正され、兄の嫁は二人を産んだ後に死んだ。残された私たちが引き取り、短い間ながら育てたというわけだ。事実無根の噂も流れたので辺境に暮らしモルデントの家を売り払って生活した。

王女が崩御した時点できみらの運命が決まったと言えるかもしれない。だったら記憶にない私たちが関わったことなんて意味がないかもしれない。

ただ、覚えておいてほしい。私たちは二人の幸せを願っている。血は繋がっていないが名前をつけ、本当の家族と思っている。私は二人の父親でよかった。心から思う。

R・モルデント

これは私の遺言がわりに渡すつもりで書いた。万が一第三者が見てしまった場合。なにもない。

あつた事実を知ってほしい。それだけだ。

できれば王女エリザベスへの認識を改めてもらえればうれしい。

戦没者の墓地に、黒い服を着た若者二人が足を踏み入れた。外見がよく似た二人は簡素な墓石の前で手を合わせる。続いて、王女の墓も。冷たい風が吹いて二人は目を閉じる。

二人は受けとった手紙を墓地で広げはじめた。

1-4 (後書き)

第二部終了です。ありがとうございました。
原案原作…悪ノ娘ト召使ノ父

3-1 (前書き)

第三部です。時系列は第一部のあとの話です。そのため第一部、場合によっては第二部のねたばれを含みます。

年が明けた。王女の処刑から何日も経った。代わりに死んだあの人はもういない。大切な人たちはみんななくなってしまった。

……海に近い教会、暗い懺悔室。手を組んで尽きることのない想いを双子は吐き出す。

「――レノン、リズ。朝ご飯にしましょう。」

僕たちは日課を終えると、呼びにきた修道女に答え食卓についた。

かちやかちやと食器を動かす音が出る。静かな食事風景。最初の頃は死んだような、文字通りで悲しみに暮れて味なんてわかんなかった。最近は大丈夫。時々笑えるようになった。

ふざけてるときはあんなことがあったのを忘れていられる。そのあとと思う。私は冷たい人間なのかな。忘れてしまう、軽いのかな。

泣いても笑っても生かしてくれた。生きるしかない。だから少しでも『普通』に近づくように、私たちは生きてる。落ち込んだらそう考えて自分を納得させる。

「……じゃあレノン君はいつものように教会のことをお願いね。リズは私と買い出し。それとお布施をもらいにいきましょう。」

ハクの言葉に、修道服姿のリジーが頷く。今日の行き先は林の中の村らしい。レノンはその村人に顔が割れているのであまり外出はできない。炊事洗濯が女性二人よりできるので効率的な分業といえば聞こえはいいが。

「じゃ、行ってくるわ！よろしくね！」

二人を見送り、レノンは仕事に取り掛かった。掃除、自分の分の洗濯。そして：馬の世話。人参片手にレノンは屋外へと出た。

あのときの馬が二頭、教会の外に繋がれている。餌は満足にやれないが、緊急時に貸し出すという名目で野菜の切れ端などを村人た

ちからもらっていた。人参をやっていると、馬は拗ねたような目で見つめ返してくる。

「よしよし、走りたいよな。」

ずっと繋がれっぱなしだったらストレスもたまるというものだ。だが日中は仕事の関係で自由にさせてやれない。レノンには馬を撫でてやる。

「誰か来るかもしれないから今は無理。夕方になったら走らせてやるから、それまで待ってろよ。」

レノンがそうたしなめていたときだった。微かに、風に乗って呼び鈴の音がする。言っているそばから来客だ。馬の貸出か、ほどこしか礼拝か。困っているなら早急に対処しなくては。

「…はいー!」

返事をしながら駆け出していたときだった。

「……え？」

レノンは立ち止まる。入口にいたのは緑の髪の女性。…どうして。どうしてミレーが。

女性がレノンに気づき、こちらを見る。彼女はレノンの想像していた人物とは違っていた。……そう、あの子の髪は青みがかった緑。この人は真緑。長さも違う。

「……あなたは」

女性の問いに、レノンは自分をかえりみる。もしや林の中の村人か。思いを表にださず、にっこりと笑う。

「こんにちは。見習い神父のレノと申します。どうかなさいましたか？」

これでシラを切れるか。様子見すると、女性は何も疑わない。

「そう…教会のかた……」

女性は虚ろな表情でレノンを見つめる。彼女は一步一步近づいてきた。

「あなたに、お願いがあるの。」

レノンはぞくりとする。なにかが違う。短い髪か？それとも黒っ

ばい、ぴったりとした動きやすい服装か？逃げたい。本能がそうさせる。

「お願いだから私を」

瞬きしたときには彼女は至近距離まで来ていた。…早い！

「私を、殺して。」

女性はレノンにもたれかかったかと思うと、ずるりと力をなくした。

思いがけないことに、レノンは倒れ込む。頭をしたたかに打ったものの、自分が…ミレーにしたように、刺されてはいない。恐怖はゆつくりと去っていった。

確認すると、女性の意識がない。

「……もしもし？」

外傷は見られない。なんだ。持病か？

「もしもし。聞こえますか！？」

レノンは涙の後が残る女性の頬を叩いた。

「そういえばハク、神父様はどんなかただったの？」

買い出しの帰り。両手に荷物を持ったリズは、同じ状態の先輩修道女へ質問した。痛みはみんなが持っている。生きるためには、ゆつくり時間をかけて治さなければいけない。ハクは悲しみに満ちた表情をすることなく思案顔になった。

「うーん、そうね…私も接した期間が短かったからあまり言えないけど…穏やかなかただったわ。」

「そう…。」

しんみりした空気。

「けれど流されず、しっかりとした意思を持ち、博識だったのよ。そのうえしたたかだったわ。」

最後の一文にリズは吹き出す。

「したたか…リランみたいなの？」

「そうね、リランさんみたいなの。」

リズの脳内には高笑いリラン、ハクの脳内は芯の強いリランがそれぞれ浮かんでいる。

「…レノンと気が合いそうね。」

「そうね。」

リズは腹黒仲間として、ハクは慈愛に満ちた神父と神父見習いとしての二人を想像したが、話は食い違うことなく進んでいった。

「…あら、あんなところに人参が。」

教会近くまでできたとき。繋がれている馬の近くに人参が落ちていた。レノンの姿はない。

「…変ね。途中で仕事を置くような子じゃないのに。」

ハクが人参を拾い上げて馬にやると、リズはぼとりと包みを落とす。

「……まさか、村人にばれてなにかあったとか…！」

格段に危険が減ったとはいえ、まだまだ潜んでいる。特にレノンは。籠らせていたのが間違いだっただか。

「……レノンっ！」

リズは教会の中を走る。派手に足音を響かせると、一部屋だけ扉が半開きになっている。

ばたんと開け放すと、中の人物が振り返った。

「リジー!？」

彼は何事もないように、なんらかの作業をしていた。

「ばっかっ！心配したでしょう!!」

リズの右ストレートがレノンに命中。受けたほうがびくびくとするなか、荷物をひとまず片付けたらしいハクが追いついた。

「——ひとまず無事でよかったわ…。馬の世話が途中だったから、林の中のかたに見つかって捕まったと思ったじゃ——」

ハクはベッドに横たえられている人物に気づき、動きをとめた。

「…レノン君、この人は？」

「あ、その件で困っていたんです。」

左頬を抑えながらレノンは黒いものを出す。

「教会の前で倒れてしまったんですけど、その…」
渡されたハクは、ずしりとした重みに我に返る。

「そんなもの持つてくるくらいだから、訳ありみたいで。」
銃はハクに、なぜだか神父を思い起こさせた。

銃はごついリボルバー。しかし見た目と違い、扱いやすさは既存品の比ではない。詰まりも少なく簡単な動作で次弾を発射できる。市場には出回っていない最新型だった。

「王宮は伝統を重んじる：というか保守的だったので、銃は取り入れませんでした。：ですが警備上、情報収集と称して目にする機会は多かったんです。だから確信を持って言えるんですが、あのかたは一般人ではありませんよ」

レノンハクはそう断言した。

女性の一人旅は推奨されない。都市でも夜間は万一のことがあるし、民間もない街の間の道などでは格段に危険度が上がる。どうしても出かけるときは、貧しい者は果物ナイフ、比較的富裕である場合は銃を借りて携帯していた。

「ただでさえ銃はやっと裕福な商人が手にいれられるかといったくらい。まだ猟銃のほうがなじみがありますよね」

弾薬を使う武器といえば、黄の国では大砲。次に猟銃。それでも実際に手にとる者は少数だ。

「：レノン君の言っていたように、裕福な子女ではないかしら？」

「いえ」

レノンは大きくかぶりをふる。

「服装が妙です。動きやすさ重視。しかも訓練を受けたような身のこなしでした。：僕は」

殺し屋だと思っています。

ハクは、ぼんやりと聞いていた。

「確か、巡礼する神父や修道女も、武器の携帯を認められていますよね？」

「：ええ。教会の紋入りのね。基本は中央で清められた銀のナイフ。私も持つてるわ」

いつか、港で双子を殺そうとしたときの。人を救う職のものが、人を殺める物を支給される。武器が清められ、殺めた人物が天に召されると言われても、ハクは疑問を感じずにはいられない。

この矛盾がなんなのか、神父様からは聞けなかったな。

「ただ、一部のかたは銃を持っているわ。神父様も。：レノン君も見ただしょう？」

レノンは渡された古い拳銃を思い起こした。

「それなんですよ。拳銃なんて流通してるのは教会くらいです。こんな最新型を導入する資金は？それに訓練を受けたような動き。教会関係者とは考えにくい。」

ハクは銃を手にとり、グリップ部分に目をこらした。教会支給なら、そこに紋章がある。だが、そこにはそれがなかった。

「そうね：教会のものではないみたい：」

かわりに刻んであったのは、十字架に薔薇の花がまきついているマーク。なにかの組織だろうが、ハクには見覚えがなかった。

「：ともかく銃はこちらが持ちましたし：調べた結果、どうでしたか？」

レノンが女性人二人を待っていた理由。それは身体検査のためだ。身持ちの固い彼は、調べるときも立ち会わず部屋の外で待っていた。

「：他にはなにもなかった。武器はこれだけ」

他に全く所持品がないのが不自然だったが。：目を覚ましたあとに聞けばいい。

「：ひとまず、目を覚ましたらこれは返しましょう。大事なものかもしれない」

「：……ですね、形見という可能性もありますし……。ただ、弾は外します」

ここだけはゆずれないという神父見習いに、ハクは黙考した。

救いを求めてきた者は犯罪者であっても匿う。この双子がいい例だ。危険と隣り合わせのため正当防衛が認められているわけだが、これは人を疑っている。信じることが、神に仕える者の勤めなのだ。

しかし、ハクも含めて人を疑い、傷つけた。命の危険に晒された経験から警戒心は人より敏感。物騒な物の他は身ひとつ。そんな人間が教会の前で倒れたのだから、敵意を持っている人間でもおかしくない。

「…分かったわ。弾はレノンくんが管理して。でもあの人をいきなり追い出さないこと。自分から出ると言わない限り、一緒に生活する。いいわね？」

これが、ハクのできる最大限の譲歩。ぎりぎりのラインだった。彼女の先で、少年は一点を見つめている。

「…わかり、ました」

その言葉に安心すると、ハクは銃を渡す。

「外しかたがわからないから、お願いね」

「あ、はい——」

ガシャンと、花瓶が割れる音が聞こえた。

「今のは、あの方が休んでいる部屋から？」

「…目覚めてパニックになっているのかも。だとしたらリジーが危ない！」

レノンはリボルバーを両手で構えて駆け出す。ハクも後を追った。

「落ち着いて！私はあなたに危害を加えたりなんか…きゃ！」

二人が踏み込んだとき、部屋は惨憺たる状態だった。はめ込み式の分厚いガラスには勢いよく突っ込んだあとがある。カーテンは無理に引きちぎられ、花瓶は粉々。ちょうどそばがらの枕がリズに向かって剛速球で投げられていたところだった。

闖入者たちへと、部屋の二人の視線がむく。女性はやぐらの上で腰を低くかがめて立ち、臨戦体制をとった。

「リズ、大丈夫！？」

「ええ、私は」

レノンはずがハクに抱き寄せられたのを確認して、女性と対峙した。

「落ち着いてください。ここは緑の国との国境付近にある教会です。ここにいるのはみな教会関係者。あなたに危害を加える人はいません」

女はなめ回すようにレノンたちを見回した。

「教会…関係者」

小さくつぶやくと、彼女は棚の上に飾られている小さな銅像を掴んだ。

「…教会…！！」

握っている手に力がこめられる。敵意がふくらみ、ほとばしった。

――まずい、あれで殴られたら確実に永遠の眠りだ。

迷う暇はない。レノンは両手で銃を向けた。

「…動くな！」

女はぴくりと停止する。しかし銅像は握っていて、戦意は喪失していない。

「…銃……」

女は一步一步レノンの方へと近づいてくる。

「もう一度警告します！動かないでください！」

レノンが銃を再度構え直すと、女はだらりと銅像を下げて、笑った。

「……撃てないくせに」

そう、銃を構えてすぐに撃てなかった時点でタイミングを誤ったのだ。見透かしたように彼女はいい、また一步踏み出した。

「…死んじゃえ」

つぶやきと同時に女が跳躍する。そして、銅像を振りかぶった。

「二人とも、出て！」

ハクがリズを連れて脱出したのを横目で確認。レノンとはびすさり、身をひねって床に転がった。どこんという音とともに、ミニテールブルが木片と化す。落下の勢いも加わって、相当な破壊力だった。

「…！」

たらりとレノンは汗を流す。銃を構え直すも、引き金を引くことができない。人を殺したことは、あるけど。あのときの映像がちらついて、あんな思いはしたくないと心が叫んでいる。

「構えるだけで撃てもしないやつが！」

女はばねのような瞬発力で走りながら像をふる。鼻先を風がかすめる。

「銃なんか持つんじゃない！」

無駄がなく、一切の手加減がない攻撃だった。だからふいに軌道がそれたのを、レノンは見逃さなかった。

「…っ！」

リボルバーの銃口をつかみ、グリップ部分で女の胸のあたりをうつ。

加減はできたかわからない。女性なので、どうかあざになっていないように。

——気絶してもらえれば、と思ったのに、女は座り込みながら殺意をもってにらみつけるだけだった。像は離していないが、左手を苦しそうに胸へもってきている。

「――それ以上は、動いちゃだめよ」

髪も服も。白いハクが部屋へ静かに入ってくる。女はなにも言わなかった。ハクはレノンに目配せをする。

「どうしてここまで敵意を持たれたのかはわからないけど、これ以上激しい動きをしたら…命はないわ」

レノンの目の前では、黒い服の上から、ひととき濃い染みが広がっている様がおきていた。様子を伺っていたリズは、意を決したように部屋に踏み込み、いとも簡単に女がにぎっていた像を奪い取る。「…心臓のあたりに、怪我してたでしょ。どこかで手当てされたみたいだけど、包帯まいてるだけだから傷が開くわ!」

像を取り返そうとした女は、手を伸ばそうとして失敗した。

「…かえ、せ!」

「誰が! あなたに必要なのはベッドよ!」

リズは息も絶え絶えの女を起き上がらせる。

「ほら、包帯変えないと…。塗り薬程度なら出せるから…。ハク、手伝って! レノンは…!」

「こまごましたもの持ってきます!」

リズの指揮のもと、見習いたちはおのおの動き出した。

「ありがとうなんて言わないわよ」

女はおとなしくなったものの、まだきつい目つきのままだった。

恩に着せるつもりはない。だが、どう接すればいい。手をこまねく修道女と見習い神父はぐっと言葉を飲み込む。

だが一人は違った。

「ええ、思い出したときに言ってもらえればいいわ」

あっけらかんと返すリズに、レノンたちだけでなく、女も目を丸くした。

「…へえ。わかったわ」

女は薄く笑った。

「…私は修道女のハク。こっちが神父見習いのレノンで、その子が修道女見習いのリズよ」

つかみはこれでいいはずだった。しかし興味なさげな女は、自分の名前を告げずにハクに向き直った。

「神父は？見習いより大事な存在でように」

ぞんざいな言い方に、ハクは目を伏せる。

「…少し事情があって、今はいいわ」

女は窓のほうへ顔をやった。

「そう……」

ぴんと張り詰めた糸が切れたのを、三人は確認した。やっと落ちて着いたのかもしれない。

だが次の瞬間、女はベッドから跳ね起き、部屋から飛び出した。

「あなた！どこ行くの！」

ハクの静止を聞かず、レノンに蹴りをいれ、女は姿を消す。

「――待ちなさいよ！安静にしてなきゃだめでしょ！」

悶絶しているレノンと息切れしているハクを尻目に、リズは全速力であとを追った。

——塩の匂いが鼻をついた。爽快感？いいえ、罪悪感。裸足でま
とわりつく砂をはねとばし、あたしは波打際を越える。

「待ちなさいよ！」

ふと見遣ると小さいほうの修道女は性懲りもなく追い掛けてくる。
意外と早かった。女の子なんだからそこまで走らないと思ったのに。
あたしはなにも聞こえないふりをして、ざぶざぶと海へ入った。
砂が離れていって気持ちいい。くるぶしまでの海水がほどよい温
度だ。もつと。もつとこの水に包まれない。

「なに、してんのよっ！」

少女が息も絶え絶えになりながらまだ走ってくる。水の中を歩く
と速度が落ちる。あたしは進むことをあきらめ、力を抜いた。

飛沫がとんで、また海に戻る。短く切った髪が水を吸って重たい。
そして、自分の一部が水に混ざりながら出ていく。

声はあげなかったけど、意外ときつかった。傷に塩を塗り込むっ
て、こんなことだったんだ。

「馬鹿、やめなさいよ！」

追いついてきた少女に、あたしは引っぱりあげられた。邪魔をす
るな。振り払いたいのにながでない。

「死ぬ気なの！？ほら、また傷が！」

多分包帯はふやけて破れている。

今銃があったなら、耳障りな声なんか掻き消せるのに。

「身体冷えちゃう！今何月だと思ってるの！」

あたしは今更身震いした。飲んでしまった海水を思わず吐きだし
てしまう。優しくさすってくれた手に感謝して、あたしは自分が情
けなくなった。

「助けてくれなんて…言っていない」

少女は顔を赤くし、あたしを見た。

次の瞬間。鈍っていたあたしの神経は痛みを感じた。

「あなたが、あなたがどんな人なのか私は知らない！…でも、勝手に死んでいいなんて、そんなことは絶対駄目なの！」

少女はスカートの裾を海水にぬらしながら泣いた。

あなたはなぜなのでしょう。誰のためになくのでしょうか。あなたのため？いいえ、こんな考えおこがましい。きっとこの子は大切な人を、亡くしたんだ。

あたしと違って、誰かに不条理に奪われたのかしら。

あたしはそっと手をのばして、少女の涙をぬぐってやった。

涙があたたかいなんてこと、あたしはしばらく忘れていた。

見張りは一人。24時間三交替制。ぴったりと張り付かれ、部屋は一人で出られない。突破してもトラップがしかけられていて、誰かがすぐ駆け付けてくる仕組み。あたしの状態が万全だったら、こんなトーシロ三人わけもないのにね。

「いいかげん一人にさせてよ。なんのための個室なの？」

意味はないと知りながら、あたしはなんとなく言ってみる。こうでもしないと気が滅入るというものだ。

「一人にしたらあなた逃げてなにをしかすかわからないじゃないですか。それに昼間は僕が、夜間はちゃんとハクさんカリジーに代わっているからいいでしょう」

予想通り。こちらをじとめで見遣りながら言い放つ少年。この見習い神父、かたい。攻略は難しいな。かたければいいってわけじゃないのに。

「…よければ名前を教えていただけませんか？いつまでも『あなた』はよそよそしいですよ」

名前を教えても、あたしたちはよそよそしさを崩せないんじゃないかな。思わず言いそうになったけど、あたしは話を進めることにした。

「いいわ。ただし、あんたたちの名前を先に聞いてからね」

少年は微かに目を細めた。

「僕たちの名前は、最初にお伝えしたはずですが」

「ええ、聞いたわ」

だったらなぜ、と彼は目で訴えてくる。あくまでも自分はなにもしないつもりね。

「…小さいほうの、修道女。名前はほんとにリズなの？」

「…いったいなにを」

…ぼろがでた。目が微かに泳いでる。そんな程度で人を騙そうな

んで、甘いわよ。あんた、嘘をつくのに向いてないわ。

「大きい修道女さんはあのことをリズと言っていた。あんたはリジーって呼んでる。みたところあんたたちは年の近い兄弟かなにかでしょう。リズってせっかく短い名前なんだから、そのまま呼べばいいじゃない」

「……母親が、エリザベスと名付けようとして、王女と同じになるのでリズにしたんです。リジーはその名残で、両親の呼び方がうつったんですよ」

即興にしてはうまいこと言うわね。ただ、甘い。

「……そういえば、リジーは……エリザベスの愛称ね。リズも同じ。このまえ王女が処刑されたけど、それはそれは金髪の美しい子だったらしいわね」

少年の手は背中後ろにまわされている。大方ベルトのあたりかな。

「……やめとけば？ あんたにリボルバー（それ）は使えない」

聞くとは思えないけど、一応忠告。案の定聞かなかったけれど。

「中央のほうではね、王女が実は生きているって噂が、これでもかってほどまわってるのよ。一体どうやって逃げたの？ ……悪ノ娘と召使」

銃声が響き、一人の人間が倒れる。修道女たちは、青筋を立てながら音のほうへ向かった。

火薬のにおいが立ち込め、穴のあいた枕とかすった掛け布団から羽毛が舞っている。

「だからやめとけて言ったのよ」

銃を握りしめたまま、レノンが床へうずくまっているところだった。

女は無傷。――振り返ち？

「レノン！」

リズが飛び出して大変そうに助け起こすと、彼は低く呻いた。

「…レノン、だっけ？みたところ銃を握るのは初めてよね？撃つてみた感想はどうかしら」

少年はゆっくりと起き上がり、右手の銃を手放ないまま左手で右肩をさすった。

「最悪です。なんですか、あの反動」

まあ、初心者ならこんなもんよね。

「弾丸をものすごい速度で発射させてるんだから肩に負荷はかかるわ。しかもそれ、口径が大きいから余計」

正気の沙汰じゃない。小さくつぶやく彼を見て、あたしは薄く笑う。

そう。殺傷能力は十分にある三十二口径のリボルバー。護身用の域を越えている。狂気だわ。

「…まあ、最悪って言うても、よかったわね。あたしが生きてて」
普通だったら死んでるわ。

「……悪運の強い」

「ちょ、レノン、まさか撃ったんじゃないでしょうね？」

小さい修道女が体をかたくする。

「…あー」

「そのまさか。撃たれちゃった。あたしには当たらなかったけど」
白い修道女はため息をつき、小さいほうは肩を震わせている。

「リジー、さん…？」

「ばかあ！」

あごにパンチがヒット。もうひとりも軽くぺちつとやっている。
見ているかわいそうになってきたけど、とめるべきなのか。

面白いからもう少しみてみよう。

「……それで、あなたは本当に、僕らを殺しにきたわけじゃないんですね？」

頭にたんこぶ、頬にはあざをつけたレノンがベッドの主を確認する。女性は病人：怪我人という名に似合わず、けだるそうに頬杖をついた。

「だから、何回も言ってるでしょう？ あんたらを殺してなんの得があるのよ。第一、最初から殺すことが目的ならまどろっこしいことせずにとくにやってるわ」

レノンはうつむき、またも顔をあげる。

「だったら、どうして出自なんて」

「なんとなくよ。深い意味はないわ」

あっけらかんとした様子に、双子は互いに目配せした。

彼女は秘密を知ってしまった。漏らしでもされたら、またも逃亡生活の始まり。

「…あなた、何者なんですか？ 返答ー」

「返答次第ではただじゃおかない。そんなお決まりの台詞を聞かされるのかしら？」

女はレノンの言葉にかぶせる。

「あたしは情報屋でも、革命政府の手先でもない。王制復古運動家でもないわ。ここまで言ったら十分じゃないかしら？」

明確にはしないけれど、最初とは違って徐々に情報を出してきている。

だったら。

「…殺し屋の線は否定しないんですね」

レノンの突きに、女は無表情だった。

「…だんまりはやめてください。あなたは僕らの秘密を知った。教会は保護した人に無理な詮索はしないけれど、もうそうも言ったら

れない」

情報は最大の武器となる。だから一歩扱いを間違うと大変なこと
に。

「…別にしゃべってもいいけど、随分と信頼されたものね。話したこと全てが真実だとも思ってるの？べらべら嘘を並べるだけかもしれないのに」

やれやれといった体で首をかしげる女は、自分をまっすぐに見つめる少女を見た。

「…あなたはそんなことしない」
揺らぎがない瞳とまっすぐな声。

「…あなたははぐらかしはするけど、嘘は言っていないわ」
リズはしっかりと、女と目線を合わせた。

愚直なまでに信じている彼女を騙すなんて、わけもないことだと思っ
た。けれど。

「…：馬鹿みたいに信じてたら、いつか痛い目見るわよ」
どうして信じられることができるのか。疑問に思うことしかでき
なくて。

「…裏切られても、信じるべきだと思うの」
暗い表情を垣間見せた彼女に、女は確信した。
この子はただ純粹無垢な、なにも知らない少女じゃない。

「……………そういうこと、言っちゃう？」
もう馬鹿らしくなってしまうって。疲れたといったほうが合ってい
るかもしれない。

「…くだらない話になるわよ」
女は長い息を吐いた。

3-7 回想

「メグ！」

教会の裏庭で一息ついていたメジアン・ポーカーは、自分を呼ぶ声にぴくりと反応した。自分の黒いタートルネックとフレアスカートとは対照的に、彼は白いワイシャツに黒のスラックス。適度に主張している茶色の髪は地毛だ。メグは眉をあげにこにこと笑う彼をねめつけた。

「…だから、何回も言ってるでしょう？あたしをメグって呼ばないで、テル」

分厚い皮張りの聖書をもつ少年は、笑顔を崩さないままだ。

「でもメグはメグでしょう？あ、訓練お疲れ様」

「そんな、いずれ警護の任につくのに当然のことーって話を反らさないで！」

濃い緑の髪を一つにまとめたメグは、銀のロザリオを揺らした。

——ここは、黄の国で最大の影響力をもつ宗教組織の敷地内。首都郊外にどっしりと存在する教会本部表の顔は、巡礼にくる信仰者があふれる聖地。裏の顔は、未来の上級神父、修道女養成機関。例外はあるものの、ここにいる若年層のほとんどが教会の幹部候補生だ。

「あたしの名前はクローネ！シスタークローネよ！そんな変な名前、呼ばないで」

相対するテル：ラフテルも、見かけこそ頼りなさげだが、もう幹部について業務を学んでいる。地位でいえば、田舎教会を管理する神父より高い。普段丁寧な言葉遣いを義務付けられている教会関係者にとって、親しい間柄での世間話はささやかな息抜きだった。

「そっちこそ僕をテルって呼んでるんだからおあいこだよ」

ラフテルはめがねをくいとずりあげた。

信仰心篤い良家の子女が神に一生を捧げる。そんな麗しい題目は

すでに過去のもの。現実には、緩やかに増えてきた孤児が、半ば強制的に神職についている。メグもラフテルも、教会で新たにつけられた新しい名前と共に、世俗とは交流を断って生活していた。

「…もう」

こんな軽い口をたたいているが、ラフテルはメグより年上だ。これが年上の余裕というやつなのか、それとも自分がまだ青いだけか。メグは時間の無駄とみて、それ以上の反論をやめた。

「…で、テルはこんなところで油売ってて大丈夫なの？ 仕事は山ほどあるでしょう？」

教会運営から帳簿のつけかた、もちろん祝福の言葉も。学ぶことはたくさんある。

「大丈夫、全部終わったよ」

あっさりともなげに言う一人。…さすが、幹部候補生のなかでもずばぬけて頭が切れるというべきか。優秀すぎる。

「…：王妃様がもうすぐ出産されるんでしょう？ 立ちあわなくていいのかしら」 「僕はそんな地位にいないよ。立ち会うのは教会一の医者とその助手、大司教様と司教数人」

「謙遜しなくてもいいわよ、未来の大司教様」

テルはわずかに顔を曇らせた。

「…やだな、そんなの」

地方で一生を終える神父からしたら、喉から手がでるほど欲しい地位。それをこいつは、いらなないといったのだろうか。

「…ねえメグー」

「おーい！」

メグが立ち上がると同時に、三十代の神父が近づいてきた。神父といっても、孤児たちをとりまとめる寮母のような存在だ。

「つと、ジョーカー。司教様から呼びだした。早くいったほうがいい」

ラフテルは名残惜しそうな顔をする。

だめよ、そんなの。

「引き止めてごめんなさい。さ、どうぞそちらへ」

メグはとびきりの笑顔をつくって少年を促す。

「あなたに神のご加護がありますように、ブラザークロス」

「…あなたに神の祝福を、シスタークローネ」

二人は互いの名前を読んで、別れた。ラフテルは緊急事態なのか、足早に去っていく。

今から人の命が生まれる瞬間を見るんでしょう？ いずれあなたは有力者の赤子に洗礼名を授けるようになる。あなたがどれだけ隠そうとしても、隠しきれないわよ。

同じ孤児でも、あたしとは階層が違うよね。

一緒の場所にしようとしなくて。

3-8 回想2

「ジョーカー、何をしている、こんなチャンス滅多にないんだぞ！」

出産の場からやや離れた廊下で、司教はあけすけにそう言った。ここ、教会本部では病院としての機能も兼ね備えている。――有力者の出産。命を落とす危険性が高いので、うまくとりあげると教会の権威を高めるチャンスだ。しかも相手は時の王妃ときている。今後のつきあいを考えると十分すぎるほどの優良物件だった。

「…申し訳ありません」

テルが軽く頭を下げるとそれで満足したのか、司教は顎についてくるよう促した。

「大変な難産だ。あれは危ない」

ベテランのシスターが雁首そろえて処置しているものの、遠目からでも容態は悪い。

「まったく、面倒なこと――」

異変に気づいたのは、じっと観察していた格下のほうだった。

「司教様、容態が！」

テルの鋭い声に、司教はすっとんで部屋へと駆けていく。

「どうした、なにがあった！」

テルも部屋へ駆け込んだが、誰も答えない。今この部屋は戦場だ。

「……王妃様、生まれました！かわいらしい女の子ですよ！」

年かさのシスターがそういうも、王妃は少しの間見遣っただけで、また苦痛に歪む。

シスターたちの顔色が変わった。

「…まさか」

生まれ落ちた命が声を上げて泣く中、もうひとつの命の姿が現れた。

「……男の子、です」

ほうけたようにつぶやくシスターは、しかし次の瞬間かたくなる。

「…はやく、処置道具もってきなさい！」

室内が音を取り戻しはじめる。王妃が静かに見ているなか、男の赤子は自分の存在を主張しない。

取り仕切っていた修道女が、王妃に早口で断りを入れ、赤ん坊をたたいた。

「泣くのです、いいことから！」

しかし、聞こえてくるのは片方だけだ。

人をうつ音、足音が、不安を増長させる。

「…司教様」

場違いな鐘の音が三回響いた。

ここの教義では、双子は罪の証とされている。それが仮にもこの国の王妃の腹から生まれた。しかも、一人は死産。最悪なことに、王妃は臍げながらも意識はあったので顛末を知っている。

「…めんどくさ」

あたしは心底そう思った。祝福なんかなくてもいい。何不自由なく暮らせる王族の子供はその存在自体邪魔だ。生まれたら気に入られるための媚び、死んだら政争。一つの命が生まれることで、一体どれほどの血が流れるのだろうか。

王妃の絶叫が響き渡る。私は耳障りだと思いながら観察を続ける。なだめているがおろおろしているシスターに、顔面蒼白な司教。そんな空間で、テルが目を閉じて小さくつぶやいていた。

ここからでは聞こえない。祈るか鎮魂の聖句。

誰の耳にも届かない、一人の祈り。

祝福は、誰のために？

あなたの祈りはいったいどこに？

3-9 回想3

「テル」

彼はあたしの呼びかけに答えることなく、膝に顔をうずめていた。幸運なことに今まで人の死に立ち会ったことがなかったから、ショックが大きいのかもしれない。

だからって、神父が取り乱しては駄目よ。あの司教よりはいいけれど。でも。

「……生まれたばかりの赤ちゃんがあんなことになって。辛いかもしれない。でも、こんな」

仮にも神父が、膝を抱えて泣いているなんて失態、教会本部の間が許すはずがない。

「……助けられなかったんだ」

「それはテルのせいじゃない。仕方のないことよ」

「……あの子はまだ生まれたばかりだったんだ」

「仮定の話をしても仕方がないわ」

「……でも」

あたしはこの話が無駄だと感じた。あたしがここまで言っているのに、テルは何も変わらない。

「……なんなの。神様が助けてくれなくて、自分の信じるものがなくなっちゃったからそこまで落ち込んでるの？それとも自分の力が及ばなかったことに嫌気がさした？」

教育係に言われこそすれ、階級的には下に位置する修道女にここまで言われたことはなかったのだろう。テルは黒みを帯びた目でこちらを見ながら顔を上げた。

「なにをそんな。……両方だよ」

首にかけたロザリオのチェーンが、首筋に固い感触を残す。たまらなくなつて、あたしはテルに近づいた。

「仮にも神父が――」

髪の毛を引っ張ると、テルの髪は染めたものではないとわかる。前髪で隠れたやや太めの眉が見えた。思いがけない痛みにテルの目が少し揺れる。

「仮にも人を導く役割の神父が、ふらふら悩んでんじゃないわよ！——あんな場面で、顔面蒼白になりながらも祈りの言葉を言ったテルは、もう立派な神父だ。」

「神父にだってどうにもできないことはあるでしょう！？」

——だから悩むな。あたしはテルが苦しむとこなんて見たくない。

「実際頑張るのは産む当人と赤ちゃん、取り上げるシスターじゃない」

だからテルは。

だから、テルは。

「…悲しいことを素直に悲しいと言ってなにが悪い！？」

あたしは思いがけない力によろけた。いつだって優しいテルが、乱暴に振り払うはずがない。無意識のうちにそう確信してしまっていた。

油断。甘え。

「運が悪かったとも、僕に責任がないとも、言えるわけがない！流れ作業で日々の義務を果たす神父なんか、僕はなりたくない！」
あたしはテルに触れることができなかった。目の前の人間は、潔癖すぎる。白すぎて、近づくだけで汚してしまいそうだ。

「不器用だと思う。…けど、感情をなくしたくないんだ。日誌のページにはしたくない。…：わりきれない」

あたしは自分が小刻みに震えるのを感じた。彼は危険だ。彼は、間違いなく伝導者。神職にふさわしい人間だ。それに比べて自分は「…理想論！夢想家！…そんなふうに生きていくなんてできない！」

あたしは吐き捨てて、テルの前から走り去った。
はやく、あの場からいなくならないと、私は泣いてしまおうと思った。

ラフテルが祝福を任された妊婦は、咎人の妻だった。夫はすでにない。しかも、彼女は身体が弱かった。身重で暮らしていたことが奇跡的なくらい。：最善は、子供が無事に生まれてくること。最悪は言わずもがな。死人がでる前提の出産。始めから哀しみが約束されていた。

「さあ、目を閉じてください」

誰もやりたがらない仕事がまわってきた。けれど、彼女にはいつものように笑いかけ、なにも心配はいらないかのように錯覚させよう。それこそが神父の勤めなのだ。

「ねえ、お若い神父さん：？」

妊婦は長い髪を揺らしながら緩慢に首を動かす。ラフテルは我に返った。

「もし私が死んだら、生まれてくる子供はどうなりますか？」

——まともに目があった瞳の奥は、気休めを求めてなどいなかった。張り付いた笑みが、静かな矢に射ぬかれる。

「：なにをそんな弱気なことを！」

シスターがフォローしたが、真実のはぐらかしにすぎない。ラフテルは決心の固さの前では作り物など無力だと悟った。しかし、真実を言うことはできない。

「：私は謀反者の妻。生まれてくる子供たちは、罪人の子供ときつと蔑まれる。私は守ってやれない」

ときおり生みの苦しみにたえながら、彼女は声をしぼりだす。

：引き取り手がいない子供は、教会が面倒を見る。それが幸せなのか。ラフテルにはわからない。

「生まれてきたくなかったと思われるくらいなら、私と、一緒に：」
ラフテルが声をかけられずにいるときだった。

騒々しい音とともに、一人前にやっとなるかという年頃の男女が

室内に入ってきた。二人は妊婦にかけよると、片方の手を握りしめる。

「お姉さん、気を確かに！お兄さんはきっと生きることをお望みです！」

「姉上、生まれてくるこはみんなで育てるんだ！僕は兄上みたいにはなれないけど、家族を守るくらい甲斐性はある！」

ほうけていた妊婦の目から静かに涙がこぼれ落ちる。そして見違えるように彼女は力んだ。

「頭が出ていますよ！頑張って！」

ラフテルの目の前で、みな真剣に今を生きている。壁を乗り越えようとしている。立ち尽くしているだけの自分は、場違い。

「神父様、なにをしてるんですか！」

自分が役立たずと言われたみたいで、思わずびくりとした。よくみると、同じ年頃。こんなにも人への働きかたが違うから、自分の力のなさが身にしみる。

「あなたはあなたの仕事をやってください！」

金髪の闊達そうな少女は、物怖じせずにこちらをみた。

「：僕の、仕事？」

なにができるというのだ。こんな無力な僕なんか。

「あなたは、神父なのだから。：祈ってください！お姉様と赤ちゃんの無事を。神に近いあなたがやらなくちゃ、届かないかもしれないから：っ！」

神父とは、なんだろう。ただ説教をし、効果のあるないは判別できない。

本当に影響を与えることができるだろうか。もし可能性があるなら。

ラフテルは静かに両の手を組む。

僕は彼らの幸せを祈ろう。笑顔になるためなら、代償も厭わない。

——大変な難産。時間の感覚が鈍っていたなか、赤ん坊は生まれた。鐘の音が時間を知らせる。3時のおやつは、食べられそうだ。

双子の赤ん坊、小さな息をしつつ、満ち足りた顔の妊婦。

「…ありがとう」

僕になくて彼女にあるもの。

僕は、信じることにした。

黒のスカートを翻し、あたしは風を切って歩く。太ももに吊り下
さげたそれは、もう重さを感じないようになっていた。

「あなたに神の祝福を！」

赤い衣装を身に纏ったシスターが、菓子を行き交う人々に配る。
こんなただのバラマキよね。こんなはした金からつくられた甘
いだけの物体が幸福なんて、笑える。

「ママ、サンタさんはくる？」

「いいこのところにはね、プレゼントを持ってやってくるのよ」
行き交う親子連れの声が、頼んでもいないのに耳に留まる。

…いいこ？

あら、お母さん。ちゃんと教えてあげなくちゃ。悪いところにも
サンタは来るわ。優しいおじいさんなんかじゃないけどね。

所詮あたしはもらえない。教会関係者だからじゃない。こんな目
をした子供に、「優しい大人」が菓子を渡すとは思えない。

…ただの嫉妬かしら。幸せそうな家族に対して。

「……クローネ？」

柔らかい、聞いていて心地いい声の主は、かごを持って菓子を配
っているテルだった。柔和な笑みが余計にいらつく。

「…あら、お仕事ご苦労様です」

反射的に営業スマイルを投げつけると、テルはかごを手近なシス
ターに預け、こちらへとやってきた。

クローネなんて言うから反応してしまった。…話すことはない。
あたしは後ろを振り返らずに歩いた。

「クローネ待って」

人が多い手前、スカート姿で走るわけにはいかない。頑張っ
て歩いても歩幅の違いが如実に出てきてしまう。

「…メグ！」

勢いよく振り返ったと同時に、あたしは手首をつかまれる。対等だと思ったのに、もう差は隠しようがない。

気持ちがないまぜになる。あたしはテルをにらみつけた。

「…ごめん」

申し訳なさそうに、テルが手を離す。あたしは無言で先を促した。

「…や、用ってほどじゃないんだけど」

…だったら呼び止めるなばか。なにかあったんだと思うじゃないか。

「…やめてよね。かごを押し付けられたシスターだって迷惑する」
責任感の強いテルなら、この言葉で罪悪感是十分感じる。でもだめ。足りない。

「……昨日の今日でしょ？なんで目の前で人が死んで、今日は普通に笑ってられるの？」

予想どおり、テルはぐっとつまった。もっと、悲しそうな顔を見せて。あたしはあなたを傷つけたい。

「……昨日泣いたのは、嘘？」

性善説なんて信じない。あえてゆずってもいずれ汚れる。テルも染まってしまうばいい。

「――違うよ」

彼は穏やかな調子を崩すことなく答えた。

「昨日僕は、立ち会った赤ちゃんを見送った。ほんとに、つらかった。けど、僕はだれかのそばに寄り添って、支え祈るのが仕事。もつとつらい人がいるのに、僕が悲しい顔してられないからね」

テルは陰のある笑みを浮かべた。

「…メグこそ、どうしたの？」

あたしは、テルの前でのメグを忘れていた。

「…うるさい」

なんであなたは汚れないの。

「――え？」

「……偽善者のごたくなんか聞きたくない！！あんたの哀れむよう

な目なんか、あたしは嫌いっ！」

伸ばされた手を振り払って、あたしはかじかんだ手をポケットに入れて小走りに離れる。テルは、少し躊躇して、踏み出せないままだった。

金色のロザリオがまぶしすぎる。あたしには見ていられない。なんであんなに白いままなの。それにそんな目でみないでよ。心配されてんのか、哀れんでんのか、業務なのか気持ちなのか、わかんなくなる。

「…っ、」

誰かが目の前で死んでも泣けないあたしは、誰にも見られないように泣き顔を隠して歩いた。

テルが覚悟を決めた偽善者なら、あたしは弱い、卑怯者。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4801p/>

悪ノ役者 ある修道女の記録より

2011年8月4日03時19分発行